

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第1号 令和5年(2023年)5月29日発行

過ぎ行く春が惜まれる頃となりました。先日は第2回プロジェクト研究会に御参加いただきありがとうございました。今回のプロジェクト研究会でも、校内研究を通して子どもたちを育てていきたいという研究委員のみなさんの熱意がひしひしと伝わってきました。さて、校内研究活性化プロジェクト研究通信(以下、プロ研通信)では、研究会での学びを研究委員の先生方のみならず、より多くの先生方と共有したいという思いでまとめていきたいと思っております。この通信が研究委員のみなさんの振り返りになるだけでなく、実践校のみなさんの校内研究推進の一助となれることを願っています。

第1回 プロジェクト研究会 概要

第1回のプロジェクト研究会は、「研究の目標を共有し、校内研究活性化のヒントをつかむ」をめあてに、研究委員のみなさんと「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう校内研究を活性化させる研究の第一歩を踏み出しました。

「新たな教師の学びの姿」とは？

- 変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという

「主体的な姿勢」

- 求められる知識技能が変わっていくことを意識した

「継続的な学び」

- 新たな領域の専門性を身に付けるなど強みを伸ばすための、一人一人の教師の個性に即した

「個別最適な学び」

- 他者との対話や振り返りの機会を確保した

「協働的な学び」

『『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等 の在り方について』

(中央教育審議会答申)



これら四つの姿を合わせた姿が「新たな教師の学びの姿」です。

校内研究を通して、先生方が自分のニーズに応じて主体的に学び、「新たな教師の学びの姿」を実現することで授業の質が向上し、子どもたちの成長につながっていく…そのような校内研究を、今年度の滋賀県総合教育センターのプロジェクト研究を通して実践校のみなさんと共に実現していきたいと思っております。

第1回プロジェクト研究会の研究委員のみなさんの振り返りより(一部抜粋)

- ・まず、「なりたい自己」について考える時間を設けたい。校内研究は難しく、失敗してはいけないという雰囲気を取り除けるように、グループ作りや研究の場の設定を見直したい。
- ・一人ひとりの最適な学びは、子どもだけでなく教師にも大切だという新たな視点がもたらえてとてもよかったです。

第2回 プロジェクト研究会 概要

第2回のプロジェクト研究会は、校内研究主任パワーアップ研修〔小学校・中学校〕〔第1回〕に参加するという形で行いました。研究委員のみなさんには、前半と後半で会場を移動していただき、自校の校内研究についてより詳しく分析、考察していただきました。

13:30～ 校内研究主任パワーアップ研修に研究メンバーも参加!

初めに、SWOT分析の手法を用いて、自校の校内研究を分析されました。受講者は、自校の強み・弱みについて具体的に記述し、その後の協議でも主体的に交流しておられました。

次に、令和4年度校内研究活性化プロジェクト研究の発表を通して、児童生徒一人ひとりの確かな学力の向上につながる校内研究について学びました。校内研究における「共通理解・共通実践」の具体的な実践事例を知り、自校での取組に生かす手立てを考えました。



校内研究主任パワーアップ研修〔小学校・中学校〕〔第1回〕の様子

14:45～ 第2回プロジェクト研究会のみ別室に移動して実施



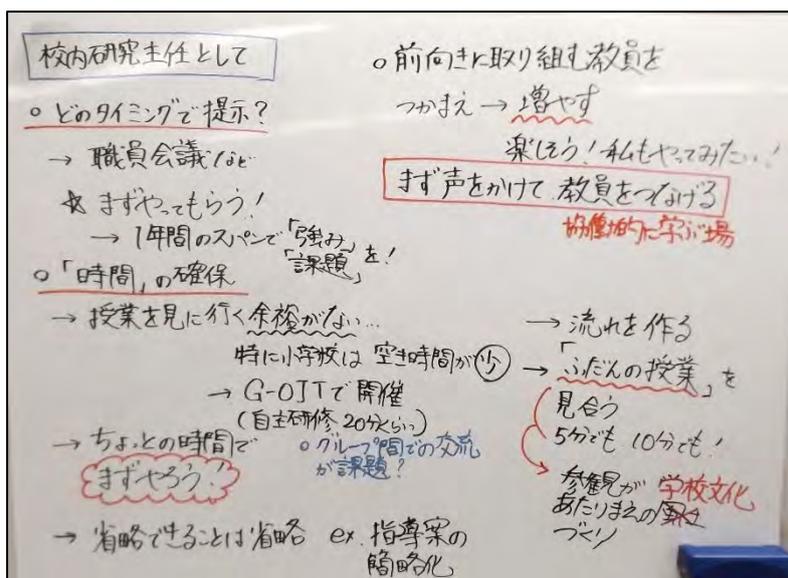
プロジェクト研究会にてSWOT分析をする様子

後半は、別室に移動後、今度は「新たな教師の学びの姿」という視点で改めてSWOT分析の手法を用い、各校の先生方を思い浮かべながら分析をされました。その後、クロスSWOT分析の手法を用い、各校の課題について、具体的な解決策を見いだせるように取り組みました。その中で、共通の課題として、“研究の進め方の共有”と“参観や指導案検討の時間の確保”が挙げられました。そのことについて、5名の研究委員のみなさんで協議された結果、以下の通り、具体的な手立てをいくつか見いだされました。

「研究の進め方の共有」と「参観や指導案検討の時間の確保」に向けて

- ・小・中学校ともに、職員会議で5～10分の時間をとることで、校内研究に関わる共通理解を図る。
→共通理解が図れたら、まずはやってみることが重要。短期、中期、長期の目標を立てて計画的に!
- ・G-OJTはグループリーダーに運営を任せることで、ちょっとした隙間時間に集まることも可能になる。
→時間の有効活用は大切。全体会のみが校内研究ではない。
- ・小学校では、テストの時間を活用することで、短時間でもお互いの授業を参観できる。
→各学校の実情に合わせて、授業を参観し合うことが当たり前の学校文化を作る。

〈協議の様子を記録したホワイトボードの写真〉



(研究委員の先生の振り返りより)
 本校だけでなく、どこの学校も「時間の確保」と「研究の方法やタイミング」が課題になっています。だから、校内研究そのものの取り組み方を考えていく必要があると気付くことができました。



SWOT 分析・クロス SWOT 分析とは?

SWOT分析	
目的：本校の校内研究が「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう校内研究となるようにする。	
内部環境	外部環境
Strength (強み) Strength (強み) : 本校の長所や得意とするところ。内部環境のプラス要素。	Weakness (弱み) Weakness (弱み) : 本校の短所や苦手とするところ。悪影響を及ぼすと考えられる内部環境のマイナス要素。
Opportunity (機会) Opportunity (機会) : 社会や教育環境の変化などにより、プラスに働く外部環境のプラス要素。	Threat (脅威) Threat (脅威) : 社会や教育環境の変化などにより、悪影響を及ぼすと考えられる外部環境のマイナス要素。

クロスSWOT分析		
目的：「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて具体的な計画を立てる。		
	Strength (強み)	Weakness (弱み)
Opportunity (機会)	機会×強み 本校の強みを使って、機会を活かすためにどうするかを考える。校内研究の成長を目指す時などには、この分析を使うと良い。	機会×弱み 弱みが原因で機会を逃すのではなく、本校の弱みを補強するなどして、機会を活かす方法を考える。
Threat (脅威)	脅威×強み 本校の強みを活かして、脅威による影響を避けたり、また場合によっては機会として活かすことを考える。脅威を避けるだけでなく、可能であれば機会を探す。	脅威×弱み 本校の弱みを理解し、脅威による影響を避ける、もしくは最小限にするためにどうすべきかを考える。リスクを最小限に抑えるための戦略を立てることが重要になる。

SWOT分析とは、マーケティング戦略立案において、初期段階の環境分析に使われることの多いビジネスフレームワークで、SWOTはStrength (強み)、Weakness (弱み)、Opportunity (機会)、Threat (脅威)の4要素から構成されています。SWOT分析では、上記4要素のうち横軸を「内部環境」と「外部環境」、縦軸を「プラス要因」と「マイナス要因」として分析します。この分析方法は学校現場における環境分析にも応用することができ、今回は研究委員のみなさんに本校の校内研究を「新たな教師の学びの姿」の視点から分析していただきました。

SWOT分析をさらに派生させたクロスSWOT分析では、4要素をそれぞれかけ合わせ、具体的な取組について検討をします。

〈研究委員の先生の振り返りより〉



本校のSWOT分析をして、改めて課題と改善点を自覚することができました。

SWOT分析から課題を把握し、研究につなげていきたいと思えます。



各校の強みや課題を十分に分析するには時間が足りなかったと思いますが、限られた時間の中でも研究委員のみなさんは現状を冷静に分析し、自校の強みや課題を発見されていました。学校に戻って様々な視点から改めて分析していただくことで、さらに具体的に自校の強みと課題を把握することができ、「新たな教師の学びの姿」の実現を通じた授業改善、さらには、子どもたちの学ぶ力の向上につながると考えます。センターから提案させていただいている「授業アップデートシート」を活用いただき、先生方が御自身の強みや課題を捉えることで、教師の「個別最適な学び」「協働的な学び」の充実につなげていただければと思っております。

第2回プロジェクト研究会の研究委員のみなさんの振り返りより(一部抜粋)

(1)13:30~14:45 校内研究主任パワーアップ研修で学んだこと

- ・同規模の学校の先生との交流だったので、子どものこと、教員のことなど、悩みも共通していて、ためになりました。もっと時間が欲しかったです。
- ・研究発表の昨年度の実践がすごく参考になるなと思いました。できることから取り入れていきたいと思えます。

(2)14:45~16:30 第2回プロジェクト研究会で学んだこと

- ・限られた時間の中で、いかに教職員にとって有意義な時間にするかが今後の校内研究をするうえで大事な要素の一つだと感じました。
- ・悩んでいることは、他の学校でも同じだなと感じました。深く議論ができて新たな視点をもらいました。時間の確保については、今後も考えていきたいです。
- ・研究委員のみなさんの校内研究の進め方はいつも勉強になります。参考にして進めたいと思えます。
- ・与えられた時間の中で、できることをしっかりとしたいと思えます。どの学校も同じ課題があるということが共有できたので、それを改善していこうという気になりましたが、こういう時間を校内でもとっていく必要があるなと思いました。

(3)「新たな教師の学びの姿」が達成できた場面

- ・様々な教員の方と協働的に学ぶことができ、自校ではどのような取組ができるか、個別最適に考えることができました。
- ・校内研究を活性化させ、子どもたちが楽しく学校生活を送ってもらえることが最大の目標であり、そのための手立て、新たな視点をいつも研究会でもらえるので、本当に勉強になります。
- ・自身の課題を見つめながら、解決への糸口を見つけるために、協議を進めていけたと思えます。継続的な学びが課題だと思うので、学校に戻ったらすぐ実践したいと思えます。
- ・校内研究で抱える悩みを改善するために研究委員の先生方に質問をしたり、自校の研究の現状を再確認したりした場面は、新たな学びの姿となっていたのではないかと思います。
- ・6月から本格的にスタートする校内研究の中で、校内の先生方がより取り組みやすく、学びたい!やりたい!と思ってもらえるように、準備したいという意識を交流の中で高め、研究発表を聞くことでアイデアをいただいた。



各校の課題を解決するために協働的に学ぶ様子

(4)校内研究主任パワーアップ研修〔小学校・中学校〕〔第1回〕および第2回プロジェクト研究会での学びを、自校の校内研究会でどのように生かしたいか

- ・6月は G-OJT での公開授業を控えているので、それが実現し、意味のあるものにするためにこちらから仕組んでいきたいと思いました。
- ・学校での研究に対する雰囲気づくりをしていきたいです。授業に対して「お互いに見合うことが当たり前」「放課後に話し合うのが当たり前」の雰囲気にしていきたいです。
- ・まず、アップデートシートを使ってもらい、1年間かけて作り上げ、来年につながるようにする。授業を積極的に見に行き、仲間を増やす…ことから始めたい。

(5)研修および研究会について、お気付きの点がありましたら記入してください。

- ・もっと話す、聞く時間が欲しいです。一日学校をあけるのは厳しいですが。

第2回プロジェクト研究会を終えて、研究員の思いと今後に向けて

今回は、「研究委員のみなさんが校内研究で取り組む内容をより具体的にするため、協働的な学びの場を提供する」を目標に研究会を企画しました。この目標に向かい、SWOT分析を通して各校の具体的な課題を表出していただくことができました。その解決に向けて話し合う時間を設定できた点は、今回の研究会の成果だと感じています。研究委員のみなさんが、第1回の時よりもさらに自分事として課題解決に向けて熱心に協議され、この研究メンバーで協働的な学びを実現させることができました。

研究会で話題となった内容について、研究委員のみなさんのそれぞれの思いや各校での課題、校内研究の運営方法などを日常的に交流できる場やツールが欲しいという意見が複数の研究委員の先生からあがりました。ある研究委員の先生は、「昨年度パソコンを使って校内での学びの場を提供しようと試みたが、利便性が悪く持続的な取組にできなかった。スマホを活用すればもう少しうまくいったのだろうか」という経験談を話してくださいました。この話を受けて、それぞれの教員が時間を有効に活用できる学びの場が求められており、校内研究活性化プロジェクト研究としてもよりよい解決策を模索していきたいと考えています。

一方で、研究会の進行という視点から振り返ってみると、研究員が話題の焦点化を的確に行うことができているれば、さらに具体的な取組案まで話を展開させることができたのではないかと反省しています。次回以降の研究会では、各校の校内研究の現状を把握しつつ、研究委員のみなさんが互いに学び合えるような研修と、各校の実践により具体的につなげていただけるような研究会にしていきたいと思います。

これから、各校で授業研究会等が始まっていくと思います。日々の校内研究の進め方、授業研究会の持ち方など、必要な時はいつでも駆けつけます。お気軽にお声掛けください！



研究員 いなます けいご 稲益 圭吾

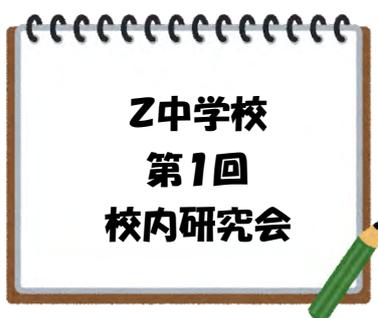


研究員 しまうち ゆうしょう 島内 佑祥

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第2号 令和5年(2023年)6月2日発行

木々の緑が色濃くなる時期となりました。5月24日(水)Z中学校の第1回校内研究会を参観させていただきました。校内研究の初回ということで研究主任から研究主題の説明やG-OJTを取り入れたグループごとのテーマ決定に取り組まれていました。その姿はまさに教員の協働的な学びの姿だと感じました。プロ研通信では、この研究会を「新たな教師の学びの姿」という視点で分析してお伝えしたいと思います。



Z中学校 研究主題

教科の指導と生徒指導の一体化

～生徒指導4つの視点の授業づくりで韌やかな生徒を育む～

注目したポイント

「えんたくんミーティング」を活用した
協議における教員一人ひとりの学びの姿

「えんたくん」とは?

『えんたくん』は直径が1メートル程の丸いダンボールの板です。人々が円座になって、膝の上に『えんたくん』をのせると『場』と『対話』が劇的に変化します。さらに会議、教室、フェスなど人々が集う場所で手軽に使える『えんたくん』は『場』と『対話』を変えるだけでなく、ファシリテーションや課題解決、合意形成の方法も大きく変化させます。」

「えんたくん革命 1枚のダンボールがファシリテーションと対話と世界を変える」2018年 川嶋 直、中野 民夫(著)より

Z中学校では、このツールを校内研究会で使用されていました。丸いダンボールには2つの同心円が描かれていて、円の外側から内側に向かってテーマに沿った内容を協議しながら順に記入していくことで、テーマの焦点化や考えの集約がされていきました。

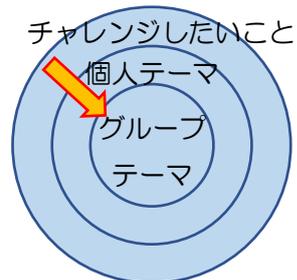


協議で使用された「えんたくん」

「えんたくんミーティング」の進め方

今回は、この「えんたくん」を活用して、グループテーマを決定していく「えんたくんミーティング」が、次のような流れで実施されました。

- ①個人テーマの記入
- ②グループテーマの案とテーマに迫る手立ての協議
- ③ワールドカフェの手法でグループ間の交流
- ④グループテーマの確定



(実際に説明に使用されたスライドを基に作成)

①個人テーマの記入

まず、一番外の円に教員一人おひとりが今年度取り組んでみたいと考えておられること（チャレンジしたいこと）を記入されました。次に、一つ内側の円に取り組んでみたいことを基にした個人テーマを記入されました。



「えんたくんミーティング」の様子

②グループテーマの案とそのテーマに迫る手立ての協議

グループメンバー全員の個人テーマから共通点を探り、グループテーマの案を話し合われていました。この時点で決定されたグループもあれば、決定されていないグループもありました。テーマが決定したグループは、そのテーマに迫る手立てについての協議を始めておられました。

③ワールドカフェの手法でグループ間の交流

ワールドカフェの手法を用いて、グループリーダーのみがグループの席に残り、あとのメンバーは他のグループの席に着き、ここまでの協議について交流されました。

④グループテーマの確定

ワールドカフェで他のグループから得た考えを参考にしながら、グループテーマを確定されました。

教員一人ひとりのニーズ（個人テーマ）と学校のニーズ（研究主題）をつなぐ過程を参観させていただきました。ミーティングの姿から、まさに先生方の「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現させる手立てだと感じました。

では、ツール（「えんたくん」）を使えば、どの学校でもすぐにこのような姿が実現できるのでしょうか。答えは、もちろん「否」でしょう。



活発な協議を生み出すために

参観させていただいた「えんたくんミーティング」の様子は活気にあふれ、教員一人ひとりが主体的に協議に参加していることが一目で分かりました。

そのような活発な協議の場を生み出したのは他でもない校内研究主任の先生です。

そこで、校内研究主任にこれまでの取組についてうかがうと、

4月時点で校内研究主題に向かう四つの視点から一つを先生方に選択してもらう。

→選択してもらうことで自己決定を促し、校内研究を自分事として捉えてもらう第一歩を踏み出す。

5月上旬にグループが決定され、第1回校内研究会で自身が今年度チャレンジしたいことは何かを前もって考えておいてもらう。

→校内研究の中で一人ひとりの課題を設定し、主体性を生み出す。このことにより全校体制の土台が作られる。

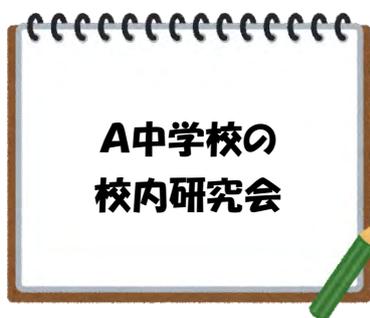
計画的な準備と「えんたくん」というツールがかみ合った結果、活発な協議が生まれたと考えられます。

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第3号 令和5年(2023年)7月7日発行



小暑を迎え日増しに暑くなってまいりましたが、ご機嫌いかがでしょうか。先進校の実践事例に学ぶため、6月14日(水)に昨年度の実践校(A中学校)の第1回校内研究会を参観させていただきました。校内研究の初回で、研究主任から研究主題の説明がされ、グループごとに取り組のテーマを決定されていました。校内研究主任の「教員一人ひとりが『自分事』として校内研究に取り組んでほしい!」という熱い思いとA中学校の先生方の「新たな教師の学びの姿」をお伝えします。



注目したポイント

教員一人ひとりが校内研究を「自分事」と捉える取組

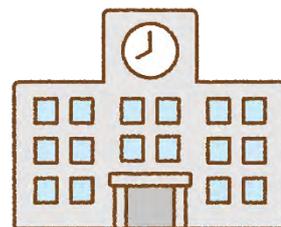
A中学校に関する情報

学校規模 大規模(生徒数700人以上、教員数50人以上)

職員構成 若手が増え、中堅が少ないため若手育成に苦慮されている。特に今年度は、校長を始めとして職員が1/3近く(講師を含む)入れ替わった。

校内研究 昨年度、校内研究活性化プロジェクト研究の実践校として、G-0JTを活用して校内研究を活性化させてこられた。目指す授業や生徒の学びの姿である「A中スタンダード」を活用され、教員一人ひとりの強みや課題に応じた「共通実践」に取り組まれた。具体的な取組では、授業参観促進週間として「宝探しWeek」を設定したり、参観後に「サンクスシート」を授業者に渡す仕組み作りをされたりすることで、「共通実践」を自分の授業改善と結び付けて捉えられるよう工夫されながら実践に取り組まれてきた。

今年度の校内研究では、昨年度から校内研究主任を務められている教諭は、昨年度のノウハウを生かして転入者にA中学校の校内研究を理解・実践してもらおうと共に、生徒の変化から成果を見取することを目標として掲げられ、校内研究の推進に臨まれている。



校内研究主任へのインタビューより

A中学校 研究主題

伝え合う力の育成

～A中スタンダードを基盤にして～

1. 校内研究の進め方

- ① 4月 「A中スタンダード」について説明し、これを基盤として授業改善を行う。「A中スタンダード」については右の二次元コードから『A中スタンダード』を基盤とした組織作り」を参照してください。
- ② 5月 自己分析シートを配付し、自分の授業を見返して、自身の強みや課題を把握する。シートの配付時期は重要で、実態把握ができて「困り感」が現れる頃を見計らっている。
- ③ 6月 同じテーマを選ばれた教員同士で、少人数のグループを編制する。グループで協働して研究主題に迫る。



2. 個人の課題を解決するための校内研究の役割

個人の課題を解決する一番の手立ては授業参観だと考え、重点参観週間(「宝探しWeek」)を設けている。そのうえで「授業アップデートシート」や「サクスシート」を活用して、まずは教員一人ひとりが主体的に授業改善に取り組むことのできる仕組みを作っている。また、全体会やグループ協議などの時間を有効活用できるように事前準備も余念なく行っている。

さらに、各グループで時間を見つけて交流できるように、グループリーダーに声を掛け、交流を促している。ただし、ICTを活用したり、全体会の終了時刻を守ったりすることで、多忙感・負担感を減らす工夫をしている。

3. 研究推進委員・グループリーダーとの役割分担

研究推進委員：各会の校内研究会で取り組む内容について、協議・確認する。推進委員会を開く前に資料を渡し、資料に目を通しておいてもらうことで、推進委員会は意見を吸い上げる場となるようにしている。

グループリーダー：実践交流、グループでの研究を先頭に立って進めてもらう。そのために、校内研究会の前日に招集し、当日の流れや目的を伝えることで、校内研究主任の意図を理解して分科会が進められるようにするなどの工夫をしている。

4. 校内研究活性化のポイント

昨年度のプロ研の中でも同じことが話題にあがったが、何をもって活性化したと見るのか省察が難しい。そこで、今年度、A中学校では、生徒の様子を見取ることを通して、取組の成果を省察できるようにしたいと考えている。そのためには、どの生徒をどのような意図で見取のかを学校全体で統一し、動画やワークシートなどを蓄積しようとしている。

例えば、1回の授業研究会について考えてみると、公開授業をして終わりではなく、日々の授業につなぐところが校内研究と捉えると、授業研究会は全員に還元される取組になると考えられます。

また授業改善を通して、児童生徒の様子が変わり、その変容を教員一人ひとりが授業の中で見取ることができれば、校内研究の成果が教員にも児童生徒にも還元されたと考えられますね。



全体会の取組

1. 管理職による、校内研究の価値付け

管理職の出番については、あらかじめ校内研究主任と相談し、「全員で取り組もう」という機運を高めるには十分な内容と時間が設定されていました（3分程度）。また、校内研究主任を全員で支えていこうというメッセージも伝わってきました。正に“全校体制で取り組む校内研究”だと感じられました。

2. 校内研究主任による、研究主題の共有と意識付け

「今年の研究テーマ、目にした（耳にした）ことはあるんやけど、何やっけ？」という経験はありませんか。A中学校では職員室の一番目立つところに、一番大きな文字で目標を掲示されているので、何もしなくても目標が目飛び込んできます。また、校内研究主任のインタビューの冒頭にもあったように「自分事」として取り組んで欲しいという校内研究主任としての思いもしっかりと伝わってきました。



職員室の掲示板的様子

A中学校の全体会は、単に研究主題とその理由を読み上げて終わりにせず、校内研究をみんなでよりよいものにしていこうという思いを醸成する有効な時間になっていたと感じました。校内研究主任と管理職の連携はもちろん、研究推進委員の先生方とも十分に打合せをされ、校内研究を「自分事」にし、一人ひとりが主体的に取り組める校内研究にしていこうとされていました。そういう気持ちは大切ですね。



分科会の取組

1. 個人の課題の共有

分科会が行われる日までに、教員一人ひとりが校内研究主題と「A中スタンダード」から取組のテーマを選び、個人の課題を設定されました。「自己分析シート」に書き込んだものを校内研究主任が確認してグループに分けられていました。グループで集まるのはこの日が初めてで、お互いに個人の課題は知らないの、グループテーマに向けた思いも併せて共有されていました。

2. グループテーマの作成

個人の課題やその思いを丁寧に聞き合うことで共通点を見つけたり、アドバイスをしたりしながら、グループテーマが練り上げられていきました。今後の実践に「自分事」として取り組むためには、このタイミングで一人ひとりが自分の思いをしっかりと話せることがとても重要なのだと感じました。

実際の通信では、分科会で協議する様子を写した写真を掲載しました。

分科会の様子

3. 個人の課題の再考

グループテーマの作成、手立ての共有ができた後には、個人の課題について考えたりまとめたりする時間が設定されていました。分科会後にインタビューしてみると、『職員室に戻ったら書いておいてください』と言われても戻ると書けない。会の終わりに書く時間があれば書けるし助かる。』という思いを話された先生もおられました。“教員一人ひとりが「自分事」として校内研究に向かう時間を生み出す”という視点からも、この5分間の有効性は計り知れないと感じました。

4. 分科会後のグループリーダー会

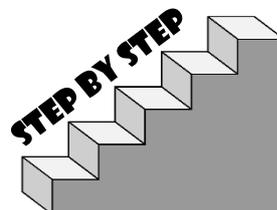
グループ間で情報共有することで、グループリーダーは他のグループの取組を参考にすることができます。情報共有だけでなく、電子データで確認することもできますが、校内研究主任として、各グループの思いも共有することで、今後の校内研究の方向性を考えることができるのだと感じました。



A中学校に参観に行くまでに、研究委員のみなさんから聞かれたキーワードのうちの 하나가「自分事」でした。この「自分事」について、校内研究主任は、『自分事』の出発点は“困り感”にあると思う」「自分が一生懸命になると『自分事』になると思う」と話されていました。校内研究主任の話をも、スモールステップに分けて考えてみると、このようなイメージではないでしょうか。

自己開示できる場を用意する

- 日々の授業の困り感をオープンに話す
- 解決したい課題＝自分の課題を認識する
- 自分の課題解決に向けて一生懸命になる
- 「自分事」になる



校内研究主任は、自己開示できる場を用意するため、グループ毎に別々の教室に分かれて分科会を行うようにされていたのだらうと感じました。時間の設定も、一人ひとりが十分に話す時間を確保できるように設定されていました。

このように考えると、校内研究主任が、教員一人ひとりに校内研究を「自分事」として捉えてもらうために行っている工夫は、他にもまだまだ見つけられそうです。



研究員 いなます けいご 稲益 圭吾

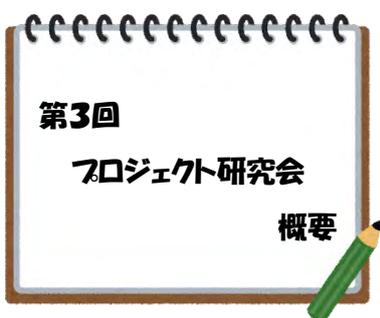


研究員 しまうち ゆうしょう 島内 佑祥

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第4号 令和5年(2023年)7月25日発行

いよいよ本格的な夏の到来を感じるこの頃ですが、御機嫌いかがでしょうか。プロ研通信第4号では、7月7日(金)に開催した第3回校内研究活性化プロジェクト研究会での研究委員のみなさんの様子をお伝えします。1学期が終わろうとしているこの時期、校内研究にとってはここまでの取組を振り返り、2学期以降に研究主題に大きく近づいていくためには大切な時期です。研究委員のみなさんが自校の校内研究を「自分事」として捉え、校内研究活性化のため、真摯に取り組まれている姿勢が各校の教員のみなさん一人ひとりに伝わるように、心から応援しています!



第3回のプロジェクト研究会のめあて

校内研究を活性化するための
ポイントを整理し自校の取組に
生かそう!

先進校の取組に学ぶ

13:20～A中学校の校内研究会におけるグループ協議に学ぶ

昨年度の実践校であるA中学校の校内研究会では、研究主題に迫る5つのグループをつくり、教員一人ひとりが希望のグループを選んだうえで設定した課題から、10の小グループが編制されました(プロ研通信第3号参照)。今回はそのうちの2グループの協議の様子を視聴しました。

研究委員のみなさんは、「A中学校の先生方はみんな、自分の課題を具体的に設定しておられることがすごい!」と口を揃えておっしゃっていました。

A中学校のグループ協議の様子からは、教員一人ひとりが「自分事」として校内研究を捉え、一年間の見通しと取組の方向性を明確にもたれていることがうかがえました。研究委員のみなさんは、グループ協議の様子を御覧になりながら、御自身の学校の実態や校内研究の進捗状況を踏まえ、いかに自校の校内研究活性化につなげていくことができるかを考えておられる姿が印象的でした。



「グループ協議」の様子から学ぶ研究委員

※黒字は動画を視聴した研究委員のみなさんの気づきや学び。赤字、青字は黒字に対する自校での取組・価値付け。

校内研究活性化のポイント

主体的な姿勢

- ・自分の課題をきちんともっている。
- ・具体的な生徒の課題を把握しているから、テーマを決められる。
- 小学校ではどう生かす？
→同じように話してみれば、もっと似た解決法が出てきてよいのでは？
- ・（これまでの校内研究の流れを）知っている人がいるとよい。
- ・先輩から気楽に「見に行こう」と声掛けができていく雰囲気がよい。
- ・グループテーマを具体的にしているので話しやすい。
→自校で同じように、夏休みにやってみようかな。

個別最適な学び

- ・個人の学びをすごく大切にしている。
そのことで、グループの学びをきちんと個人に返すことができている。
- ・自分の失敗談を伝える中で、解決策を見出すことができていた。
→自分事として取り組める

継続的な学び

- ・昨年度の課題を基に今年度の課題を決めている。
- ・考えていることをみんなの前で宣言してすごい！
- ・学びに連続性がある。

協働的な学び

- ・テーマを練り上げる時間を十分に確保している。
そのことで、同じ課題意識をもつことができている。
- ・グループ構成（年齢など）も工夫されている。
- ・このあと、どうまとめているのだろうか。

「新たな教師の学びの姿」の視点でまとめたグループ協議の内容（当日の記録を基に作成）

14:20～ A中学校の校内研究主任へのインタビューから学ぶ

校内研究主任のインタビューからは、校内研究主任として校内研究を活性化させるための働きかけをたくさん見つけました。

KJ法を用いてポイントを整理しながら、各校での取組を踏まえて協議が進んでいきました。研究委員のみなさんが挙げられていたポイントを以下のようにまとめました。

実際の通信では、研究委員がまとめた校内研究活性化のポイントをまとめたものを写した写真を掲載しました。

研究委員がまとめた校内研究活性化のポイント

〈A中学校の校内研究活性化のポイント〉

- ①方法知としての「A中スタンダード」の導入
内容知としての校内研究主題の設定
→この2点で共通実践を可能としている。
- ②授業参観の目的をはっきりさせる。
授業参観は個々の課題解決のヒントとなる。
- ③自分事として校内研究に取り組める。
自己分析を進めることで、自分事として校内研究に取り組む。そのことで一人ひとりに主体性が生まれる。
- ④ICT 機器を活用しながら協議をする。
- ⑤校内研究の成果を子どもの姿から見取る。
- ⑥全校体制で取り組める組織づくり
役割を明確にし、分担することで負担感の軽減や当事者意識を芽生えさせる。



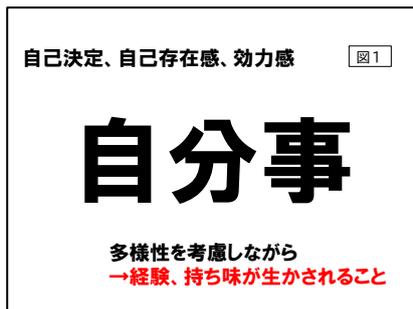
◇はじめに

今年度の校内研究開始から3か月ほどですが、それぞれの学校の状況、子どもの課題、今年のメンバーに合わせて、工夫した実践が行われていますね。校内研究を自分事にし、日常の授業から、みんなが力に変えていけるような方法を練っておられることに感心しました。

◇校内研究を活性化させる大切なポイント

①校内研究を自分事として捉えること

校内研究を自分事として捉えるということには、自分で決定したり、選んだりすること(自己決定)、自分が話合いの糧になっていると感じられること(自己存在感)、自分が話したことが自分やみんなにとってプラスだと感じられること(効力感)が必要ですね。そこには経験、持ち味、多様性が尊重されるということが大切です(図1)。



②同僚性を高めること

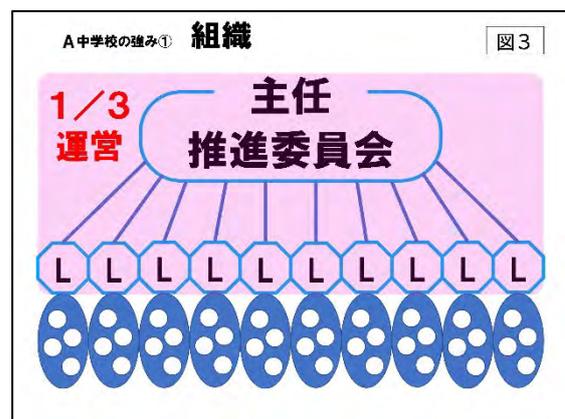
A中学校は、校内研究を通じて同僚性が高まっていますね。自分のよいところ「強み」、「弱み」もざっくばらんに話せています。このような人間関係を学校の中に基盤としてつくり、お互いに授業を見せ合うことが大切です(図2)。



◇A中学校の三つの強み

①組織

全体の3分の1が組織の運営側となる仕組みですね。研究主任が、したいことを発信した時点でそれを共通理解している人が少なくとも3分の1います(図3)。同じように理解できる人は、各グループ内にもいるので、早い段階で半分以上の賛同を得られます。学校の規模によっては、たくさん分掌をもっておられる方に頼みづらいという状況が生まれると思います。それなら、リーダーは循環制で行うとよいでしょうね。風通しのよい組織づくりをされていることが強みです。



②研究の仕組み

中学校の校内研究では、教科を窓口にするのは難しいので「A中スタンダード」を窓口にして研究を進めておられます。その中で、各教員が授業の一部分を担当して研究しているような形です。一部分を担当しているのでそれぞれ異なる研究をしているようでしたが、授業参観を通し

て先生方の認識がだんだん変わって
いきました。A中学校の先生方は、授
業参観を通して自分のグループと隣
接するグループの内容の重なる部分
を考えられる姿が見られるように
なっていました。例えば、「きく」グ
ループのメンバーは「めあての設定」や
「かんがえる」グループとの重なり
の部分を考えておられました(図4)。ま
た、「振り返り」グループのメンバーは
「めあて」に立ち返る必要があること
に気付いておられました。教員一人
ひとりが部分の改善をやっているよ
うで、実は全体の改善をやったこと
になっていたのです(図5)。

大きくテーマを掲げてみんなで焦
点化していく方法もありますが、部分
に分けて最後には全体が見えるとい
う仕組みこそが二つ目の強みです。

③授業改善

「日々の授業を改善していく必要
がある」という声を基に、積極的な授
業参観(宝探しweek)を実施されま
した。

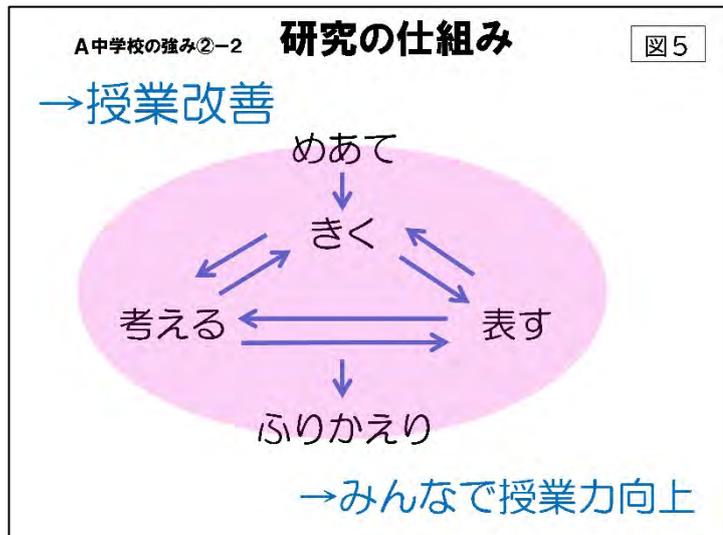
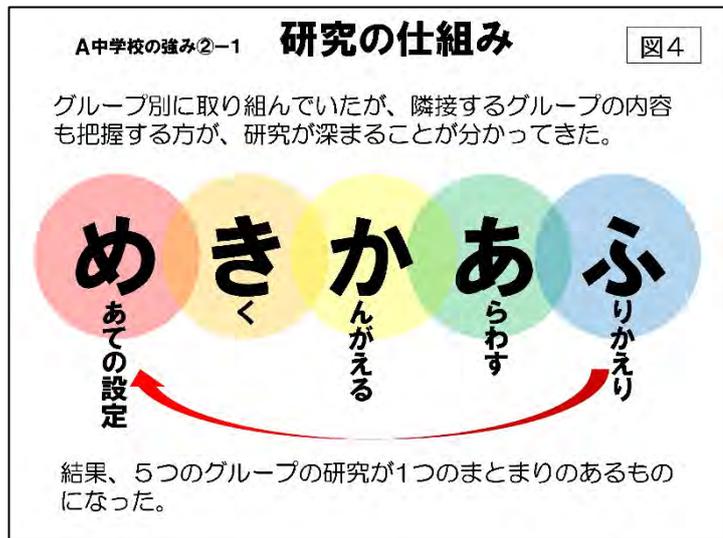
「宝探しweek」のコンセプトは、
「自由な参観の中で自分の知らな
かった新しいやり方や子どもの見方(お
宝)を教えてもらう機会をつくる」で
す。

参観させてもらった先生は、サンク
スシートなどで授業者にフィードバ
ックすることでお礼の気持ちも伝わるし、授業のどこがよかったのかどこがまだ改善できるのかを参観者から教えてもらうこともできます(図6)。こういった参観の仕組みをつくればみんなハードルを下げて取り組むことができますね。

◇おわりに

各校の先生方の願いや期待していることをつぶさに受け止め、日々の授業にかえっていったり、日々の子どもの変化や変容を捉えることにつながったりすれば、よい校内研究になると思っています。1学期の成果を校内の先生たちと分かち合い、2学期の校内研究につなげてほしいです。

(図1～6は楠見副校長が提示して下さった資料を基に研究員が作成したものです。)



滋賀大学大学院教育学研究科 教授 辻 延浩先生による指導助言

◇はじめに

今年度の研究で昨年度までとちがうところは、研修と研究をすみ分けているところです。研修とは、これまでの研究を学んで習得・活用することです。それに対して、研究は、探究・発信までいかないといけません。ということは、今日のプロジェクト研究会では、A中学校のビデオを見て、「この取組を真似してみよう」ではだめで、それを基にどう研究を作っていくかという視点をもつことが大事になります。



◇A中学校での取組を自校での取組に

今回のグループワークは、これまでの2年間のプロジェクト研究の成果が凝縮されていて非常に分かりやすかったと感じました。そして、楠見副校長には、そのポイントを整理していただきました。そこで、研究委員のみなさんには、2年間のプロジェクト研究の成果を踏まえて、小学校種、小規模校、…多様な状況である県内の学校に発信していくために、それぞれの学校の校内研究をつかっていただきたいと思います。つまり、A中学校の取組を自校でやってみてもうまくいかなかったけど、こんな工夫や改変をしたら、うまくいきましたという提案をしていただきたいです。例えば、A中学校での取組を参考に、我が校のスタンダードづくりから始めてみようというのでもよいと思います。また、A中学校のようなグループリーダーが学校で複数人いたら、当然、学校は活気づきます。そこで、管理職とも話し合い、組織としてグループリーダーをつくるための取組を考えてみるのもよいと思います。他にも、ビデオでの取組を参考にして、取り入れられる部分に取り組み、改変していただきたいと思います。

今はリーダー1人を育てたらよい時代ではなく、研究主任を含めた研究チームをどのように組織して、どう運用するのが求められています。効率化や働き方改革も合わさり、グループ協議の中で話題にも出ていたG-OJTなどの小集団を活用して、研修していきましょうという流れになってきています。ところが、何もかもを小集団化していけば、全体としての共有、確認をどうするのかという課題が出てきます。先ほどのグループ協議でも同じ課題が挙げられましたし、A中学校の動画では、解決策として、グループリーダー同士の話し合いを通して、隣のグループの成果を情報共有して全体としての途中経過や方向性をフィードバックする取組が紹介されていました。校内研究のDX化で実践するのも一つだと思います。うちの学校ではこんな風にして校内研究で使いましたというのを発信する方法もあります。

校内研究の活性化の成果は、子どもの姿を通して見取るべきではないかということが昨年度の研究の課題として挙げられています。そこで例えば、事例的にでも子どもの姿から見取っていけるとよいでしょう。例えば、教師の関わりが変化し子どもが変わったという事例があったとします。その教師の変化の影には「授業アップデートシート」の活用も見られるかもしれません。ツールと教師の手立てをつないで、その成果が子どもにどうかえているのかということ丁寧な蓄積、分析するというのもよいと思います。ツールを活用して100%成果を出すということは難しいので、ツールの意味をしっかりと理解した先生の変容を捉え、授業や子どもの変容とのつながりを物語として表現していけばそれはエビデンスになります。

研究委員のみなさんの振り返り

○第3回プロジェクト研究会の振り返り。

- ・ A中学校の実践を見せていただいて、これをどのように本校に取り入れることができるか考えながら研究会に参加することができました。
- ・ 授業を公開する手立て、自分事として捉える仕組みを少しでもつくっていきたいです。
- ・ A中学校の校内研究を見たり、協議をしたりする中で、改めて自身や自校の強みや課題を再確認することができました。
- ・ 1学期の自分の学校の校内研究の取組を振り返り、また、いろいろな先生方の取組を聞く中で、課題点がたくさん見つかり、2学期の校内研究に今回考えたことを生かしていきたいと思います。
- ・ A中学校の実践から、自校でできることを考えることができました。また、他校の取組から、共通した課題や新たに取り入れることができる内容について再検討することができました。

○第3回プロジェクト研究会での学びを自校の校内研究会でどのように生かしたいですか。

- ・ 小グループを編制して、個別の課題について話し合う場を設定していきたいです。それによって、研究の学びと個々の日々の実践をつなげていく機会をもちたいです。
- ・ 授業公開の仕組み、リーダーの活用(こまめに時間を取る)方法を考え、実践していきたいと思います。
- ・ 研究授業や全体での公開授業のつくり方やその前後の研究会にばかりウエイトを置いて校内研究を考えていましたが、事前の取組や事後の日々の授業の改善が一番大事であると感じました。
- ・ 校内研究を通して、先生方、子どもたちがどのように変わっていくか、そのこともしっかりと見ていき、研究につなげていきたいと思います。
- ・ 2学期以降に校内研究として取り組める実践を考え、夏季休業中からできることをお伝えしようと思います。まずはアップデートシートを確認し、自分自身の課題をもってもらいます。その内容の共通している先生同士でグループを組んでみることを学校に戻って考えます。

第3回プロジェクト研究会を終えて、研究員の思いと今後に向けて

今回のプロジェクト研究会では、A中学校の実践に学び、各実践校で校内研究を活性化させていくためのポイントを整理していただきました。研究委員のみなさんは、自校の実態を思い浮かべながら、整理したポイントを活用する手立てを考えてくださっていました。校内研究を活性化させるため、自ら課題を見つけ、課題解決の手立てを主体的に探究しておられる姿は、各校の先生方の模範となる姿であると感じました。

早いもので1学期が終わり、夏季休業中もお忙しい日々を送られることとは思いますが、1学期の取組の成果と課題を今一度、校内の先生方と共有していただきたいと思います。そして、2学期以降の校内研究がますます活性化していき、その成果が子どもたちの豊かな学びにつながることを心より願っています。



研究員 いぬます けいご 稲益 圭吾



研究員 しまうち ゆうしょう 島内 佑祥

「校内研究実践」レビュー

記入日 7月7日(金)

(部会) 実践者()

【校内研究を通して目指す教員の姿】

・自分の強みと弱みを持ち、自分の言葉課題を言定する。
 ・算数材料の学習を通して、自ら考え表現できる子どもを育成するための授業改善

【校内研究で目指した教員の姿】 (月 日 時点)

・今年度の校内研の方向性を理解する
 ・自分の強みと弱みについて、進んだり知-ト-リする。

【具体的な実践内容】(実践期間…)

・6/4 校内研究会(授業研究、学年部研究会)・事後授業・研究会
 ・授業アップデートシートの記入 → 共有フォルダ
 ・校内研通信の発行
 ・授業を見に行く(2回)

【実践の成果と課題】

<p>教員の具体的な学びの姿</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業、研究会を通しての話し合い 共通実践することを共有 授業の困り感、大切にしていることの共有 G-OJTとコラボした取り組み ・校内研通信 今年度の方向性とテーマ、研究会での内容を共有、強みと弱みの他者発信。 ↳ サクセスシート 	<table border="1"> <tr> <th>成果</th> </tr> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・情報共有 ・授業をした先生の お礼等感じ </td> </tr> <tr> <th>課題</th> </tr> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・「自分ごと」として捉える ・共有したことも、どう 実践していくか? <p>夏休み 学習研 アップデートシート いか けたい</p> </td> </tr> </table>	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・情報共有 ・授業をした先生の お礼等感じ 	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分ごと」として捉える ・共有したことも、どう 実践していくか? <p>夏休み 学習研 アップデートシート いか けたい</p>
成果					
<ul style="list-style-type: none"> ・情報共有 ・授業をした先生の お礼等感じ 					
課題					
<ul style="list-style-type: none"> ・「自分ごと」として捉える ・共有したことも、どう 実践していくか? <p>夏休み 学習研 アップデートシート いか けたい</p>					

★★★★★★★★★★★★★★ 改善策 ★★★★★★★★★★★★★★

☆次の実践で目指す教員の姿

・2学期の自分の言葉課題を明確にし、実践する姿

☆次の実践内容 (実践期間… 夏休み)

・アップデートシートの強みと弱みを再検討し、自分の言葉と具体的に実践できる
 ことや手立てを考える。→ グループ化・話し合いに活用してやる

子どもの姿
 どういう子ども? 学かか低い
 ・発言しなかった) → それぞれ
 グループで
 話し合う

「校内研究実践」レビュー

記入日 7月7日(金)

(部会) 実践者()

【校内研究を通して目指す教員の姿】

楽しんで校内研究に参加する。

【校内研究で目指した教員の姿】 (7月7日 時点)

今年の研究に主体的に参加しようとする姿。自分の課題を把握し、研究や実践に生かそうとする姿。

【具体的な実践内容】 (実践期間...)

- 自己分析ふり直しシートを作成。
- 研究通信の発行。
- ワールドカフェ形式を取り入れる。
- OJTの活用
- 放課後5分タイム。

【実践の成果と課題】

教員の具体的な学びの姿			成果
	成果	課題	
自己分析シート (個)	○自己分析 ↳ Y11の課題見えた	○負担に思う教員 ふり直しの時間確保	○教員同士のつながりを生むことできてきた ○個人の課題設定ができた ○学びの共有、ふり直し
研究通信	○共通理解が図れる ↳ 時間短縮。 ○学年毎に書いている	○時間をとるの難しい (作成の)	
ワールドカフェ (協)	○色々な学年の意見をきくこと → 学びのふり直し	○時間の問題 ○最後のまとめ、 ↳ つまみ上げ	
OJT	○研究実践視点の共有		課題 ○個人の学びにはおとにみえていない。 ○時間のかせぎ。

★★★★★★★★★★★★★★ 改善策 ★★★★★★★★★★★★★★

☆次の実践で目指す教員の姿

研究で学んだことを個人の日々の実践に生かそうとできる姿

☆次の実践内容 (実践期間...)

○個別の課題ごとに10分見出し抽出児童ごとにグループ編成をする。→ それで個々のふり直しや学びを共有する。

○2学期、どこかで宝エピソードを設定。互いに発表しあう。

- ★宝エピソードワーク。
- ★各クラスの児童の変容をみる。↳ 学びを深める。
- ★個別の課題をもとにグループ編成
- ↳ 成果と課題

「校内研究実践」レビュー

記入日 7月7日(金)

(部会) 実践者()

【校内研究を通して目指す教員の姿】

・自ら進んで、〈研究の視点〉の換乗を考へ、実践せよ。

【校内研究で目指した教員の姿】 (7月7日 時点)

4~6月までは〈研究の視点〉の換乗を公開し、学び進。

【具体的な実践内容】(実践期間…)

- ・ 6月、公開換乗強化月間であり「換乗公開」
- ・ 6月の頭、卒業調査の内容でアンケートを生徒より分析スタート
- ・ 市の訪問の際(社会科の換乗)から自分の研究の視点はどの方向に伸ばすか。

【実践の成果と課題】

教員の具体的な学びの姿	成果
<ul style="list-style-type: none"> ・ 公開換乗を通じて「換乗参観シート」の交換が見られた。 ・ 若手・先生が積極的な公開換乗があった。 ・ GWでの前半で話し合っている姿があった。(訪問の際) ・ 生徒のアンケート(声)の内容が職員室で少なかった。 <p>〈指導助言〉・ 校内研究の仕組みで伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分ごととして伝える(説明) 自己肯定・自己存在感・安心感 ・ 日頃の換乗の学びを 乗(2に2で伝える) ・ 関係性の高まり(換乗、課題の壁) 手直し <p>① 組織 ② 仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ じっくり換乗対策、GW/換乗対策 <p>GW 10月10日 20時</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 交換 → 研究 交換の目的 ・ 11-7-の活用方法の検証。 ・ 全体の活用方法(ワークブック) 方法 <p>校内研究の成果 → 生徒の学びの姿と。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 6月の換乗の話し合いが授業にも見られるようになった。「換乗参観シート」が ・ 次回、校内研で生徒アンケートを分析し、対策がうけとり、実行になった。
	課題
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 換乗現場に行かない先生、公開(か)くは他人事への対応が弱い。 ・ 再度、教師の件数は増加の程度に換乗公開に対する役割を付与。

★★★★★★★★★★★★★★★★ 改善策★★★★★★★★★★★★★★★★

☆次の実践で目指す教員の姿 (自分事として伝える、自己存在感) ^{教師のスキル(視点)}

公開換乗の仕組みをわかりやすく、動かしやすくし、公開換乗を促進

☆次の実践内容 (実践期間… ~12月(2学期))

- ・ 11-7-の活用方法 (役割を意識させた)
- ・ 生徒の姿での分析、指導。(公開換乗を通して)

「校内研究実践」レビュー

記入日 月 日()

(部会) 実践者()

【校内研究を通して目指す教員の姿】

研究を自分ごととしてとらえて、研究に主体的に取り組む。

【校内研究で目指した教員の姿】 (月 日 時点)

自身の授業の強みと課題を見つける

【具体的な実践内容】(実践期間… 5月下旬～) 授業に他の先生から学ぶ機会を増やす(Thank's ert)

授業アップデートの活用…月曜の職員打ち合わせ後の約5分間を入力の時間とした(2~3組1日)
他の教員の授業を参観する。各教員が入力した内容を次の打ち合わせで公開。印刷室に貼る
月曜打ち合わせ。

【実践の成果と課題】 配布資料のプリント、研究通信、ワークシート、OJ(研究会参加用紙)

教員の具体的な学びの姿

5月31日 特支の授業研。

- ・事前に参観のめあてを設定
- ・研究会後に学んだことを入力。

6月2週目 ~ 授業参観推進は本朝の取り組み

6月26日 初任研 授業研(世徳)

成果

授業研後のシート入力
ほとんどの教員がした。
入力する時間を設定した
ほか
他の教員が入力したシートを
見られた時に共有(共有フォルダ)

入力している内容は
より具体的

課題

・それを入力しない人が
担任を担っている教員の
モチベーションを上げた。
・送り、進捗がわからない
(参加者)人も。

時間がかか
どの程度
自分も
進捗
次に進める
後進も

★★★★★★★★★★★★ 改善策 ★★★★★★★★★★★★★★

☆次の実践で目指す教員の姿

学んだことを日々の授業に生かす。

☆次の実践内容 (実践期間… 7月下旬(夏休み中))

アップデートの内容をもとに、自身の課題や取り組むたいことを共有する。
→それに基づいて、2学期からの実践や研究、公開授業を考えた。

研究・公開授業単発ではなく、それと日々の授業でつなげることを大切に

「校内研究実践」レビュー

記入日 月 日 ()

(部会) 実践者()

【校内研究を通して目指す教員の姿】

同じ教員同士で話し合う。一緒に学びあう。お互いの学びを共有する。
実践者

【校内研究で目指した教員の姿】 (月 日 時点)

お互いの学びを共有し、実践を深めたい。

【具体的な実践内容】 (実践期間...)

グループワークの決定 公開研究会
 校内公開研究会 校内研究会の決定

【実践の成果と課題】

教員の具体的な学びの姿	成果
<p>グループワーク・個人の研究テーマ、自分らしい実践を <small>実践者</small> 実践者 <small>実践者</small> 実践者</p> <p>校内公開研究会でのグループワーク実践を公開し、 <small>実践者</small> 実践者 <small>実践者</small> 実践者</p> <p>個人研究テーマの共有、自分らしい実践を <small>実践者</small> 実践者 <small>実践者</small> 実践者</p>	<p>校内研究会の開催 実践者による実践</p> <p>グループワーク実践の共有 実践者による実践</p>
	<p>課題</p> <p>実践者による実践 実践者による実践</p> <p>個人研究テーマの共有 実践者による実践 実践者による実践</p>

★★★★★★★★★★★★ 改善策 ★★★★★★★★★★

☆次の実践で目指す教員の姿

お互いの学びを共有し、実践を深めたい。
実践者

☆次の実践内容 (実践期間...)

校内研究会の開催、個人研究の共有、自分らしい実践を
実践者 実践者
実践者 実践者
実践者 実践者

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第5号 令和5年(2023年)8月31日発行

時折吹く風に秋の気配を感じるこの頃、御機嫌いかがでしょうか。プロ研通信第5号では、8月3日(木)に開催した校内研究主任パワーアップ研修[小学校・中学校][第2回]と合同で開催した第4回校内研究活性化プロジェクト研究会での研究委員のみなさんの学びを振り返ります。

夏季休業中も研究委員のみなさんは、2学期以降の校内研究活性化に向けて、1学期の取組の分析や今後の準備を進められ、その主体的に学ぶ姿は、今まさに求められている「新たな教師の学びの姿」だと感じます。この姿が各実践校の先生方に伝わり、それぞれの学びが日々の授業改善につながることで、子どもたちの学びが変わっていきます。今年度の終わりに、「校内研究に真剣に取り組んでよかった」「自分が学ぶことで子どもたちの学ぶ姿も変わった」と先生方が感じられる校内研究になるよう、共に学びを進めましょう!

第4回プロジェクト研究会

(校内研究主任パワーアップ研修[小学校・中学校][第2回])

概要

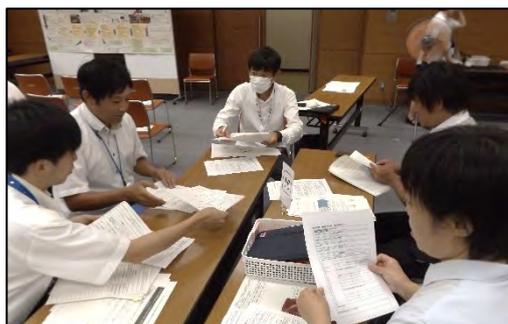
研究会のめあて

校内研究主任としての職務および校内研究を組織的に推進するための明確なビジョンと手法を学ぶ。

他校の取組に学ぶ

13:45～ 1学期の校内研究の実践交流 — 「校内研究プランシート」を基に—

研修会のはじめに、当センター主幹加藤から、目的をもって研修に臨むことで、研修での学びをより深めて欲しいという話がありました。そのうえで、小学校と中学校の校内研究主任70名が、16グループに分かれて1学期の校内研究の実践交流を行いました。研修に参加された校内研究主任のみなさんは、校内研究主任パワーアップ研修[小学校・中学校][第1回]を経て、各校で作成された「校内研究プランシート」を基に、自校の1学期の実践を振り返りながら交流されていました。この実践交流の中に、校内研究主任のみなさんの「個別最適な学び」と「協働的な学び」が見て取れます。他校の具体的な実践について学びながら、目指す校内研究の姿に向けて、今後の校内研究での取組のヒントを探しておられる様子は、協働的な学びの中において個別最適に学ばれている、ということができそうです。校内研究主任のみなさんが自校の校内研究に対して明確な課題意識をもって交流したからこそ「個別最適な学び」も「協働的な学び」も充実し、学びが深まったと感じました。



実践交流の様子①



実践交流の様子②

昨年の実践事例に学ぶ

14:15～ 令和4年度研究 事例発表

令和4年度
総合教育センター研究員研究
校内研究活性化プロジェクト研究

研究主題

小中学校における
児童生徒一人ひとりの
「確かな学力」の向上に
つながる校内研究
— 自校の課題解決に向けた
組織的・継続的な
「共通理解・共通実践」を
通して—

各校に配付した通信では、昨年度の実践校の校内研究主任が事例を紹介している様子を写した写真を載せました。

令和4年度総合教育センター研究員研究で、共に研究を進められた7校の実践校の研究委員のみなさんに事例発表をしていただきました。校内研究の推進に向けた取組とその成果・課題について、5分間の事例発表を7回実施され、研修参加者は全ての実践校の事例発表を聞くことができました。

研修に参加された他校の校内研究主任の感想（一部抜粋）

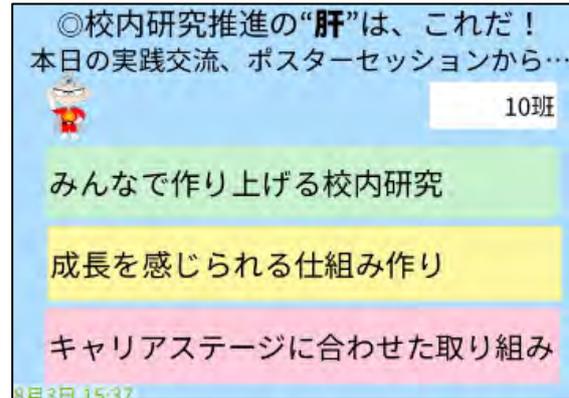
- ・多くの教員に参加してもらって研究にしたいと思いました。そのために、各教員が校内研究を自分事として捉え、成長を実感できる仕組みを考え、改善していく必要を感じました。教員それぞれの得意を生かし、研究主任はその調整を行う意識をもちたいと考えました。
- ・7校の発表を聞いて、校内研主任として、仲間を増やすためにつなぎ役になること、学び合いで先生方が成長を自覚できる仕掛けづくりを肝として研究を推進していくことを決めました。今までの方向性が間違っていないこと、自校のよさや強み、継続することで見えたことへの期待を確認することができました。
- ・7校の先生方の事例発表を聞いて、9月から授業研究会の効果的なもち方についてのポイントを学ぶことができました。授業研究会がその学年単体の成果と課題を見つけることにとどまらず、「今日の学びを生かして、自分の学年では何ができるか」を交流して次の校内研究、自学年の明日からの取組に生かすことが、系統立てた取組につながっていくことが分かりました。
- ・様々な事例を学ばせていただき、正直「もっと聞きたい！」となりました。どの先生にも共通して、校内研究は一人でせず、全員で共通理解・実践が大切であると仰っていました。改めて自分が一人でしているのではないということ意識し、共に学び合う集団のつなぎ役になりたいです。

自分事として取り組めるように仕掛けること、校内研究主任がつなぎ役となって全員で取り組める体制づくりを行うことなど、それぞれに学びがあり、「個別最適な学び」の時間となりました。

15:10～ 2学期の校内研究の効果的な推進に向けて

グループに戻って7校の事例発表での学びを交流し、2学期の校内研究の推進に向けて“肝”を協議しました。右の図は発表していただいた10班の先生方がまとめられた“肝”です。参加者のみなさんは、それぞれのグループから出てきた考えを取り入れながら、2学期に向けて校内研究を活性化させる次の一手を思案されていました。

各グループでまとめられた考えは、学習支援アプリロイノートスクールを用いて共有され、会場全体での「協働的な学び」が行われました。このように、校内研究や授業でも、ICTを活用すると交流がスムーズになる場面があるので、参考にしてみてください。



10班がまとめた校内研究推進の“肝”

先生方が協議されている姿を見ていて、グループを構成する一人ひとりの個別のニーズ（本研修においては、各校内研究主任の自校での研究に対する課題意識）が明確であれば、協議が活発になることを改めて実感しました。ニーズが明確であれば協議に対して目的意識をもって参加し、議題を焦点化して捉えたり、多面的に捉えたりして、協議をより深めることができるからです。

研究委員のみなさんが、自校の先生方に校内研究を自分事として捉えてもらおうと取り組んでおられることは、ニーズの明確化や「個別最適な学び」の充実に直結します。今取り組んでおられることに自信をもって、この調子で校内研究をどんどん活性化させていきましょう！



15:45～ 【講義】「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて校内研究が果たす役割

滋賀大学教職大学院 准教授 北村 拓也 氏

「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて

「新たな教師の学びの姿」とは？

図1

『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について
～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する
質の高い教職員集団の形成～(答申)」
(令和4年12月19日 中央教育審議会)

子供たちの学び(授業観・学習観)とともに教師自身の学び(研修観)を
転換し、「新たな教師の学びの姿」(個別最適な学び、協働的な学びの
充実を通じた、「主体的・対話的で深い学び」)を実現。

- 変化を前向きに受け止め、探究心をもちつつ自律的に学ぶという「主体的な姿勢」
- 求められる知識技能が変わっていくことを意識した「継続的な学び」
- 新たな領域の専門性を身に付けるなど強みを伸ばすための、一人一人の教師の個性に即した「個別最適な学び」
- 他者との対話や振り返りの機会を確保した「協働的な学び」

北村先生から投げかけられた「なぜ、『新たな教師の学びの姿』の実現が求められるのでしょうか?」という問いに、研究委員のみなさんはどのような答えをおもちですか?現場の実感として「新たな教師の学びの姿」が必要だと感じられ、自分事として捉えられていると素敵だなと思いました。

求められる「子どもの学び」の実現に向けて

図2

一人ひとりの子供を主語にする学校教育

児童生徒が学び、学び合う学校

教職員が学び、学び合う学校

- ・子どもの主体的な学びを支援する伴走者としての能力（コミュニケーション・ファシリテーション）を養う
- ・多様な教職員が個々の指導力を磨くとともに、組織、チームとしての教育力・課題解決力を高める

一人ひとりの教師を主語にする学校

新たな教師の学びの姿の実現

求められる「子どもの学び」（学習観・授業観）を実現するために、一人ひとりの子どもを主語にした、「児童生徒が学び、学び合う学校づくり」が求められています。その実現のために、子どもの「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指します。そして、そのために教職員が学び、学び合う学校づくりが求められるということです。求められる「子どもの学び」に合わせて、教師に求められる学びも変化する必要があります。教師の学びでも「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、自

身の学び(研修観)の転換を推進することで、「新たな教師の学びの姿」を実現していくことが重要だと感じました。

「新たな教師の学びの姿」の実現に向けた校内研究の役割

教師の「主体的な姿勢」を引き出すために 図3

- 必然性を感じる校内研究のテーマを設定する
- 校内研究に対する自分自身の目標や課題をもつ
- 校内研究で目指す子どもの姿、授業のイメージを理解し、どうすれば実現できるのか、何が必要なのかを考える
- 校内研究に取り組むことが、子どもたちにとって、学校にとって、自分自身にとって、どのように役立つのかを理解できるようにする

教師の「主体的に学ぶ姿勢」を引き出し、学ぶことの楽しさ・価値を再確認できるようにする！

教師の「継続的な学び」を生み出すために 図4

- 校内研究の目標の実現や、自分自身の課題の解決に向け、研究計画を立てる（研究の進め方をデザインする）
- 指導案検討、授業参観、研究協議、指導助言を通して、必要な資質・能力を身に付ける（個人のニーズにも対応した校内研究）
- 授業研究会や実践報告会など、研究の成果と課題を振り返ったり、他者からの評価・助言を受ける機会を設けたりする（自己評価・他者評価）

校内研究をロールモデルに、研究の進め方を身に付けることができるようにする！

教師の「個別最適な学び」を実現するために 図5

- 研究の進め方の個別化
同じ目的に向かって、それぞれの教師のキャリア、個性に合った進め方ができるようにする
- 研究のテーマ、進め方の個性化
それぞれの教師の目的やニーズに合った研究に取り組めるようにする

自分自身の研究をコーディネートできるようにする！

教師の「協働的な学び」を実現するために 図6

- 教師の「個別最適な学び」が「孤立したもの」にならないようにする！
- 教師一人ひとりのよい点や可能性を生かし、異なる考え方を組み合わせ、よりよい学びを生み出すことができるようにする！
- 教師として、よりよい学校や社会の創り手となるために必要な資質・能力を身に付けることができるようにする

研究のプロデューサー&ファシリテーターである校内研究主任の力が求められています！

(図1～6は北村先生のスライド資料を基に研究員が作成したものです。)

研究委員のみなさんの振り返り

- ・どの学校の研究発表にもあった、全体を巻き込んだ研究にしたいと思います。教職5～10年目くらいの先生を小グループのリーダーとして、学年やキャリアを超えたメンバーで授業づくりに取り組んでいこうと思います。
- ・校内研究をする上で、仕掛けが大切であることをどの学校も発表されていました。また、自分事として捉えられるようなシステムをつくることも大切で、嫌々でやるような研究・研修ではなく、意味のあるものにしなければならないと強く感じました。
- ・子どもたちが楽しく学びを深めていくために、校内研究を活性化していくことはとても大切なことだと改めて感じました。先生方が校内研究を自分事として捉えられる仕掛けを見つけることができました。
- ・自分事として捉えてもらうためのアプローチの工夫が参考になりました。もっと先生方を巻き込んで進めていけるようなアイデアを考えて、2学期以降進めていきたいです。管理職の先生との連携をもっとしていけるといいなと感じました。
- ・どの学校の実践を聞いても出てきたことは、校内研究主任だけでなく全ての教職員を巻き込んでいくようなシステムを作ることの大切さでした。そのような研究を進めるために、研究主任はみんなを“つなぐ”役割を担っているのだと自覚しました。先生方のよさをどんどん生かした研究にしたいです。

みなさんの感想からは、“自分事として”“全体で”“主体的に”“管理職と連携して”といったキーワードが見て取れます。校内研究を活性化させるために重要なことだとみなさんが感じておられることなので、2学期の実践の中で意識して取り組んでいけるとよいですね。

第4回プロジェクト研究会を終えて、研究員の思いと今後に向けて

今回の校内研究主任パワーアップ研修[小学校・中学校][第2回](第4回プロジェクト研究会)では、昨年度のプロジェクト研究実践校の事例発表を含め、規模や校種が異なる様々な学校の校内研究の実践から学んでいただきました。きっと大きな刺激を受けていただけたのではないのでしょうか。校内研究を活性化させるための次の一手に向けて、参考になる実践に出会われた研究委員もおられました。研究委員のみなさんの各校の校内研究に対する課題意識がはっきりとしているからこそ、学びの多い時間になったのですね。

さらに、北村拓也先生の講義内容を踏まえて、校内研究で取り組んでいることを価値付けていただければ、各実践校の先生方にも毎回の校内研究の目的が、より明確に伝わります。そうすることで、2学期以降の校内研究が活性化していくことに違いありません。

「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて、校内研究が重要な役割を果たします。その校内研究を主として企画・運営する校内研究主任のみなさんの役割も当然重要になります。プロジェクト研究のメンバー全員で力を合わせて、よりよい校内研究活性化のための手立てを探っていきましょう！



研究員 いなます けいこ 稲益 圭吾



研究員 しまうち ゆうしょう 島内 佑祥

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第6号 令和5年(2023年)9月11日発行

九月に入っても、夏を思わせるような暑い毎日が続いておりますが、皆様お変わりありませんでしょうか。プロ研通信第6号では、8月22日(火)に開催した第5回校内研究活性化プロジェクト研究会での研究委員のみなさんの様子をお伝えします。

今回は、第4回プロジェクト研究会で昨年度の研究委員が事例発表の際に使用されていた「校内研究省察ポスター」の今年度版を作成していただきました。事例発表を見ていただき、研究委員のみなさんに大きな学びがあったように、今回作成していただいたポスターが各実践校の先生方、そして次年度以降の県内各校の先生方の学びにつながります。また、作成されている様子からは、校内研究を通じて各実践校の日々の授業改善につなげたいという研究委員の先生方の思いが伝わってきました。

第5回

プロジェクト研究会

概要

研究会のめあて

校内研究の取組を校内研究省察ポスターにまとめ、
2学期以降の取組につなげよう!

教員対象質問紙調査の結果から見えた課題

「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」と聞き、一体的に充実している状態を具体的にイメージできますか？また、それが児童生徒の学びで実現するよう意識して指導していますか？1学期に実施した教員対象質問紙調査の回答を集計したところ、以下のような結果が出ました。

児童生徒が個別最適に学ぶ姿 をイメージできる	児童生徒が協働的に学ぶ姿 をイメージできる	一体的に充実させることを 意識して指導している
82%	93%	47%

*令和5年度校内研究活性化プロジェクト研究実践校の教員91名を対象にした質問紙調査の結果

このことから、指導者が児童生徒の個別最適に学ぶ姿や協働的に学ぶ姿をイメージできても、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることを意識して指導できることに必ずしもつながらないという結果が浮かび上がってきました。

そこで改めて、今後の研究を通して「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を具体的にイメージし、授業につなげられる校内研究のあり方を探究していくことが大切だと考えます。では、「児童生徒の『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実を具体的にイメージし、授業につなげられる校内研究」を実現するためにはどのようなことが必要なのでしょう。

我々はまず、教員自身が「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることを経験し、その場面について考察することで、そのイメージをもつ必要があると考えます。

そこで、今回のプロジェクト研究会では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を具体的に捉え、イメージをもち、各実践校の先生方に伝えていただけるように省察ポスターを作成していただきました。

校内研究省察ポスターの作成

校内研究省察ポスター作成の目的

研究委員のみなさんには、1学期の校内研究を基に、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体的に充実している場面を振り返り、価値付けをしていただきました。作成していただいたポスターには、完成時に研究委員のみなさんの学びと抽出教員の学び、そして抽出児童生徒の学びのつながりが示される予定です。



只今、校内研究省察ポスター作成中！



この省察ポスターについては、第7回校内研究活性化プロジェクト研究会(第3回校内研究主任パワーアップ研修)の際に、掲示させていただき、受講者の先生方に御覧いただきたいと考えております。御協力、よろしくお願いします。

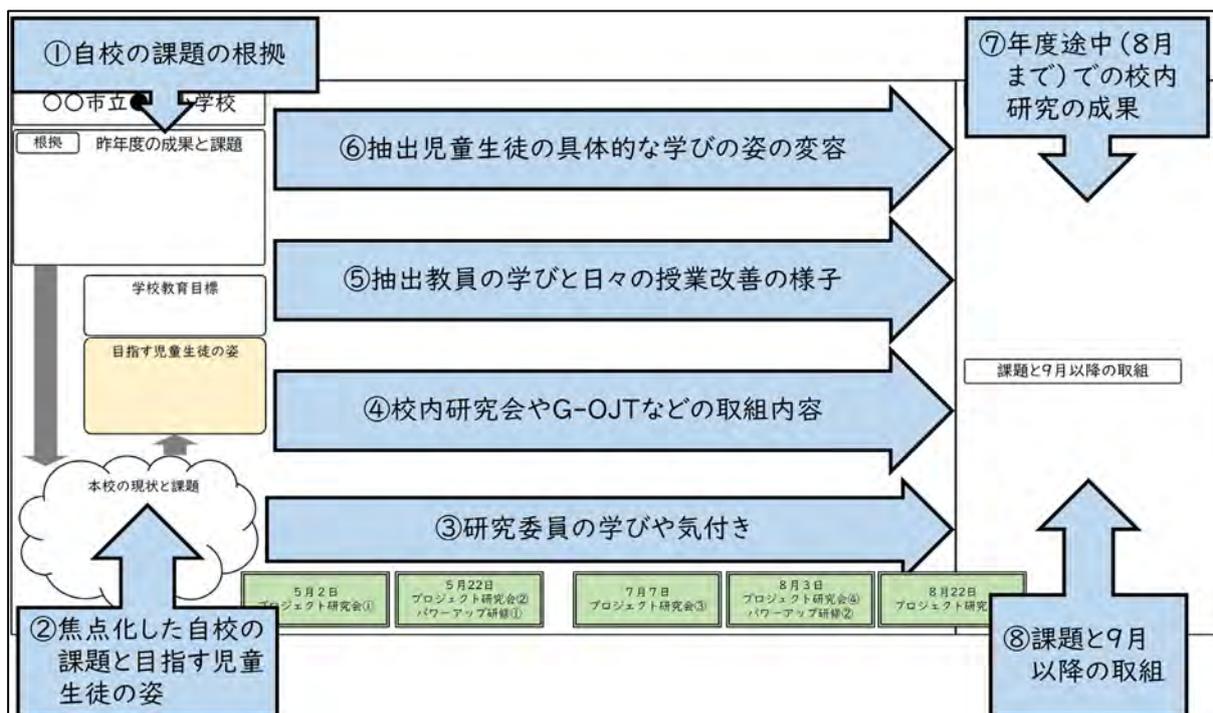
各実践校の先生方には、

- 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を具体的にイメージし、2学期の実践につなげる。
 - 教員の学びがどのように子どもたちの学びを支えているのかを見て、御自身の次の学びへとつなげる。
- という二つの視点から、ポスターを見ていただきたいと考えています。



校内研究省察ポスターのレイアウト

校内研究省察ポスターは下図のようなレイアウトで構成されています。



ポスターを見ていただく上で、二つのつながりに着目してください。一つ目は、横のつながりです。③～⑥の矢印で示しているように、校内研究の取組や教員・児童生徒の学びの変化が時間の経過とともに記されています。二つ目は縦のつながりです。③～⑥それぞれの取組と学びがどのようにつながっているのかを読み取っていただきたいと思います。

滋賀大学教育学部附属小学校

副校長 楠見 丹生子先生による指導助言より

五つのポイントで御指導いただきました！

1. 省察ポスター作成の合間の「交流」の時間からみてきたこと

本日の研究会の初めに、加藤先生(滋賀県総合教育センター主幹)から「今回のプロジェクト研究会の目的はポスター作成の中でも、『交流』の時間です」という話がありました。みなさんにとってその時間がいかに大事な時間であるかが分かりました。なぜなら「交流」の中で先生方が自然と集まり、意見を交わされる中でたくさんの気づきがあったからです。

例えば、A先生(V小学校研究委員)が自分のポスターの中では「まだ個別最適な学びが弱い」と仰っていました。B先生(W小学校研究委員)は「抽出教員と抽出児童への取材が必要だから⑤と⑥の部分については今は作らず、持ち帰って十分に聞き取りをしてから仕上げよう」と話されていました。C先生(X中学校研究委員)は「今日はここくらいまではできそうだ」という全体の構成に関する気づきを話されていました。D先生(Y小学校研究委員)は授業の交流や参観を含めて様々な質問をされており、「交流」の話題を広げてくださいました。

このような交流をすることで、後半のポスター作成の集中具合が大いに変わりました。まさに今大事にされている子どもたちとの授業の様子がここで体现されており、私たちも「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を経験するということがこの数時間の間で行われているのだなと感じました。おそらく、先生方は今日、学びの自覚をもって帰られることと思います。



「交流」の様子

2. 校内研究省察ポスターの活用を

私は昨年度の研究でもこのポスター作りを通して大いに学ばせていただいたわけですが、このポスターを各校でいかに活用するかを考えていただきたいと思います。作っていただく中で、みなさんにとってはこれまでの取組を思い出したり、それぞれの取組をリンクさせたり、抽出教員と研究委員とがどのようにつながっているかを再構成されたりしていました。それ自体に大きな意義があります。しかし、みなさんにはこれから学校に持ち帰っていただいて、掲示をし、各校の先生方と共有を
する中で、今再構成されていることや今の思い・意図を伝えるという役割があります。そこで、このポスターをどのように各校で共有しようかということを考えていただきたいのです。



滋賀大学教育学部附属小学校
副校長 楠見 丹生子先生

3. ポスターは大切な研究の産物

ポスターを提示された時、自校の先生方からたくさんの御意見やフィードバックが返ってくると思います。校内研究のプログラムの際には研究委員の先生の方がよく知っておられるので、ポスターにかかれていますと思うのですが、例えば「実はこっちにも矢印が伸びてるよ」や「あの先生はこのように仰っていたから、こっちにも矢印が伸びているのではないですか」というような意見をたくさんもらって、矢印でつながるリンクをたくさん増やせるといいと思います。「赤い矢印(「協働的な学び」が起点となった個人の気付きや学びなどの「個別最適な学び」)が多いな、やはり青い矢印(個人の気付きや学びなどの「個別最適な学び」が起点となった「協働的な学び」への還元)を増やしていかななくては」というような思いを受けて、次のプログラムを先生方が組んでいかれると、学びがつながり、往還のある学びになっていくのではないかと思います。

昨年度、ポスターを掲示しておく、校内研究主任(研究委員)以外の先生方もポスターづくりに参画して下さったという学校がありました。今は校内研究主任の先生がかいておられますが、中にはイラストが得意などということも含めて、「私、これをかいておくよ」や「こういう内容がかいてはどうか」などのアイディアがあった時に、推進委員会やグループリーダーの先生方にもつくっていただくチャンスがあると、校内研究主任の先生だけががんばってつくったポスターではなく、みんなでつくったポスターとなり、最後には研究紀要以上に大切な研究の産物となるのではないかと思います。

4. よりよりポスターにしていくために

今日みなさんは初めてこのポスターづくりに取り組まれたので、雛型に沿ってスタートされていますけれども、ここからはそれぞれの学校の独創性があるのもよいと思っています。例えば、「この部分はどんどん研究が盛り上がっていききました」と上下に展開したり、盛り上がっている部分に色を付けたり、新たな視点をつけ足したりすることが今年はあるのもよいと思います。そこに今年度は先生方の独創性や創造性が加わるとさらによいものになると思います。

5. 校内研究を自分事として捉えてもらうために

2学期(9月以降)に授業研究会がどんどん行われていくかと思っています。研究主任の先生方は、研究がより自分事として各校の先生方の学びにつながるように、考えてくださっていると思います。一本一本の授業を研究として進めていく中で、先生方に「何を」「どのように」参観していただくのか、協議していただくのか、その内容をできれば授業の前に伝えてください。先生方が自分の実践も含めて、自分事として授業を見て、研究会に参加していただけるように考えてくださるとよいかと思います。

研究委員のみなさんの振り返り

○第5回プロジェクト研究会の振り返り

- ・他校のポスターを拝見したことによって、自校の取組と比較し、他にできることはないかと、新たな実践について考える機会となりました。参観ウィークなども取り入れたいなと思いました。
- ・自身や自校での校内研究の取組を振り返りながら、ポスターの作成に取り組むことができました。ポスターにまとめることで自分の校内研究主任としての課題も発見することができ、これからの目標も考えることができました。
- ・1学期に取り組んできたことを整理し、2学期に向けての再確認をすることができました。省察ポスターを作ることが目的ではなく、その演習の中で自分が気付いたことや、他の先生方の思いから、学びを深めることができました。見通しをもてるよい時間になりました。
- ・校内研究主任として、本校でどのような継続的な学びがあったのかを振り返ることができました。「新たな教師の学びの姿」を少しでも実現するために、何が必要かを今一度考えてみたいで

○第5回プロジェクト研究会での学びを自校の校内研究会でどのように生かしたいですか

- ・ポスター作りを通して、1学期に行った実践が、どのようなねらいをもっていったか、改めて自分の考えを整理することができました。このポスターを用いて今回のプロジェクト研究のねらいを校内の先生方に広められるように活用したいです。また、先生方と一緒にポスターを作成して校内研究が自分事となるように仕組んでいきます。
- ・省察ポスターについては、2学期の早い段階で全教員に紹介して、学校全体としての学びの振り返りと今後の見通しをもつのに役立てたいです。
- ・2学期初めに時間を取って交流したいと思います。作成したものを基に確認することと、1学期を振り返って思ったこと、気付いたこと、取り組んだことを付箋に書いて貼ってもらい、それも書き込んでみようと考え中です。
- ・まずは1学期の取組を振り返り、どこに改善点があって、変えられるかを考え、動いていくことが大切だと思いました。

第5回プロジェクト研究会を終えて、研究員の思いと今後に向けて

今回、校内研究省察ポスターの作成をされている研究委員のみなさんの姿を見て、改めて思ったことがあります。それは「この姿がまさしく『新たな教師の学びの姿』なのだ」ということです。私たち研究員は各実践校の様子を全て見せていただいているわけではありませんが、ポスターを作成していただいている時の研究委員のみなさんの様子やお話、ポスターの内容から、みなさんが各実践校の課題を校内研究主任として分析し、プロジェクト研究会を通して学んだことを生かして実践されていることがよくわかりました。そして、振り返りから見えてきた新たな課題を次の学びにつなげていくというプロセスは、教員の「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体的に充実している姿だと思います。今後、各校を訪問させていただき、校内研究会を参観させていただきます。その中で、学びに向かうたくさんの方の姿に出会えることを楽しみにしています！



研究員 稲益 圭吾 いなます けいご



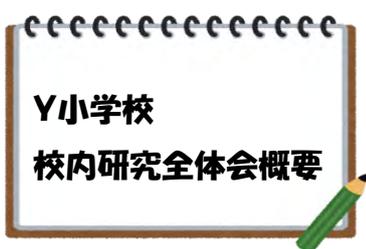
研究員 島内 佑祥 しまうち ゆうしょう

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第7号 令和5年(2023年)9月15日発行

残暑厳しい折、息つく間もないほど忙しい日々を送られ、体調を崩しておられないでしょうか。プロ研通信第7号では、8月23日(水)に開催されましたY小学校の校内研究会の様子をお伝えします。

今回のY小学校での校内研究会の目玉は、テーマ別G-OJTです。これまでのプロジェクト研究会でのZ中学校やA中学校における実践紹介をもとに、Y小学校の校内研究主任がグルーピングから工夫して実践されました。テーマ設定や編制人数などの工夫が見られ、大いに盛り上がった校内研究会でした。



Y小学校 校内研究全体会概要

Y小学校 研究主題

課題に向き合い、他者と交流する中で、自分の考えを再構築しようとする子どもを目指して

注目ポイント

- ・プロジェクト研究会での学びを生かした校内研究会
- ・研究委員の学びと抽出教員の学びのつながり



グループ協議

校内研究会の流れ

1. グループ協議①
2. 国語科の事例紹介
3. グループ協議②

今回、Y小学校の校内研究会では、G-OJTを取り入れた研究会が実施されました。グルーピングについては、「校内研究・自己分析シート」(Y小学校版授業アップデートシート)に書かれた個人の課題をもとに校内研究主任がグループを編制され、先生方一人ひとりに参加したいグループの希望をとって決定されました。グループ協議は二度行われ、一度目はテーマを選んだ理由や個別の課題等を共有し、二度目は2学期以降の具体的な取組やグループの目標を考えました。

一度目のグループ協議では、交流する内容が先生方自身の課題に感じていること等であったため、協議時間が始まると次々に先生方が話をされていました。参加者一人ひとりが校内研究を自分事として捉え、課題意識をもって校内研究会に参加されていることが感じ取れました。

国語科の事例紹介をはさみ二度目のグループ協議では、グループとして2学期に実践することを協議されました。一度目の協議で課題意識を共有できているため、課題解決の手立て等が具体的に挙げられる場面もあり、翌週からの授業で実践に生かすことができる内容が盛り込まれた協議となりました。二度目のグループ協議の内容は、全体でも共有され、「最後に他のグループのいろんな見方や意見が聞けたのでよかった」と話されていました。



グループ協議の様子

Y小学校教員へのインタビュー

今年、10月に授業研究会で授業をされる中堅のA先生に、全体会終了後にインタビューをさせていただきました。



<インタビュー①>

校内研究や研究授業を引き受けたことに対する率直な気持ちを教えてください。

私にとって校内研究はすごく大きなものと思っています。毎時間の教材研究をきちんと行ったうえで授業に臨むものですが、特に研究授業は、先生方と協議をしていく中で新たな発見をしたり、新しい取組を見つけていったりする発展的なものと受け止めています。ただ、校内研究で授業を見るのは勉強になりますが、授業をするのは一年の仕事の中で一番大きいことと思うくらい負担があるものと思っています。指導案検討ではいろいろ考えて、でもなかなかいい考えが出てこなくて自分なりに悩みながら、学年の先生達とも詰めていきながらやったりしています。それでも、事後研究会ではよい意見も出てきますが、やっぱり反省点も見つかるので、“事後検討会は傷つくもん”みたいな感じで思っています。それが新たな発見にもなって、自分が変わっていくという意味ではすごくよい時間なのかなと思っています。

自分にとっては大きな変化があるものの一つが校内研です。だから、毎年毎年、自分自身が変わっていったのかなと思います。今年であれば、校内研究のテーマが特別活動から国語という教科にガラッと変わったので、そこを大切に、授業を考えていかなあかんって自分の意識は変わっているのかなと思います。

<インタビュー②>

今年度の校内研究での新しい取組についてどう感じていますか？

特に今日は、共通の課題をもつ人でグループを作って、意見を出し合えたのは新しいし、いいと感じました。悩んでいる部分をすごく共感できたり、改善策を出し合ったりできたので、2学期はそこを意識して頑張ろうと気持ちの整理ができてよかったです。さらに、グループ協議を通して課題と目標が明確になったので、その課題に対してどんなことができるのかなとか、困った時があったら聞いてみたいなと思いました。そういう意味で、大事なきっかけとなるよい時間になりました。

<インタビュー③>

今日の取組を通して、子どもに求められている「個別最適な学び」や「協働的な学び」が具体的にイメージできるようになりましたか？

私のグループでは、交流を活発にできるための設定や手立てを協議したので、それがうまくいかない共通点がやっぱり何個か見つかりました。細かい具体的な部分までは詰められていないかなと思いますが、自分が考えていかなあかんこととか、変えていかなあかんこととかははっきりしてきました。この後、じゃあ何ができるだろうと考えて、新しい視点を見つけたいかなあかんと思っています。

<インタビュー④>

A先生自身が考えている自身の課題を教えてください。

今年の研究主題、「自分の意見を言えて相手の意見も聞けて自分の意見を再構築できる」を目指そうと思っています。それに向けて、再構築する難しさは私自身感じているので、子どもたち自身が再構築できる力を付けられるための指導の手立てを考えて実践ができれば、自分にとって成長の一つになるのかなと思います。

<インタビュー⑤>

今日2回目のグループ協議でグループの目標を設定しましたが、個人の課題解決のために取り組もうと思われたことはありますか？

グループでは「ゴールを示す」という目標を設定したので、私は「授業等での活動を通して何ができるようになるとよいか」を示していきたいと思っています。それと、子ども任せにしないようにしようとも思っています。子どもたちがより充実した学びになるように、教師は何ができるのかということを考えて授業をしていきたいと思いました。



校内研究を自分事として捉えて、研究会や実践に臨んでおられる姿勢が印象的でした。突然のインタビューだったにも関わらず、快く引き受けてくださったA先生ありがとうございました。

校内研究主任へのインタビュー

校内研究会の後、校内研究主任に次の二つのことをインタビューさせていただきました。



Y小学校の
校内研究主任



Y小学校の校内研究通信「つみき」

<質問①>

研究会を終えてどのような感想をもたれましたか？

それぞれの先生方にとって、「個別最適な学び」と「協働的な学び」のある研究会になったのではないかと思います。昨年度の中学校における実践から学んだ、研究主題に沿った個人の課題をもつことは、小学校においても実現可能かつ有効だと思いました。

なぜそう感じたかという点、研究会後の先生方の反応がとてもよかったからです。「話し合ったことで、自分の課題が整理された」「初めは何も話せないと思っていたけれど、同じ悩みをもつ先生方と話して楽しかった」「話し合いタイムが1番勉強になった」「〇〇チームの目標がおもしろかった」など、いろいろなプラスの意見をお聞きすることができました。

こちらからトップダウンでお伝えしないといけないこともありますが、先生方自身に多くの時間を委ね、任せることが、校内研究という学校全体の学びの上で、最も有効で近道なのではないかと気付かされました。

<質問②>

次の校内研究に向けて課題はなんだと思いますか？

個別の課題を実践につなげていくための仕組みを研究会に組み込んでいくことが課題です。今回の研究会では、それぞれの先生方の悩みから目標までを話し合ったので、その実践を交流する場を研究会の限られた時間内でもちたいです。そのためには、1学期に取り入れていたワールドカフェ形式での交流を続けるのかなど、研究会の中身で本当に必要なものを精査しないといけないと思っています。また、話し合った先生方の中には、選んだテーマが難しく、そのテーマの意味の共通理解から始めなければならなかったチームがあったようでした。今後、そのチームリーダーさんとの話し合いをして一緒に整理する必要があると思います。



1学期の取組について協議する学力部会の様子

そして、今後出てくるであろうと予想している課題は、「学年部での話し合い」をもつことをやめて、「同じ個別の課題をもつ先生のチームでの話し合い」にシフトしたことで、学年毎の積み上げが見えにくくなってしまふかもしれないということです。今年度は2学期で全ての授業公開が終了する予定なので、3学期に「学年毎の積み上げ」と「個別の課題解決から見えてきた成果」の両方を整理したいと考えています。

そして、今後出てくるであろうと予想している課題は、「学年部での話し合い」をもつことをやめて、「同じ個別の課題をもつ先生のチームでの話し合い」にシフトしたことで、学年毎の積み上げが見えにくくなってしまふかもしれないということです。今年度は2学期で全ての授業公開が終了する予定なので、3学期に「学年毎の積み上げ」と「個別の課題解決から見えてきた成果」の両方を整理したいと考えています。

Y 小学校の校内研究会の参観を終えて、研究員の思いと今後に向けて

教員一人ひとりが校内研究を“自分事”として捉えることができるように、工夫して校内研究を計画・運営されている校内研究主任の取組の成果が表れた場面をたくさん見せていただきました。今後は、先生方の学ぶ姿が授業での児童の学ぶ姿にどのような変化をもたらせるのかを一緒に見取

っていきたいと思っています。加えて、今後、各校を訪問し、同じように研究委員のみなさんの学びが形となって表れているところを参観させていただきたいと考えています。校内研究を通して、教員一人ひとりが生き生きとした表情で学んでいる姿が見られることを楽しみにしています。



研究員 いぬます けいこ 稲益 圭吾



研究員 しまうち ゆうしょう 島内 佑祥

第6回校内研究活性化プロジェクト研究会のお知らせ

会場校：Y 小学校

日 時：令和5年10月11日(水)12:40～16:40

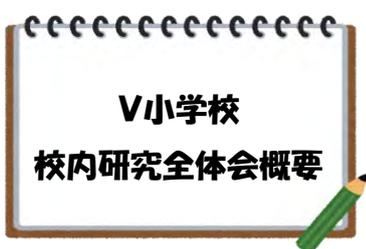
今回のプロジェクト研究会では、Y 小学校の校内研究と教員の学びのつながり、そして児童の学びへのつながりを参観させていただきます。また、校内研究会にも参加させていただきます。その後、授業と校内研究会での学びをもって研究協議を行います。よろしくお願います。

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第8号 令和5年(2023年)10月6日発行

晴れやかな秋空が広がる季節となりました。実践校のみなさんにおかれましては、運動会や体育祭、文化祭などの学校行事にも尽力されていることと思います。プロ研通信第8号では、9月20日(水)に開催されましたV小学校の校内研究会の様子をお伝えします。

今回のV小学校での校内研究会を参観させていただくにあたり、授業者のA先生には事前と事後にインタビューをさせていただきました。研究授業と研究協議を通してA先生が学びを進められている様子や参観者の先生方の学び、校内研究主任の学びをお伝えします。



V小学校 研究主題

「読む力」から「読み解く力」へ
～ハキハキ・スラスラ・正しく読もう～

注目ポイント

- ・授業者の学びと実践のつながりに着目した校内研究会
- ・授業参観で「個別最適な学び」を進める先生方



校内研究会の流れ

1. 授業者より本授業に関わって
2. グループ協議
3. 全体交流
4. 指導助言

今回、V小学校の校内研究会では、「1」「2」「3」の3グループに分かれて研究協議が行われました。

V小学校の研究協議では、参観者がA先生の課題やこれまでの学びを基にして協議できるようにテーマが設定されていました。協議のテーマは以下の2点でした。

- ①対話によって児童の考えは深まったか。
授業者の指示やワークシートなどの支援は、対話を促すものになっていたか。
- ②導入の工夫によって子どもの興味・関心を引き出すことができていたのか。

また、協議にはマトリクス法が用いられ、参観者が「子どもの実態」と「教師の手立て」に焦点を当てながら意見を交わすことができるように工夫されていました。子どもの学びの姿に焦点が当たることにより、「〇〇さんの△△という発言は…」や「□□さんと◇◇さんの対話では…」のように、授業者の講じた手立てと子どもの学びのつながりを意識した協議が活発に行われました。

	児童の実態		教師の手立て	
良い点	子ども同士のかかわりが多く見られた	学習規律が整っていた	交流の時間がたっぷり先生の関わりも多い	困っている子への関わり
改善点	相手の説明に深くつっこむ	叙述を基に自分の考えを	グッとポイントとキャッチコピーの違いは?	相手意識をもてる工夫が必要
共通の取組				

「2」グループのマトリクス
(使用されたものを基に研究員が整理)

以下に紹介させていただくのは、「2」グループの研究協議の一部です。

※発言の内容を研究員が整理して作成

児童aと児童bの対話をよく聞いていたら次のようなやり取りがされていました。

児童a「僕の『グッとポイント』はこれです」
児童b「理由は？」
児童a「直感です」

児童aは理由をうまく話すことができませんでした。しかし、児童aは自分のグッとポイントの根拠となる叙述を付箋にいくつか書いていたので、続けて次のようなやり取りがされました。

児童b「付箋見せて。一緒に考えよ。」
「ここを選んでいるということは、こういうことじゃない？」
児童a「そうか、ありがとう！」

児童aは、そう言って付箋に理由を書き加えていました。

二人の学びの姿はとても印象的でした。児童aは児童bと話すことで考えが整理され、自分の考えの理由を書き出すことができました。児童同士の対話による学びの深まりが見られてよかったです。

児童cを、1時間を通して観察していました。児童cが児童dと交流していた時のことを話します。児童dは授業中によく発言をする児童で学力が高い児童なのですが、二人の交流は「グッとポイント」を説明するだけのものでした。叙述を基に交流をしているが、自分の考えの根拠とは言えない。読んで分かることを相手に伝えているだけでした。その交流で学びを深めるのは難しいと思います。「グッとポイント」を相手に伝えているので、自分が感動した理由を話せるとよかったなと思いました。



「2」グループの協議の様子

私が見たペアは、学びが深まったと言うよりは意見がいっぱい出てきてしまって、キャッチコピーを作るのにどれを使えばよいのか迷っている感じでした。最初に教室中央の後方でペアになっていた二人は、付箋に書いていることはたくさんあるが、「それ、かわいい」「いいね～」で交流が終わっていたので学びの深まりはなかったと思います。「あれあったよな」「これあったよな」というような確認になっているペアもありました。

交流の時間が十分に確保されていたので、A先生が児童と個別に関わることができていました。児童eと児童fのペアでは、A先生の「eさん、理由がわからないんだけど」「教えてあげて」「なぜそう思うのか聞いてみよう」というような支援があり、児童eは児童fと一緒に「ここにこういう風に書いてあるからそうやって考えたんじゃない？」と話し合うことができていました。このように、考えを掘り下げることができたペアは学びに深まりが出たと思います。子どもたちの現状を見ているとやはりそのようなところでまだまだ支援が必要なのだなと思いました。児童だけで、学びを深めるのはとても難しいなと感じました。

どのグループの先生方も児童名を挙げながら、具体的に子どもの学びの姿を語っておられました。上記3名の先生方のコメントの中だけでも3ペア6名の児童名が出てきています。具体的に子どもの学びの姿を見取ることによって授業者の講じた手立てが効果的であったか、また改善点がどこにあるのかが明らかになってきました。子どもの学びの姿から先生方が学ぶ、実りある協議の場となっていました。



研究員 しまうち ゆうしょう 島内 佑祥

V小学校教員へのインタビュー

今回は授業者のA先生、10月23日(月)にV小学校の校内研究授業をされるB先生、B先生と同じ協議グループで活発に意見を交わしておられたC先生の3名にインタビューをさせていただきました。

<質問①>御自身の課題を具体的に教えてください。

私の課題は、「学力差のある学級で学習に対する理解を促すために、子どもたち同士の活動(対話・学習)を仕組むこと」です。

<質問②>今回の研究授業や事後協議からどのような学びを得られましたか。

今回は、ペアの中で「助けない」とか「助けてもらいたい」という気持ちがあり出なかった、ペアづくりが上手くできていなかった。「助けてもらいたい」という気持ちは、全然恥ずかしいことではないということをこれから伝えていかなければならないと思います。自分から発信できる授業づくり…じゃないですけど、交流できる雰囲気をつくらなければならないなと思って、明日からはどんどん発信していくんだよということを思っているだけじゃなくて伝えていこうと思います。



A先生

<質問③>課題解決に向けて、今後どのように学びを進めていこうと考えていますか。

学習に向かうことがなかなか難しい児童にもできることは絶対にあるので、児童がそれを見つけられる力を身に付けられるように指導していきたいです。また児童自身が、何ができて何が苦手なのかということもあるのですが、「何を学びたいか」は絶対にもっていると思います。その思いと教師の付けてほしい力が近ければ近いほどお互いよいと思います。そこを近づけさせることができる技術…じゃないですけど、授業力の向上や子どものことを知るということが大事なのだろうなと思っています。

<質問①>御自身の課題を具体的に教えてください。

私の課題は、「子ども同士のつながりを強める」ことです。子ども同士のつながりはなかなか築けていないと感じていて、築けることによって子ども同士で助け合ったり、問題を解決したりできるようになると考えています。

そのために、2学期に入ってから子ども同士が会話する機会をたくさん設けていこうと思っています。例えば、朝の会でお題に沿って子ども同士で話す取組をしています。現在は隣の席同士で行っているのですが、いろいろな人と話してほしいという思いがあるので、席順をずらして違う子どもと話す機会も設けたいと思っています。その中で一方的に話すのではなく、質問をしたり思ったことを返したりすることもできるように少しずつ取組を発展させていきたいと考えています。



B先生

<質問②>今回の校内研究会でどのような学びを得られましたか。

印象に残っているのは、子ども同士で積極的に話し合いをしていたところです。子ども同士のつながりができているからこそできたことだと思います。A先生の授業の中では子どもたちがやってみようと思えるような課題を設定されていたので、子ども同士で協力して学習に取り組んでいたのだなと思います。

教材研究を通して何を教えようとしているのかを明確にし、子どもたちがやってみようと思える課題設定をしていくことができればよいと思っています。

<質問③>御自身の課題に向かって今後、どのように学びを進めていこうと考えていますか。

子ども同士のつながりを築いていく上で活用できそうな手段を学んでいきたいです。「〇〇が絶対に正しい方法だ」というものはないと思いますので、対話だけではなく、様々な手段を知り、今、目の前にいる子どもたちにどの手段がまっているのか見極めて活用できるようにしていきたいと思います。本を借りたり、同僚の先生に話を聞いたりして学びを進めたいと思っています。

<質問①>御自身の課題を具体的に教えてください。

子どもが主体となって、「やってみたい」「やった」と思えるような授業を仕組みたいです。今年度は書写と外国語を担当しているのですが、いつも放課後にどうすれば子どもたちが楽しめるかなと考えています。しかし、実際に子どもたちが動くとどのようにやればいかわからなくなる場面があったり、私自身の思いと異なるものになってしまうことがあったりして、日々反省しています。なので、私の課題は子どもが自分たちでどんどんやっていけるような授業を仕組みることになることです。



C先生

<質問②>今回の校内研究会でどのような学びを得られましたか。

今回の授業で一番思ったことは、すごく雰囲気がよい授業だったなということです。45分間子どもたちがのびのびとしていて、A先生もいてねいに子どもたちのことを見られていたと思います。

子ども同士の対話をメインに授業を組んでおられたのですが、大勢の先生方が参観している中でも子どもたちがしっかり対話できていたのが印象に残っています。また、A先生と子ども一人ひとりとの対話も印象に残っています。雰囲気のよさと、教師と子どもの対話について学ばせていただきました。

私は外国語の授業をしている時に、子ども同士のペア活動やコミュニケーション活動を「やってみよう！」と言った後、教科書をしまう指示をしてしまうことがあります。教師からの確かなタイミングで指示を入れることで子どもたちが学びやすそうにしている様子も今日見られたので、次の授業から生かしていきたいです。

<質問③>御自身の課題に向かって今後、どのように学びを進めていこうと考えていますか。

子どもが主体的に活動できる授業にしていくために、同僚の先生にたくさん聞きたいと思っています。インターネットで調べたりもしているのですが、よくわからないこともあります。それぞれの分野で、堪能な先生がたくさんおられるので、単元のゴールをどのようにすれば魅力的なものになるのかや、ねらった力を付けるためにはどのような活動を仕組むのかなどについて相談に乗っていただいています。この一年間、たくさん勉強させていただこうと思っています。

3名の先生方、突然だったにも関わらずインタビューにお答えいただきありがとうございました。3名とも校内研究会からの学びを整理し、御自身の課題に照らしながら話されているので、明日からの実践に生かしたいことと次なる課題の発見につなげておられました。今後、子どもたちとさらに学びを進められていくことを楽しみにしています。



研究員 島内 佑祥 しまうち ゆうしょう

校内研究主任へのインタビュー

研究委員(校内研究主任)の先生には校内研究会の後、3名の先生方へのインタビューを一緒に聞いていただいた後にインタビューさせていただきました。

<質問①>

本日の研究会を振り返り、よかった点と改善していきたい点を教えてください。

研究会の、グループでの協議は盛り上がり、それぞれのグループで活発に意見を出し合っていていいなと思います。しかし、グループ毎で協議したことをみんなつないで、最後に校内研究として、V小学校として一定の方向性を示してまとめるというところまでいくのがなかなか難しいなと感じています。研究授業を見てみんなが感じたことを出し合い、どのような意見が出るのかということはこちらがある程度想像することができても、授業の中で子どもの反応を予想することとは違い、予めまとめを用意することもできないので、まとめることまでできればよいなと思っています。もちろん最終的には個人の課題に対してどうしていくかということだと思うのですが、研究協議の成果をまとめることができれば、アップデートシートを書く時にも自分の課題に即して、視点を絞って書くことができるだろうと思います。そうすればより実りのある校内研究会になっていくのだろうと思います。



校内研究主任の先生

<質問②>

3名の先生方のインタビューを聞いて思ったことを教えてください。

単純に、私自身が先生方の課題と思っておられることを十分に把握できていなかったなと思いました。それを知らずにいたら、例えば、B先生の授業を見に行くというときに参観の視点を絞れないなと思います。課題などを知っておくのは大事なのだなと思いました。それを知っていることでアドバイスできることもあるかもしれないし、逆に学ぶことがあるかもしれないので、広く他の先生方にも知ってもらい、お互いに助け合いがしやすくなる環境を作っていければよいなと思いました。

<質問③>

教員一人ひとりの学びを促進するために校内研究としてできることは何だと思いますか。

それぞれの課題や強みを分かったうえで、職員室で相談するというのももちろんありだと思います。授業を実際に見に行き「このようにされているんだ」「自分にも使えそうだな」とか、授業を見に来てもらって「もっとこのようにしたらいいと思うよ」などの一言アドバイスをもらうというようなことを進めていくことができればよいなと思っています。ただ、その自由参観週間というのも時間的な制限もあってなかなか全員がいろんな人の授業を見に行くというところまでできていないので、それに代わるものというわけではないですが「放課後教室ツアー」を計画したいと思っています。

<質問④>

「放課後教室ツアー」とは具体的にはどのようなものなのですか？

例えば放課後にみんなで「今日は2年2組の教室に行こうか」というように教室に行きます。そこで、今2年2組の先生が力を入れていることであったり、最近やってうまくいった実践であったりを教室で実物(使用したもの)などを見せながら、「こんなことやったらうまくいったよ」や「この前子どもたちがこのような反応をして…」というような実践について話す機会を設ける取組です。実際に授業を見に行くことができなくても、力を入れていることやこんな風にすればいいんだということ、この先生こんなことが得意なんだということが見えてくると思います。このツアーを通して「この人の授業見てみたいな」と思うようになり、実際の参観につながっていくのかなという風に考えて計画しています。

V小学校の校内研究会の参観を終えて、研究員の思い

今回は、研究授業と事後研究会を参観させていただきだけでなく、事前・事後インタビューも実施させていただきV小学校の先生方には大変お世話になりました。先生方の「学び」に対する熱意や子どもたちへの思いに直に触れることで、校内研究を活性化させることの意義を改めて感じる事ができました。



A先生の授業の様子



「1」グループの協議の様子



「3」グループの協議の様子

A先生は事前インタビューの際に、「何度も何度も指導案を書き直し、それでもまだ悩んでいます」と仰っていました。その言葉から、御自身の課題の先に子どもの姿を見据え、よりよい学びの場を提供したいという思いが伝わってきました。V小学校の先生方にもその思いが伝わり、協議が熱を帯びたのだと感じました。

V小学校の先生方が校内研究を通して、生き生きとした表情で学んでおられる姿を参観させていただけたのがとてもうれしかったです。ありがとうございました。



研究員 いなます けいこ 圭吾



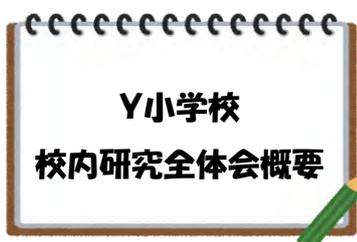
研究員 しまうち ゆうしょう 佑祥

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第9号 令和5年(2023年)10月10日発行

さわやかな風が吹き、何をするにも気持ちのよい季節となりました。みなさまにおかれましては、行事等で多忙な中、スポーツの秋、読書の秋などそれぞれに息抜きをしながら、日々の教育活動に邁進されていることと思います。プロ研通信第9号では、9月20日(水)に開催されましたY小学校の校内研究会の様子をお伝えします。

今回のY小学校での校内研究会を参観させていただくにあたり、A先生と校内研究主任にインタビューさせていただきました。研究授業と研究協議を通して自身の課題について学ばれた様子をお伝えします。



Y小学校 研究主題

課題に向かい、他者と交流する中で、自分の考えを再構築しようとする子どもを目指して

注目ポイント

・インタビューをした二人の学びのつながり



校内研究会の流れ

1. 授業者・学年より
2. グループ協議Ⅰ
3. 全体交流
4. グループ協議Ⅱ
5. 研究会振り返り

今回、Y小学校の校内研究会では、肢体不自由特別支援学級と自閉症・情緒障害特別支援学級のうち、校内研究主任から予め示されたクラスを参観しました。グループ協議は、「研究主題のために講じた手立てに対して子どもの変容は見られたか」「自分たちのチームで今後生かせそうなこと、9月の実践について」という二つのテーマで2回に分けて行われました。協議のメンバーは、夏休みのときと同じ研究グループで七つに分かれて行われました。異なるクラスを参観したメンバーが集まって行われた協議ですが、すでに課題が共有できているため、学びが深まる協議ができていました。研究会の最後に各自が振り返る時間が5分間取られていました。どの先生も集中して自己分析シート(プロ研で紹介した授業アップデートシートをY小学校用にアレンジしたもの)を記入されている姿が印象的でした。

研究主題を達成するために各クラスで講じる手立て

	相手に思いや考えを正確に伝えるための手立て	相手の思いや考えを読み取るための手立て
肢体不自由 特別支援学級	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に「くふうしたところは○○です」とカードに記入 ・「いいね」カード ・デジタルでデザイン 	<ul style="list-style-type: none"> ・ポスターを指し示すなどして話している内容と、意図が一致するよう支援
自閉症・情緒障害 特別支援学級	<ul style="list-style-type: none"> ・課題についての視覚支援 ・事前指導の時間の確保 ・Jam Board(Google社が提供するオンラインで使用できるホワイトボード)(以下、ジャムボードとする。)の活用 ・意思表示カード 	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャムボードの活用 ・話し合い活動のよさの理解

A先生へのインタビュー

<質問①> 今日参観されたことと事後の研究会で学ばれたことを教えてください。

私が参観したのは自閉症・情緒障害学級で、所属しているグループのテーマである“交流が活発になるためにどういうことができるか”という視点で見えていました。授業者は、「全体で意見を出しつつ、思っていることは伝え合える時間になるように」という意図で授業をされていたのかなと感じました。

子どもたちの様子を見てみると、自閉症・情緒障害学級ということもあり、緊張してなかなか意見を言うのが難しい様子が見られました。参観者がいなかったら、また違う様子が見られたのかなと思います。今日見た子どもたちの姿で考えるなら、なかなか自分の思いを伝えることが苦手な子どもからすると交流の場で自分の思いを伝えるのは本当に難しいことなんだなというのを改めて感じました。自分の学級ではどういうことができるのかなってすごく考えさせられました。

今日の授業では、自分の思いを伝えることが苦手な子どもに事前に意見を書かせていたので、教師が代わりに伝えてあげるといったサポートをされていました。私の理想としては、教師が入らなくても、子ども達で話せたらいいなというのを目指していました。でも、それができるようにしようと思ったらどうしたらよかったのかなって思います。今回授業者はいろんな手立てを考えておられたんですが、交流が盛り上がるかっていう点で考えると課題が見られたので、改めて交流することの難しさを感じました。



<質問②> 今日の学びから、これからの授業で生かしたいことを教えてください。

改めて大事だなと思ったことが一つありました。それは、とにかく思ったことを話すだけでもいいからペア活動を取り入れるとか、グループで気楽に話せるような場をつくるとか、話す場をこちらから仕向けて回数をこなしていくことです。「そのときだけ頑張る」じゃなくて、日常でそういうことをしているからちょっとずつ力が付いていくものなのかなと。

実は、10月11日(水)の研究授業に向けて授業を考えるうえで、夏休みから学年で、「なんでもいいから話す機会を多く作ることは大事だな」と話していました。自分の学級の子も達は研究授業当日、すごく緊張するんじゃないかなと思います。保護者参観でもそうですが、普段よく話す子が急に静かになったり、いつも意見を言っている子が、「これでいいのかな」と考えてしまってなかなか手が挙げられなかったりという状況はよく見ます。だから、まずは普段から話すとか、伝えるとか、聞くとかいうことに慣れさせることが大事だと思いました。

<質問③> 今日、A先生のグループで行われた協議の中で、一人の教員から「ジャムボードで交流すると意見を言わなくても交流ができる。だから、発言することだけが交流ではないんだ」という気づきが発信されました。A先生としては、緊張した子どもへの対処法の一つとしてジャムボードを活用することも考えられますか？

確かに、「言葉で伝えることが全てではない」とは思っています。ただ、私自身の理想が高いのかも知れませんが、ジャムボードを見れば相手の気持ちが分かるのはメリットでもありデメリットでもあるなと思います。「ほら、見たらわかるでしょ」という感じで、そこに頼ってしまうのは…。私は「言葉で伝える」「発信する」ことに意味があると思っています。だから、自分の思いを伝えることが苦手な子どもが第1ステップとして活用するのはありだと思いますが、できたら伝え合うということ大切にしていきたいというのが私の思いです。でも、それが難しい子はうちのクラスにも何人かいるので、今度の公開授業では、目に見える形で自分の意見が伝えられたり、友達の意見がわかったりする手立てを考えているところです。できる範囲で頑張れるように、いろんなタイプの子に合った手立てを少しでも多く用意できたらいいなと思っています。

校内研究主任へのインタビュー



<質問①> 今日の研究会を終えた感想を教えてください。

研究会の度に、いろいろな取組をやってみています。今回であれば、たまたま二つの学級で授業を公開されるということだったので参観グループも分けてみました。その分け方も、夏のチームを生かして、夏に目標を立てた同じチームで協議をすることにしました。今回なぜこのような研究会の設定にしたかという、自分たちのグループの視点で参観できるということと、異なる学級で見合ったものを持ち寄って研究会をすることで手立てや考えを広げられるとよいと考えたからです。自分は見ることができませんでしたが、もう一つの学級ではそういう手立てをしていたんだという学びがあるかなど。研究テーマは一緒なので、提案される内容は似通っているというか、違うけど似ているというか。そこで得られる学びが研究会であつたらいいなと思って挑戦してみました。

今年1年本当は、ものすごく安定した研究会にしようと思っていました。誰でもできる研究主任を目指してすごくシンプルにしていこうと思っていました。なぜかという、昨年まで校内研究のサブでいたときから、100周年とか、いろいろ大きなものがあって、校内研を負担に感じられる方がすごく多いのかもしれないと思っていました。ただ、今は、参加してくださる先生方にとって、校内研究に身を任せていたらいつの間にか「学び」が変わっていくという風にできたらいいなと思って進めている感じです。

<質問②> 今日ICTのグループが実践されていた参観の方法は、Y小学校では今までからやっておられた方法ですか？

肢体不自由学級のB先生が、今回子どもたちにICT機器を使ってポスターを作成させる取組をされていました。それもジャムボードとかのツールではなく、他の教育サイトからのアプリを使ってされていました。それくらいICTに長けたB先生が「指導案にコメント機能があるので、そこにどんどん書き込んでいってもらえたら嬉しい」と仰っていたことが始まりです。ただ、仰っていたのが先週末で、職員全員に周知するのは難しく、「今回はICTのグループの先生に限定するのはどうですか」と伝えると、「じゃあ一回試しにやってみよう」というので今回やってもらいました。

今回ICTグループの代表として全体交流の時にまとめを発表されたC先生と、研究会の後に話をしていると、「あれよかった」と仰っていました。その理由について、「ベテランの先生は研究会を見ている視点・参観の視点がすごく定まっていると思う。『ここが見どころや』とか『今子どもがこういう反応した。これ、今の指導者の声掛けによるものや。ここから変わっていくで、きっと』という風に見るところがわかっている先生もいらっしゃる。でも、どこを見たらよいか、何がよかったのか、いまいち具体的にわからない先生も絶対にいらっしゃると思う。それがタイムリーに共有できるのがよかった」と仰っていました。その意見に私はすごく納得できました。「タイムリーにコメントが出てくるので、『あ、そこを見ればよかったんや』と授業参観の仕方についても学べると思う」と仰っていたのも大きなメリットだと思いました。さらにもう一つのメリットが、授業公開中に、自分のグループの先生方の見方を共有できているので、研究会の時間が短くて済むことです。協議の時間が始まると同時に、「あ、こう思っておられましたよね」とか「ここ一緒でしたね」と協議を始めることができます。さらに、「ここ、なんでそう思われたのですか」など、後で聞こうと思うことを整理したうえで研究会に参加できるのもメリットだと思います。

この取組については、もう少し他の先生にも感想を聞きたいと思っていますが、次回の校内研究会でもやってみようと考えています。早速、B先生に声をかけてみたところ、コメントの残し方というかGoogle Chromeの操作の仕方をもう作ってくださったみたいで、その資料を使わせてもらってみなさんに共有してみようと思っています。できたら全員が使ったうえで第6回のプロ研を迎えたかったんですが、ICTが苦手と仰っていた先生が今日も使いこなしておられたし他の先生方もいけるかなと思うので、研究推進委員会で検討してみようと思っています。

今までも、いろんな交流方法を試しましたが、やっぱり時間の問題って、プロ研でもみなさん悩まれていたことでなかなか解決が難しいと思います。先に付箋に成果と課題を書いておいて、後で持ち寄ってしゃべるという方法でも、初めに「私はこう思います」と共有してからでないとなかなか協議を始めることができませんでしたが、ICTを使うとそれが解決するかもしれないと思っています。

限られた時間を有効に使うということでは、今回の事後研究会の構成についても悩みました。今日は授業の交流をした後、全体交流を入れてから、グループの視点でしゃべるという構成にしました。前半は本時のこと、後半は自分たちの今後についてとちゃんと整理した方が話し合いやすいかなと思ったんです。ただ、自分がしゃべってみると、1回目の話し合いの中で、グループテーマの視点で話していたので、わざわざ協議の時間を分けなくてもよいのかもしれないなど。みなさんもともと参観の時から、そのグループの視点で見ておられるはずだとも思いました。

<質問③> 今日の学びを今後どのように生かしていこうと考えていますか？

今の方向性で言うと、ICTを用いて参観するのを取り入れてみようかなと思っています。まだ許可は得てないのと、いろんな先生にお聞きしてからですけど、それと、交流の時間を有効に使うために、連続した話し合いの時間を設けて、その中身を章立てして、共有の時間、それぞれの成果と課題をまとめる時間、自分たちの視点でしゃべる時間みたいな感じにしようと考えています。そして、リーダーさんがそれぞれの話を行き来できるように話し合いをリードしてくださったらよいなと思っています。

あとは、授業を見に行つて“よいところ”を見つける参観Weekを実施するのはまだ難しいので、今は私がたくさん行つて、板書を撮ったり、よいところを見つけたりして通信にしています。「これは誰の板書でしょう」ってクイズにして当たったらシールをあげるという企画もしたんですが、一人しかもらいに来てくれなかったの、次の号では、「もっともらいにきてください」って書くつもりです。なんとか、広がってくれたらよいと思うので、校長先生にも「見に行ってくださいましたか？」「今週は誰の授業がよかったですか？」と声をかけてみようと思っています。それと、通信に「校長先生の一押し」っていうコーナーも作ってみようと思っています。

Y小学校の校内研究会の参観を終えて、研究員の思い

今回は、研究授業と事後研究会を参観させていただいたうえで、事後インタビューも実施させていただきました。参観するだけでも先生方の学びに対する熱意や子どもたちへの思いの熱さに触れられるのですが、インタビューすることで、学びのつながりや目指す姿が具体的に見え、「学んで楽しい！このワクワクを子どもにも！」というとても前向きな気持ちになりました。それぞれの学校でも、校内研究を通してワクワクするような「学び」を一緒に実現していきましょう。



研究員 いなます けいご 稲益 圭吾



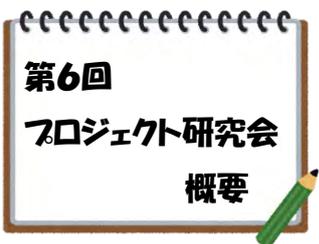
研究員 しまうち ゆうしょう 島内 佑祥

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第10号 令和5年(2023年)10月26日発行

秋晴れの陽気が心地よい頃となりました。実践校のみなさまにおかれましては、運動会や体育祭、文化祭などを終えて2学期の折り返しを迎えられ、年末に向けて目標を見据えながら日々の教育活動に邁進されていることと思います。

プロ研通信第10号では、10月11日(水)に開催しました、第6回校内研究活性化プロジェクト研究会での研究委員のみなさんの学びを振り返ります。今回のプロジェクト研究会は、Y小学校の先生方に御協力いただき、研究授業と研究協議を参観させていただきました。参観を通して学ばれたことを自校の校内研究活性化に生かしていこうと考えておられる研究委員のみなさんの様子をお伝えします。



第6回プロジェクト研究会のめあて

Y小学校の教員の学びを見取り、教員一人ひとりの学びの転換を推進する校内研究のあり方を考えよう!

第6回プロジェクト研究会の流れ

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1. 研究授業の参観に向けての説明 | 5. 校内研究会の参観に向けての説明 |
| 2. 研究授業の参観 | 6. 校内研究会の参観 |
| 3. 開会の挨拶 | 7. 振り返り |
| 4. 研究授業についての協議 | 8. 閉会の挨拶 |

※開会の挨拶は参加者が全員集合した授業の参観の後に行いました。

授業参観に向けて

今回のプロジェクト研究会で、研究委員のみなさんに参観していただいたのは、プロ研通信第7・9号でインタビュー記事を紹介した3年担任のA先生による第3学年国語科「ちいちゃんのかげおくり」の授業でした。

授業の参観にあたり、研究委員のみなさんにはその後の協議を焦点化するために「授業参観記録シート」(図1)を使用させていただきました。

「授業参観記録シート」には、Y小学校の校内研究主題と授業者であるA先生の課題のつながりや、これまでのA先生の学びなどの情報をまとめています。さらに、参観までに情報を整理し、子どもの学びの姿から授業を参観することで授業者のねらいや指導とのつながりを見取っていただけられるようにしました。

令和5年度 第6回校内研究活性化プロジェクト研究会 in Y小学校

授業参観記録シート

所属校() 氏名()

Y小学校の校内研究主題

課題に向き合い、他者と交流する中で、自分の考えを再構築しようとする子どもをめざして

「共通実践」の方向性や内容

①自分の思いや考えを相手に正確に伝える力
②相手の思いや考えを深く読み取る力

第3学年国語科 授業者 A先生

・子どもの学びの姿から授業を参観し、6校時に研究委員同士で協議を行う。
→協議の際に子どもの学びの姿とその要因を語れるように準備をしましょう。
・校内研究の取組に関して気付いたことや感じたことも記録しましょう。

授業者の課題	・学級内の学力の差が大きく、児童一人ひとりの学びにつながる授業づくり、学級全員が参加できる授業づくりに難しさを感じている。
授業者のこれまでの学び	・1時間の授業でめあてやポイントを焦点化することの大切さ。 ・話し合い活動で話し合いの進め方を確認すること。 ・子どもたちにとって新しい発見や変化が見られる交流にする。
参観する視点	事後研究会参加グループ
	見取りたいこと
参観しての気づき	

図1 授業参観で使用した「授業参観記録シート」

また、管理職の先生方には授業を参観していただく際に「授業参観記録シート(管理職 ver.)」(図2)を使用していただきました。

このシートは、授業者が次の授業改善につなげようと自信をもったり、新たな気付きを得たりできるためのフィードバックをしていただけるように活用していただくことを目的としています。そのため、管理職の先生方にも、「子どもの学びの姿とその要因」に焦点化して参観していただいたうえで、A先生に直接フィードバックしていただきました。

令和5年度 第6回校内研究活性化プロジェクト研究会 in Y小学校

授業参観記録シート(管理職 ver.)

|校長先生

Y小学校 校内研究主題
課題に向き合い、他者と交流する中で、自分の考えを再構築しようとする子どもをめざして

「共通実践」の方向性や内容

①自分の思いや考えを相手に正確に伝える力
②相手の思いや考えを深く読み取る力

第3学年国語科 授業者 A先生

「授業者の課題解決に向かう実践(授業改善)と児童の学びに向かう姿のつながり」について、管理職の先生方に気付いたことを見取っていただき、授業者が次の授業改善につなげようと自信をもったり、新たな気付きを得たりできるためのフィードバックに向けた記録として活用していただきますようお願いいたします。

授業者の課題	・学級内の学力の差が大きく、児童一人ひとりの学びにつながる授業づくり、学級全員が参加できる授業づくりに難しさを感じている。
授業者のこれまでの学び	・1時間の授業であてやポイントを重点化することの大切さ。 ・結合活動で話型や進め方を確認すること。 ・子どもたちにとって新しい発見や変化が見られる交流にする。
授業者の課題解決に向かう実践と児童の学びに向かう姿のつながり	
授業者の実践	児童の学びに向かう姿

図2 管理職の先生方に使用していただいた「授業参観記録シート(管理職 ver.)」

研究授業の参観

Y小学校には50名を超える先生が在籍されており、一つの教室での参観人数が多くなり過ぎないようにする運営の工夫をいろいろと実践されています。この日は同時に4年3組でも研究授業が行われ、分散して参観するという工夫が見られました。

プロジェクト研究会としては、A先生の授業を参観させていただきました。



Chromebookを使って指導案への書き込みを即時で共有

授業者であるA先生の課題は「学級内の学力の差が大きく、児童一人ひとりの学びにつながる授業づくり、学級全員が参加できる授業づくりに難しさを感じている」ことです。その課題を解決するために、A先生は様々な手立てを講じておられました(表)。

また、校内研究主任は、かねてより「校内研究で協議の時間を十分に確保することが難しい」と仰っていました。その課題を解決するために今日の授業参観では、同じ研究グループに所属されている先生方がChromebookを使って指導案への書き込みをその場で共有することで、研究協議における情報共有の時間を短縮することに挑戦されました。



3年4組の授業の様子

表 A先生の課題解決に向けての手立て

児童一人ひとりの学びにつながる授業づくり	学級全員が参加できる授業づくり
<ul style="list-style-type: none"> 児童一人ひとりに冊子風のワークシートを作成する。 グループ活動の際の席移動の仕方 →同じ方向を向いて座ることでワークシートを共有しやすくする。 言葉の宝箱 →考えや気持ちを表す言葉を活用し、自分の思いを表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> 名前マグネットを用いて、問いに対する自分の立場を明らかにする。 「反応マン★」の活用する。 →「うんうんさん」「でもでもくん」「わからんさん」など、友達の意見に反応する例を提示する。

研究委員のみなさんには、予め御自身が感じておられる課題に近いテーマをもつY小学校の校内研究グループを選んでいただきました。そのうえで、子どもの学びの姿とその要因に注目して授業を参観していただきました。

研究委員のみなさんが選択されたグループ



B先生

「指導と評価の一体化」グループ



C先生

「学力低位の子への支援の仕方」グループ



D先生

「交流が活発になる条件の設定や手立て」グループ



校内研究主任

「学力低位の子への支援の仕方」グループ

自身の課題を設定し、目指す子どもの学び姿を思い浮かべながら授業を参観することで、参観の視点が明確になります。そして、教員の課題を解決する手立てを探るためには、授業の中で子どもの学びの姿をじっくりと観察し、教員の指導と結び付けて考察することが大切なのだ、研究委員の先生方の姿から私たち(研究員)も改めて学ばせていただきました。



研究授業についての協議

研究授業を参観した後、研究委員同士で授業についての協議を行いました。協議の目標は「研究委員のみなさんの学びを共有し、協議することで、自身の課題解決に生かせる手立てを見いだす」ことでした。

それぞれが異なる課題を設定して参観した授業を基に話されていたのですが、子どもの学びの姿から協議が繰り広げられることにより、一人ひとりの課題につながる新たな気づきを得られる場面がたくさん見られました。



研究委員同士の協議の様子

また、この協議を通して研究委員のみなさんには、校内研究会の中でターゲット教員(各グループ内で研究委員が注目する教員)の学びを見取るための視点を整理していただきました(図3)。

	5校時	6校時	放課後
		研究委員同士の協議	校内研究会の参観
プロジェクト研究会	研究授業の参観	<div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-right: 10px;">自身の学びの振り返りと省察</div> <div style="font-size: 2em; margin-right: 10px;">→</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-right: 10px;">ターゲット教員の学びを見取るための視点を整理</div> <div style="font-size: 2em;">→</div> </div>	ターゲット教員の学びの見取り
Y小学校	研究授業の参観	各学級で授業	校内研究会

図3 プロジェクト研究会による校内研究会の参観に向けての準備

校内研究会に向けて

校内研究会の参観をする上で、校内研究主任の先生からこれまでの取組の話や今回の校内研究会での工夫点などをお話いただきました。

今回は、初めてICT機器を活用して意見交流を行います。これまでは指導案に直接書き込んでいたことを、画面上で共有して研究会に臨むということに挑戦してみました。運用がうまくいっていないグループもあったのですが、この取組が研究会でどのように生かされるかが楽しみです。時間の確保がやはり問題なので、限られた時間の中で深く話し合うためには、研究会までに情報を共有しておくことは必要だと思っています。ICT機器の活用がその問題を解消する手立てになればよいと思っています。

今回、研究会の進め方を、「グループ協議1→まとめ→グループ協議2」としています。協議を二つに分けた理由としては、グループ協議1では、研究主題に則って話し合いをし、まず校内研究全体の成果と課題をまとめたいからです。その後、グループ協議2では、そのまとめを基にして自分たちのグループテーマで話し合います。前回の研究会でも協議を2回に分けて行ったのですが、グループ協議1の時に研究主題ではなく自分たちのグループテーマで話をされている先生が多かったので、まとめをするときに何が成果で何が課題だったのかが分かりにくくなってしまいました。その結果、研究会後にもう一度、いろいろな先生方に話を聞きに行ったり、プリントを見直したりしなくてはなりません。今回はグループ協議1と2で、協議の視点をしっかり定めて話し合いをしてもらうことで、成果と課題が明確になるとよいと思っています。



このお話からも分かるように、校内研究の目指す方向を定め、トライ＆エラーを繰り返しながらよりよい校内研究のあり方を模索されています。校内研究主任として、普段からY小学校の先生方の学びを見取り、成果と課題を把握されているからこそ、次の一手が打てるのですね！



校内研究会の参観

校内研究会の参観では、研究委員のみなさんにターゲット教員の学びを見取りながらグループ協議に参加していただきました。協議の場での学びを見取るだけでなく、ターゲット教員が設定した課題とこれまでの学びを記した「校内研究・自己分析シート(Y小学校版「授業アップデートシート」)」に目を通していただいてから、グループ協議に参加しました。

参観終了後に研究委員のみなさんには、グループ協議中に見取ったターゲット教員の学びを整理したり、ターゲット教員の今後の学びにつながる情報を収集したりするためにインタビューを実施していただきました。



教員の学びを見取る



ターゲット教員へのインタビュー

今回、学びを見取っていただいた経験を各実践校の先生方の学びの見取りに生かしていただき、今以上に教員一人ひとりの学びの転換を推進する校内研究のあり方を考えていただけることを期待しています。



研究委員のみなさんの振り返り

○第6回プロジェクト研究会の振り返り

- ・校内研究の大きなテーマだけでなく、具体的な課題設定や学びの姿をもって授業を見ることでより学びが深まると感じた。また、指導と評価の一体化を考えた時に、その指導は明確な授業の展開や手立て、子どもの姿をきちんとをもって臨む必要があると思った。
- ・他校の研究会の様子を見せていただくことは、とても刺激になりました。小規模校では考えられないような参観や交流の仕方があり、新鮮だった所と、自校でも取り入れられそうなのがありました。また逆に、小規模であるがゆえの強みも感じられました。
- ・小学校の先生方が子どもたちにどんな力を付けさせたいか明確にもち、授業研究されていることがよくわかりました。子どもの様子をしっかりと見て、手立て・支援がとても細やかにされていることも大変勉強になりました。
- ・新しい研究会の進め方を工夫し、実践しています。本日もICTを用いるということや会の進行方法を変えるという工夫をしました。自分自身のグループでは、とても話し合いがスムーズになったように感じます。他の先生方の意見を取り入れながら、研究会の進め方をまた考えていきたいと思えます。

○第6回プロジェクト研究会での学びを自校の校内研究会でどのように生かしたいですか

- ・グループ協議での話し合いは、全体よりもより「自分事」として捉えやすいように感じた。来週からの校内研究会で検討したい。若い先生のとても熱心な姿を見て、本校でも同じ姿になるような取組内容やアプローチを考えたい。
- ・3～5人の小グループでの話し合いは、短い時間でも全員に発言のチャンスがあってよかったと思います。また、発表者に対して校内研究主任が「何がそれを引き起こしたと思いますか」と問い返されていたのが、授業を見ているようで、真似したいと思いました。
- ・研究主題に全員がしっかりと向かっていけるような工夫がされていました。授業の中で入れた手立てを参観前に具体的に知っておくことは、参観する視点がはっきりしてグループ協議もしやすいと感じました。
- ・授業者やグループリーダーにここまで深く関わることができるのだということが新たな学びです。もっと一人ひとりの先生の思いや教育に対する考えなどをお聞きしたいと思いましたし、それを把握することで研究会もより深まると思いました。

第6回プロジェクト研究会を終えて、研究員の思いと今後に向けて

まずは、今回のプロジェクト研究会を開催するにあたり、多大な御準備をいただいた、校内研究主任をはじめ、Y小学校のみなさんに感謝をお伝えしたいと思います。ありがとうございました。

今回は「教員の学び」を見取ることで教員一人ひとりの学びの転換を推進する校内研究のあり方について考えていただきました。これは授業において先生方が子どもの学びを見取り、次の授業改善に生かす過程と似ていると思いませんか。研究委員のみなさんによる学びの見取りでさらなる校内研究の活性化につなげていきましょう！



研究員 いぬます けいご 稲益 圭吾



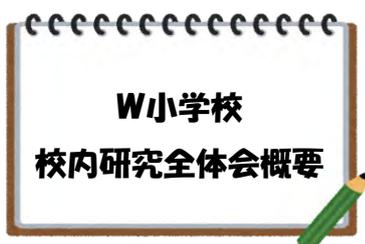
研究員 しまうち ゆうしょう 島内 佑祥

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第11号 令和5年(2023年)11月7日発行

秋が深まり、夜の寒さが強まってきました。プロ研通信第11号では、10月18日(水)に開催されましたW小学校の校内研究会の様子をお伝えします。

授業者のA先生と研修推進委員および高学年部の先生方は、夏季休業期間からこの日までに、複数回の指導案検討会や事前授業を通して学びを進めてこられました。そんな学びの詰まった研究授業を通して、参観者の先生方が校内研究を自分事と捉えて学びを進めておられる様子をお伝えします。



W小学校 研究主題

自ら考え、表現できる子どもの育成をめざして
～日常生活と算数をつなぐ授業展開の工夫～

注目ポイント

- ・授業検討会を通じたA先生(授業者)の学び
- ・教員一人ひとりが自分事と捉える校内研究

第1回指導案検討会

8月17日(木)、夏季休業中に今回の研究授業に向けての第1回指導案検討会が行われました。参加者は、高学年部(5・6年生の学級担任と特別支援学級の担任)の先生方、5名でした。

W小学校の研究の窓口となる教科は算数科であり、研究の副題に書かれている通り「日常生活と算数をつなぐ」ことを通した子どもの育成を大切にされています。そのことを踏まえ、授業者のA先生が提案されたのは、第6学年算数科「およその面積や体積」の授業でした。日常生活において、私たちが概数を多くの場面で使っていることを考えると、単元を通して子どもたちの生活と算数科の学習をつなげることができそうです。

指導案検討会が始まると、A先生は以下の3点の検討事項を挙げられました。

- ①「大昔に地球の裏側に巨大な隕石が衝突し、その衝撃で琵琶湖が飛び出したことでできた島が淡路島である」という「琵琶湖と淡路島の伝説」を検証する課題の設定は子どもの主体性を引き出すものになっているか。
- ②1時間の授業の中で琵琶湖と淡路島、両方のおよその面積を求める授業展開にすると時間が足りなくなるのではないか。
- ③琵琶湖と淡路島の「およその面積」を求め、その後どのように授業を締めくくればよいか。



琵琶湖と淡路島

指導案検討会の中で出された意見を3点の検討内容に照らして整理しました。

①課題について

- ・全国学力・学習状況調査の児童質問紙の結果、「(51)算数の勉強は好きだ」の項目はポイントが低かったが、「(52)算数の勉強は大切だ」の項目はポイントが高かった。子どもたちにとって、算数科の学習は好きではないが大切だと思える学習だ。だからこそ、子どもたちがやってみたくと思える課題は大切だと思う。
- ・「伝説」というキーワードもあり、子どもたちの興味・関心を引くことはできそうだ。



第1回指導案検討会の様子

②授業展開と時間配分について

- ・琵琶湖のおよその面積を全員で求めることで求め方を身に付け、淡路島のおよその面積は適応問題として出題してはどうか。
- ・1時間目はおよその面積の求め方に重点を置き、2時間目で伝説の検証問題に取り組んではどうか。
- ・一人で二つの面積を求める必要はないのではないか。
- ・計算でつまづきを減らすことと時間短縮のために電卓を用意してはどうか。

③授業の締めくくり方について

- ・子どもたちに付けたい力を明確にする必要がある。これまでの学習を生かしておよその面積を求めることが目標であり、伝説の真偽を確かめることが目標ではない。
- ・本時のまとめを「およその面積を求めるためには～」のようにしたいから、そうなるように授業を組み立てていく必要がある。

その他

- ・およその面積の有用性を子どもたちが気付けるようにしたい。
- ・他社の教科書も参考にして課題を検討してみてもどうか。

子どもたちが主体的に学習に取り組むことができるように考えられた指導案を学年部の先生方が様々な視点から検討されていました。その様子から、A先生の個別最適な学びを支える協働的な学びの場は、他の先生方の個別最適な学びの場にもなっていると感じました！



研究員 しまうち ゆうしょう 島内 佑祥

事前授業と事後検討会

10月12日(木)に研究授業に向けての事前授業と事後検討会が、高学年部の先生方に加え、研修推進委員の先生方の9名で行われました。事前授業は授業者が担任を務める学級とは異なる学級で行われました。事後検討会では、授業中の子どもの学びの姿から協議を進めることができるように授業のビデオが用意され、机には子どもたちがグループ活動で用いたワークシートとホワイトボードが準備されていました。



事前授業後の検討会の様子

以下、検討されたことの一部を授業の場面ごとに整理しました。

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">導入</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「琵琶湖と淡路島の伝説」の導入はよかった！子どもたちの思考がスムーズに本時の課題に向かった。スクリーンではなく、大型モニターで提示すればさらによいと思う。 ・このやり取り(下枠内)から「およそ」の考え方につなげていくことができればよかった。子どものつづやきを拾い、広げることができれば本時のねらいにつながった。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>T : 琵琶湖と淡路島の面積求められる？ C1 : 求められへんやん！ T : どうして？ C1 : だって線がぐにゃぐにゃやもん。 C2 : (小声で)四角形に置き換えたらええんちゃう？</p> </div>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">自力解決に入るまで</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが、問題を自力で解決するための道筋を十分にもてないまま自力解決の時間に入ってしまった。その結果、子どもたちの手が止まった。自力解決の時間に入るまでにもう一段階ステップが必要だ。 →子どもたちから出てきた求め方を板書に残せばよかったのではないか。 板書を手掛かりに自力解決に向かえた子もきつというはず。 ・教師がどこまで自力解決に向けてのヒントを与えるべきなのかわからない。 →求め方のヒントは子どもたちから出せるようにしたい。
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">自力解決</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・琵琶湖と淡路島のどちらか一方を自分で選択して面積を求めるのはよかったと思う。 ・1マス(縦5km、横5km)で25km²だということに気付いていない子が多かった(図1)。 ・子どもたちは、およその面積を求める場合でも土地を切り捨ててはいけなくと考えていることが分かった。だから、大きく囲みすぎていた(図2)。 →非常に多くの子どもが迷っていた。 子どもたちと、目的に合わせて切り捨ててよいかを考えたい。 ・ヒントカードはあった方がいいが、全員に渡すのではなく困っている子に対して渡すものにしないと、思考の誘導になってしまう。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div data-bbox="895 987 1362 1249"> </div> <div data-bbox="927 1261 1278 1290"> <p>図1 提示された課題(琵琶湖)</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center; margin-top: 20px;"> <div data-bbox="890 1339 1326 1576"> </div> <div data-bbox="927 1588 1278 1617"> <p>図2 琵琶湖を全て囲んだ考え方</p> </div> </div>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">グループ活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ作りにかかる時間を短縮できないか。 ・グループ活動の手順がわかるような工夫があるとよい。活動が停滞しているグループが見られた。 →大型モニターに活動手順を示しておくとい。
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">全体交流まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・最後に琵琶湖と淡路島の正確な面積を伝えることで、「およその面積」であっても、ある程度精度を高く求める必要があることに気付かせることができる。それが次時のめあてにつながらないか。

教師の学びを生かした研究

10月18日(水)5校時に、A先生が担任する学級で研究授業が行われました。

検討を重ね、学んでこられたことを生かし、本時の授業でA先生が実践された内容は以下の通りです。



研究授業の様子

導入	<ul style="list-style-type: none"> ・「琵琶湖と淡路島の伝説」を、プレゼンテーションソフトを活用して大型モニターで提示 →短時間でわかりやすく学習活動を伝えることができた。
自力解決に入るまで	<ul style="list-style-type: none"> ・「およその面積」の求め方の整理 →「マス目を数える」「三角形に見立てて求める」など、子どもの発言から自力解決の手立てをまとめる。 →自力解決のヒントをカード化して黒板に貼り付ける。 ・一マスの面積が25km^2であることの確認
自力解決	<ul style="list-style-type: none"> ・電卓の使用 →全員が使える数の電卓を用意しておき、子どもが必要に応じて取りに来る。 ・ヒントカードの配付 →求積の公式をカードにして、公式でつまづいている子どもに配付する。
グループ活動	<ul style="list-style-type: none"> ・グループづくり →自力解決の進み具合や方法などからグループを作る。 ・大型モニターの活用 →グループ活動の進め方の例を示す。
まとめ全体交流	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の締めくくり →子どもたちが求めた「およその面積」と正確な面積を比べ、誤差が少ない求め方について考える時間を取る。

夏季休業中に構想された授業を、たくさんの学びを生かして何度も再考してこられたことがとてもよく分かる授業でした。特に、教師主導の授業から、子どもたちが自分で選択する場面の多い、子ども主導の授業へ舵を切られたことは大きな変容だと思います。



研究協議会の様子

研究協議会は、先生方の授業改善に関する課題を基に「支援の仕方」「板書の工夫」「発問、声掛けの工夫」「交流が活発になる条件の設定や手立て」の四つのグループに分かれて行われました。

校内研究会の流れ

1. 授業者・学年より本授業に関わって
2. 質疑応答
3. グループ協議
4. 全体交流
5. 研究会の振り返り

協議のポイント

- ①研究主題を達成するために、本時の授業展開はどうであったか(御自身の課題にも触れながら)。
- ②授業者の課題に沿った視点から見て授業はどうだったか。

これまでのW小学校のグループ協議は、グループごとにテーマを分けるのではなく、全グループが校内研究主題に沿った協議をしていたようです。しかしそれではテーマが大きく、内容が漠然として終わってしまっていたようです。

そこで今回は、視点を絞り具体的に協議ができるよう、校内研究主任がY小学校で実施した第6回プロジェクト研究会での学びを生かし、似た課題意識をもつグループでの協議を設定されました。

グループ協議では「グループ協議メモ」(図3)を活用し、「①研究主題のための、授業展開はどうであったか(個人の課題にも触れながら)」「②授業者の課題についてどうだったか」の2点について協議が行われました。

授業者の課題
交流が活発になる条件の設定や手立て

時短

板書 準備 パワポ

グループ協議メモ

研究主題のための授業展開はどうであったか(個人の課題にも触れながら)

- **グループ分けして考える**
 - 普段からタイプが似た者同士の交流の時間を。
- **三角形のとりに方に迷う姿** (1人の発想から流れてきた)
 - ヒントを！途中で底辺・高さ・縦横の線を確認。言葉で交流できる。比べられる。自力解決の道。
- **導入のやり取り** 子どもたちの不安とどうした!!
 - 周りを見る子たちからそこそこ提示! かせぎ!
 - 今まで習った形全て提示 → 安心して色を選べる!
 - 前日地図を回してやることで"見方を工夫できた?"
- **違いかけすぎる... 仕上げ多**
 - 授業者の課題についてどうだったか
 - **新しいグループ分けにチャレンジした!**
 - 活発な交流のためなら4月からくり返す。
 - 似たタイプの交流で1人1人自信をつけさせる!
 - 通し番号、色わけ にはおとすと使える
 - **仕上げの中にぬけポイントを!**
 - 子に信じて、考えを待つ時間を!!
 - 子とやり取り厳しければ先生も使う!!
 - **明日から活かそう!**
 - 他の方の意見を発表・とにかく話す! 立つ!
 - しゃべる・聞かせる・話すことの自信!
 - 子どもの皮をはがす。

● Good ポイント
● のびしろポイント
● アイデア・アドバイス

図3 研究協議で使用された「グループ協議メモ」

以下に、グループ協議の一部を紹介します。

※「交流が活発になる条件の設定や手立て」グループでの発言の内容を研究員が整理して作成

- B先生：子どもたちから出された自力解決のヒントを、カード化して黒板に貼り付けることは有効だった。事前授業の時よりも子どもの手は止まらなかったし、ほとんどの子どもたちが求め方を図に示せていた。
- C先生：しかし、それによって考え方が誘導されてしまったような印象も受けた。もう少し多様な考え方が見られてもよかったように思う。きっとそれが活発な交流につながると思う。

a児とb児は琵琶湖を三角形に見立てて面積を求めていた。それぞれが見立てた三角形の大きさは同じであったが、線を引いている場所が異なった。グループで一つの考えにまとめる時に、次のようなやり取りがされていた。

a児：私、bさんの考え方の方がいいと思う。
 b児：なんで？
 a児：三角形の大きさは一緒やけど、bさんの方が余白少ないもん。
 b児：そう言われればそんな気もするな。

このやり取りを聞いていて思ったのだが、子どもたち同士で「なぜ」を問うことが活発な交流につながるのかなと考えた。そのためには相手の話を聞いて、自分の考えと比べることも必要だと思う。

事前授業の時にも感じたことですが、W小学校の先生方は子どもの学びの姿から授業について語ることが当たり前になっています。その素地に、テーマを設定したグループ協議が加わることで、より具体的な学びの姿から協議が進められていました。



W小学校の先生へのインタビュー

今回は授業者のA先生と、本年度からW小学校に赴任されている先生の2名にインタビューをさせていただきました。

< A先生へのインタビュー >

< 質問① >

御自身の課題を具体的に教えてください。

子どもの学ぶ姿を具体的に想定して授業づくりをすることができていません。目の前にいる子どもたちに合った指導をしていかなくはないかと思っていますが、それがなかなかできていないというのが私にとっての大きな課題です。



A先生

< 質問② >

研究授業を通してどのような学びを得られましたか。

授業中は子どもを困らせたくなかったため、たくさん授業に向けて準備をしてきたつもりでした。しかし、それでも子どもの思考が止まってしまうことがありました。きっとそれは、子どもの思考と私の支援の差が生み出したもので、その差についてもっと考えて準備をしていけるとよいと思います。例えば、完全に手が止まっていた子やこちらが想定していなかった既習図形を描きはじめた子もいました。自力解決の時間を取るまでに、子どもたち全員が見通しをもって自力解決に臨めるように授業を展開すればよかったなと思っています。また、発問は自分自身の焦りから何度も問い直してしまっていたので、子どもたちに伝えたいことを精選していかなければいけないと思いました。

< 質問③ > 御自身の課題に向かって今後、どのように学びを進めていこうと考えていますか。

今回の研究授業では、グループ活動を活性化させたいと思い、子どもたちの考えを基にしたグループづくりに挑戦してみました。このグループづくりは初めて挑戦したこともあり、よかった点も改善点も含めて、算数科だけでなく他教科の授業でも生かしてよりよい手立てにしていきたいと思っています。

< 質問④ > 校内研究を自分事として取り組んでいますか。

過去にも研究授業をしたことはあるのですが、正直なところすごく嫌でした。研究授業を考え、「私は〇〇〇のようにしようと思っています」と伝えると、「いや、それは×××のようにした方がいいよ」と言われることがありますよね。これまでは、それが私を否定しているように感じていました。でも、今回の研究授業は楽しいと思えたことが多かったです。「こうやりたい」という思いがあり、それに賛同してくださる先生方がいたからです。試行錯誤しながら授業づくりを進め、隣の学級で事前授業をさせていただき、改善すべき点やよかった点を話し合いながら、次の手立てを考えることができたことがすごくよい経験になりました。

< D先生へのインタビュー >

< 質問① > 御自身の課題を具体的に教えてください。

板書の仕方、発問の仕方、授業の組み立て方など、いろいろ勉強したいと思っています。また、授業中に教師がどこまで支援をし、子どもたちに任せていくべきかの加減も難しいと感じています。

< 質問② >

研究授業を通してどのような学びを得られましたか。

新しいことにチャレンジすることは大事なことだなと思いました。幸せなことに、私の周りにおられる先生方はもったいぶらずに御自身の経験を教えてくださいました。今日の協議の中ですと、「活発に交流するためには」ということとお話をさせていただきました。その中で「僕はこういうことをしているよ」とか「普段はこういうスタイルでやっている」ということをたくさん話していただきました。その中には、私がし



D先生

ていることに似ているものもありました。似ているのなら、さらによくしていくために取り入れやすいこともあるなと思いました。その人のまま真似することはできませんが、学んだことを自分のスタイルの中に取り込むことはできるのではないかと思います。

<質問③> 本日の学びをどのように実践に生かそうと考えていますか。

すぐに生かせるなと思ったことは、友達の考えを他の子が発表するという手法です。この手法は以前に少しだけ取り組んだことがあったのですが、私はうまくいかずにすぐやめてしまいました。でも、今日どのように取り組んでおられるか聞くと、友達の考えをそのまま発表するのではなく、友達の考えを自分の言葉に置き換えて発表したり、その考えのよいと思ったところまで話すようにされたりしているとのことでした。これらの工夫を生かして、学級の子どもたちに合った手法を考え、もう一度やってみようと思います。

<質問④> 校内研究を自分事として取り組んでいますか。

私は、校内研究を自分事として取り組んでいると思います。校内研究の括りがどこまでなのか曖昧なのですが、私にとっては毎日が学びの連続です。私が困って小さな声で呟いていることをW小学校の先生方は拾い上げて一緒に考えてくださいます。そして、やってみようという気持ちを受け止めてくださいます。だから、やってみようと素直に思えるのがとても楽しいです。子どもの変化が見えてくると、自分の方向性に自信をもてるし、楽しいなと思えます。チャレンジしたことが子どもの反応や変化として返ってくるのが、本当に楽しいです。

校内研究主任へのインタビュー

<質問①>

本日の研究会を振り返り、よかった点と改善していきたい点を教えてください。

よかった点は、グループ協議が思っていたよりも盛り上がったところです。今まで、校内研はどちらかというと面倒くさいとか手間がかかるとか重たいとか…そういう人が多くて、いざやってみても、盛り上がるけれども次につながらないことが多かったように思います。

また、私はこれまでのプロジェクト研究会の中で「新たな教師の学びの姿」について学びました。それぞれの教員が研究主題に沿って個人の課題をもち、みんなが同じことをするのではなく、それぞれの課題に沿った学びを進めていけばよいという考え方が自分の中ではインパクトが大きかったです。Y小学校でグループ協議をされていたのを見て、W小学校の学校規模は小さいけれど、これならできるなと思いました。今日は、教員一人ひとりがもつ課題意識から、協議の視点ごとにグループ分けをしたことがよかったのかなと思います。

ただ、改善するとすれば、「今日の授業について」や「これからの取組について」など、協議の時間を区切って話すことができる時間があれば、先生方がより「自分の学び」としていけるのかなと思いました。

今後の校内研究会でも、継続して今日と同じグループで協議をしてみようと思います。その中で、授業で取り組むことについて具体的な話ができるように研究主任としてコーディネートをしていけば、もう少し「校内研究って面白いな」とか、「校内研究で学んだことをやってみようかな」と思ってもらえるのではないのでしょうか。そうやって、校内研究が自分事になっていくのかなと思っています。校内研究会が、堅苦しい会でなく、「やってよかった」と思える会にしていきたいなという思いがあります。



校内研究主任

<質問②> 授業者のA先生とD先生のインタビューを聞いて思ったことを教えてください。

自分よりも若手の先生、これから学校の中心となって活躍される先生方が前向きに校内研究を捉えてくださっていたのが、私にとっての安心材料になりました。そういう先生がおられるのであれば、これからも校内研究をやっていけると感じました。今日のことを振り返り、次の課題をもっておられるということで、校内研究を自分事として捉えておられるのだなと感じました。

<質問③>

W小学校の教員一人ひとりが、校内研究会を自分事として捉えて学ばれている要因は何だと考えられますか。

今までの校内研究会でも、協議をするということは同じなのですが、これまでは研究主題に迫る話合いという方向で協議をしていたので、内容が漠然としていました。テーマが大きすぎて話の方向性が定まらないまま話していて、まとまらないまま終わってしまうということがありました。だから、似た課題意識をもつ先生同士でグループをつくり、具体的な協議の視点を伝えることで協議がしやすくなり、自分の学びが実感できるのではないかと思います。

W小学校では、放課後に職員室で授業の話や子どもの話をする事が多いです。私から高学年部の中で積極的に話す機会をもったり、他学年部のところにも話しに行ったりして、職員室内でみんなが気楽に話し合える雰囲気をつくり出したいなと思っています。気楽に校内研究に取り組みましようということは常に伝えています。

また、研究授業の時に使っているサンクスシート(図4)も要因の一つです。サンクスシートは、授業者の課題に沿った視点で参観者に見取ったことを書いてもらうカードです。サンクスシートでは、自分の苦手だと思っていたことを褒めてもらえることもあります。自分とは異なる視点から授業を見てもらえるのでよいヒントをもらえます。サンクスシートを書く側も、授業の感想だけでなくたくさんの気付きを書くことができるようになってきました。そんなシートを渡すことで、授業者が「授業を提供してよかった」とお得感をもてるようにしたいと思っています。

サンクスシート			
日時	令和5年	月	日() 校時
授業者	年	組	先生
授業者のリクエスト視点			
授業展開でよかったこと			
授業者のよさ、強み			
コメント			

図4 授業者に手渡される「サンクスシート」

<質問④>

教員一人ひとりの学びを今後さらに促進するために校内研究としてできることは何だと思えますか。

今年度は、とにかく自分に成果が返ってくる校内研究にしたいという思いがあります。今日の協議は、先生方一人ひとりの実践に返るものになっていくと思うので今後も続けていきたいです。自分と似た課題をもっている先生と話すことで、困っていることを相談することもできるし、次の方向性を見つけることもできます。校内研究を通して学んだことを実際に次の実践につなげていくことは本当に大切だと思っています。授業をした人も、参観した人も「この前の校内研究で勉強したことを基にして、こんなふうにやってみました」ということが言えるといいなと思います。どのようその実践を共有していけるかまでは考え中なのですが、小規模校の強みの一つは、情報共有が早くできるということだと思いますし、現状のW小学校の雰囲気はそういうことがしやすいと思っています。それが実現することができれば今以上に自分事になっていくでしょうね。極端な話、「研究会はいらない。毎日やっているから」までなればすごいですよね。

W小学校の校内研究会の参観を終えて、研究員の思い

W小学校の先生方、今回は大変お世話になりました。ありがとうございました。

研究協議会のはじめに、校長先生から、「今回の授業は終わったが、校内研究は今日で終わりではない。研究協議での学びをこれからに活かしてほしい」というお話がありました。やはり、研修と実践の往還が大切なのだと改めて感じさせられました。

校内研究主任が、「新たな教師の学びの姿」をはじめ、校内研究を活性化させるための理論を学ばれ、実践に活かすために考え続けてきてくださった成果が明確に表れた校内研究会だったと感じました。まだまだこれから進化していくW小学校の校内研究から目が離せません！



研究員 いぬます けいご 稲益 圭吾



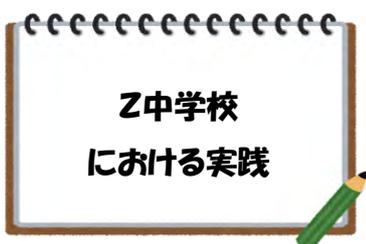
研究員 しまうち ゆうしょう 島内 佑祥

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第12号 令和5年(2023年)11月7日発行

秋が深まり、木々も色づき始めました。実践校のみなさんにおかれましては、各行事にも尽力されていることと思います。プロ研通信第12号では、Z中学校にて10月中旬に設定された授業参観Weekの様子と10月25日(水)に開催された校内研究会の様子を併せてお伝えします。

校内研究主任の先生は、夏季休業中の校内研究会や10月中旬の授業参観Weekの前に「1学期に見えてきた課題を解決するための手立てをもって、2学期の実践に臨んでください」と、先生方に発信されていました。そのような準備と各取組の様子を、A先生(11月15日(水)に行われる研究授業の授業者)の学びを通してお伝えします。



Z中学校 研究主題
教科の指導と生徒指導の一体化
 ～生徒指導4つの視点の授業づくりでしなやかな生徒を育む～

注目ポイント
 課題解決を意識したA先生の学び

A先生の学びと実践の往還

A先生へのインタビューから、昨年度の学びと今年度の学びに向けた思いを紹介します。

昨年度～今年度当初

- 昨年度の授業改善で意識したこと
 言語活動を多く取り入れることで、生徒が積極的にやり取りする姿を目指しました。
- 昨年度の実践を振り返って
 言語活動を多く取り入れるだけでは、目指す生徒の姿は実現できなかった。生徒は授業の内容を理解できないことで不安感をもっているのではないかと感じました。
- 今年度の校内研究に向けて



A先生(外国語科担当)

生徒指導提要に掲げられている生徒指導の四つの視点のうちの一つ「安全・安心な風土の醸成」を研究の柱とするグループに所属することにしました。そして、「安心して自分の考え・思いを発信できる授業」を目指し、外国語科の授業の中で、「学習したことを、生きた英語として会話に使う。スピーキングの機会をもっと取り入れる」ことを意識して授業改善に取り組むことにしました(図1)。

授業アップデート					
校内研究の主題		教科の指導と生徒指導の一体化 ～生徒指導の4つの視点の授業づくりで <u>しな</u> やかな生徒を育む～			
グループのテーマ		「安心して自分の考え・思いを発信できる授業」			
個人のテーマ		安心して自分の考え・思いを発信できる授業			
授業に関する自分の強み・課題					
強み					
課題 学習活動と、生徒英語を会話に使う、スピーキングの機会をもっと取り入れる。					
日付	校内研究授業実践	自分のめあて	学んだこと (児童生徒の様子・新たな発見など)	具体的に取り組むこと (時・場・方法など)	自己評価 (成果・進捗状況など)
5/24	第1回校内研究会	今年度の校内研究のゴールを確認する。ゴールに向かう手立てを見つける。	生徒は、安心して自分の考え・思いを発信できる授業が重要である。	仲間の発表を前向きに聞く姿勢を果に付ける。	個人行-又が明確に持った。

図1 A先生の「授業アップデートシート」(一部)

1学期の取組と生徒の反応

- 4月 「授業の理解度が高まれば、生徒は安心して自分の考え・思いを発信できるだろう」という仮説を立て、ヒントを出すなど話し手がわかることを意識して授業改善に取り組んだ。
- 5月 校内研究会で「生徒にとって安心できる授業は、発信だけでなく受信が重要」と学び、「仲間の発表を前向きに聞く姿勢」が身に付けられるような指導を日常的に行うことを決めた。
- 6月 校内研究会では、安心という言葉の捉え方を見直し、学級全体で考えを共有できるような展開に取り組むことにした。



- 7月 全生徒・全教科を対象としたアンケートを全校的に実施した。
- 8月 A先生の授業に対するアンケートの結果から「まだまだ不安を抱えている生徒が多い」「間違えた後の雰囲気に対する恐怖心が強そう」という生徒の現状が見えてきた。

2学期の授業参観Weekの様子

授業参観Weekにおいて、同じ校内研究のグループテーマを選択したメンバーの授業を参観し、学ばれたことを紹介します。



B先生(授業者)

●授業について

教 科：体育（バレーボール）

学 年：第2学年（参観させていただいた授業は、1学級の女子のみで実施された）

ね ら い：3段攻撃ができる。動きやプレーを見てアドバイスできる。

ポイント：互いの動きやプレーを見る。3段攻撃。ゲームの運営。

●授業者の思い

運動が苦手な生徒も参加しやすい授業づくりのために、前年度のプレーや前回のプレーと比べて、できるようになったこと、上達したことなどを見取って声をかける。

●授業の流れ

①挨拶・出欠確認・ランニング・ラジオ体操（全体での活動）

B先生の工夫ポイント1
生徒が「見てもらっている」と感じられるように声掛けすることで、安心感を生み出す。

②スキルアップタイム（2人1組のペア活動）

30秒間、一人の生徒が直上パス（真上にボールを上げるプレー）を続け、ペアの生徒はプレーを観察する。その後、観察していた生徒が、プレーしていた生徒にアドバイスをする。伝え終えたら役割を交代してもう一度行う。

B先生の工夫ポイント2
生徒同士でアドバイスすることで、ペアのプレーを見る必然性を生み出し、見てもらっている安心感を生み出す。

③チームで3対1（4人1組のグループ活動）

ネットを挟んで3人と1人に分かれる。1人になった生徒がサーブし、3人になった生徒はレシーブ・トス・アタックの3段攻撃をする。2～3回サーブをしたら役割を交代する。

④ゲーム（全体での活動）

全体を3チームに分けて（4人1組の時と同じグループ）、総当たり戦を行う。ゲームをしないグループは、審判を務めるなどの運営を行い、ゲーム終了後はゲームをしていた2チームに対してアドバイスをする。

B先生の工夫ポイント3
工夫ポイント2と同じ意図で、プレーを見る必然性を生み出し、見てもらっている安心感を生み出す。

●B先生の学び

生徒はのびのびとプレーしていて、サーブやレシーブでミスをしたとしても笑顔でした。そして、ミスをした後のプレーも変わらずのびのびとしていました。ミスをしたあたたかく受け止めてもらえるという安心感をもってプレーしていると感じました。この姿は自身が目指す理想の生徒の姿で、この雰囲気をつくるためにどうしたらよいか、すごく考えさせられました。

10月25日(水)の校内研究会の様子

校内研究会の取組と教員の学びを紹介します。

校内研究会のめあて
公開授業を振り返り、
自分の授業研究に生かす



校内研究全体会の様子

校内研究会の流れ

1. 校長先生より
2. 授業参観の振り返り(グループ協議)
3. 授業参観の振り返り(ワールドカフェ)
4. 各グループからの発表(2グループ)
5. 前期校内研究の振り返りと今後について
6. MVGの発表
(MVGとは、Most Valuable Groupのこと)
7. 研究発表大会、指導案検討会(理科・英語・国語)
*提示されたスライドを基に研究員が作成

2. 授業参観の振り返り(グループ協議)における「安心・安全な風土の醸成」を目指したグループの様子

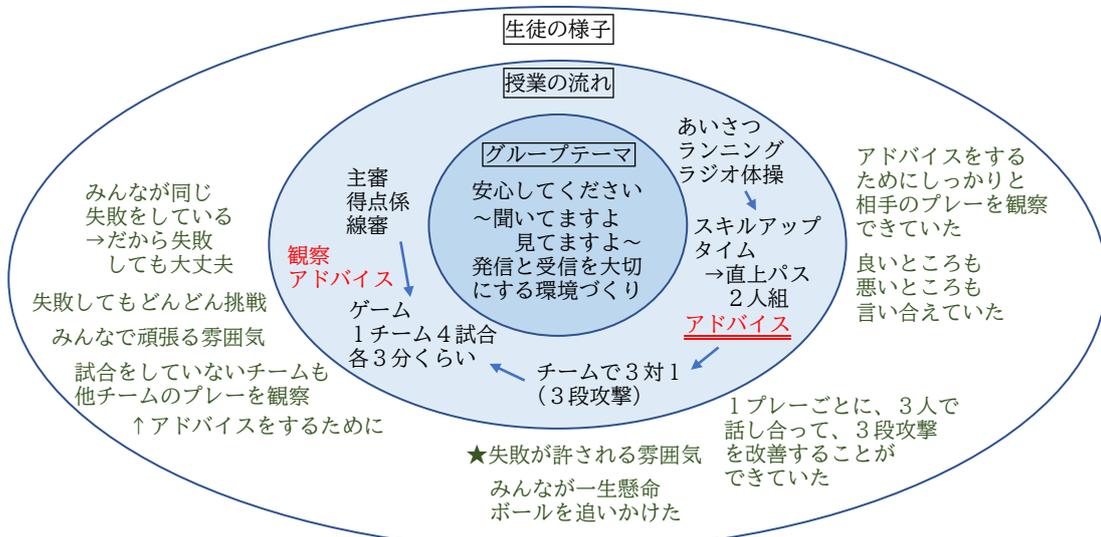


図2 A先生が所属したグループの「えんたくん」に書かれた内容 (実際の「えんたくん」の記述を基に研究員が作成)

ここでのグループ活動は、授業を振り返りながら「えんたくん」に書き込んでいく活動が行われました(図2)。

はじめにメンバーでグループテーマを中心に書いていきました。グループテーマを書くことでテーマを確認でき、生徒の様子を交流する視点が焦点化されたと感じました。それから、授業者が中心となって授業の流れを書いていきました。A先生が所属するグループは、授業者1名、参観者1名で、参観していない先生が3名おられたので、授業や生徒の様子を具体的にイメージできるように随時質問を挟みながら進められていました。例えば、授業者が、「ゲームで主審、得点係、線審をしているチームは、ゲーム中に他のチームのプレーを観察して、ゲーム終了後にアドバイスをするように指示しました」と授業の流れを伝えると、参観していない先生から「どんなアドバイスがあったんですか?」と具体的なアドバイスの内容を尋ねる質問がありました。また、参観者が「失敗が許される雰囲気がありました」と生徒の様子を伝えると、参観していない先生から「失敗しても『ドンマイ、ドンマイ』という感じで、失敗を受け止めてもらえる雰囲気があったということですか?」と生徒の様子をより具体的にイメージするための質問がありました。このような主体的なやりとりが随所に見られました。

3. 授業参観の振り返り(ワールドカフェ)における「安心・安全な風土の醸成」を目指したグループの様子

ワールドカフェ形式で、「2. 授業の振り返り(グループ協議)」の様子が交流されました。メンバーを2度入れ替えて振り返りの内容を交流した後、元のグループに戻って学んだことを共有するという流れで行われました(図3)。



図3 「えんたくん」を使った交流の様子

共有の場面で、他グループの学びについて、『自己決定の場の提供』のために『仕掛ける』をテーマとしたグループでは、『3年生の外国語科の授業で、関係代名詞の単元の第1時に英語でフルーツバスケットをするという活動を仕掛けた。生徒が言った言葉を板書するという支援をすることで、誰も固まることなく全員英語でできた』という話を聞いた。真ん中に行くことになった生徒は固まってしまうと思ったのに意外だった』という報告がありました。これに対して、「前の生徒が言ったフレーズが、真ん中に行くことになった生徒のヒントになっているのだろう」「やることがパターン化されて見えるのは安心につながるのだろう」など、グループのテーマと結び付けたコメントが聞かれたので、自身が学びたい視点から捉え直すことができているのだと分かりました。つまり、グループのテーマが明確で焦点化されていれば、異なるテーマで学んだことを聞いても、テーマに沿って学びを深めることができるのだと感じました。

5. 前期校内研究の振り返りと今後について

校内研究省察ポスターに取り上げた一人の先生の学びを、校内研究主任自身の学び、教頭先生の校内研究会で話された内容などと結び付けて、校内研究主任が紹介しました。また、校内研究省察ポスターの紹介を通して、教員の「個別最適な学び」「協働的な学び」目指すことの大切さをはじめ、校内研究主任が校内研究で大切にしてきた取組のポイントとなる部分についても伝えられていました。

全体会の後、校内研究省察ポスターを見ながら話す4人の先生の姿を見つけました。一人の先生が、『個別最適な学び』をいかに充実させるかが難しい』と言い、他の3人の先生とやりとりをされていました(図4)。校内研究省察ポスターも、校内研究全体会も同じですが、校内研究主任の取組がきっかけとなって先生方の学びが広がっていくのは、とても素敵なことだと感じます。

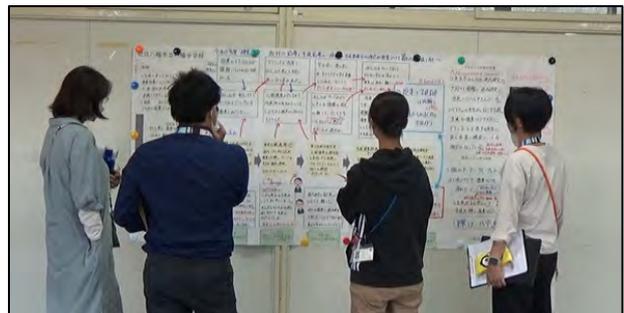


図4 校内研究省察ポスターを見て話す先生方の様子

全体会の後、今日のめあてを確認してから、「振り返りシート」と「授業アップデートシート」を記入する時間を取られていました。授業でも大事だと言われる「最後にもう一度めあてを確認する」「振り返りの時間をきちんと取る」を確実にされていて、先生方の学びをより確かなものにしようという校内研究主任の仕掛けを見つけることができました。



7. 研究発表大会、指導案検討会(英語)

校内研究主任は、「プロジェクト研究会で得た情報から、小学校での取組を真似して取り入れた初めての試み」として、全体会の後に11月の研究授業の指導案検討会(メンバーは教科担当)を設定されました。

検討会の流れ 1. A先生が現在の指導案について説明
2. 授業内容の検討

A先生は、今回の研究授業で<疑問詞+to>の文法を使って、「ユニバーサル・デザインのことを英語で紹介してみよう」と自身が興味のあるものを英語で紹介する授業を計画しています。その際、「安心して学習できる環境づくり」にも力を入れて、所属する「安心・安全な風土の醸成」というグループの目標の達成を目指しています。しかし、「安心して学習できる支援」は、日常的な取組として行っているものの、研究授業の支援として、その場で成果が見取れるように指導案に盛り込むことに難しさを感じていました。検討会では、「言語活動の充実」と「安心して学習できる支援のあり方」を中心に協議が進められました。



指導内容の説明をするA先生

「言語活動の充実」については、「商品紹介は、生徒が主体性をもって取り組めるのがよいと思った。ただ、班になって人数が増え、役割が明確化すると英語で紹介の仕方を考える機会をもてない生徒が出てくるのももったいないと感じる。どの子にも考えるチャンスがあるとよいと思う」などの意見が挙がりました。また、「安心して学習できる支援のあり方」については、「安心して日々の取組の積み重ねから生まれてくると思うので、お互い安心して話し合っているということを見ている側から理解できたらよいと思う。引っ張り出すものではないから、にじみ出てくるものをこちら側が感じられたらよい。安心・安全を強制すると変な話にもなるし、今までの積み重ねがこうですよということをもみんなにアピールしてくれたらそれでよいと思う」などの意見が挙がりました。

指導案検討会の後、A先生に「初めての指導案検討会はどうでしたか？」と尋ねると、「とても勉強になって助かった。授業公開日までもう少し時間があるので、今日聞いたことを基に、困ったことがあれば相談して授業内容を決めていきたい」という思いを語ってくださいました。校内研究主任が指導案検討会に込めた思いを、A先生がしっかりと受け止めてZ中学校の研究発表大会へとつないでいく一場面を見せていただきました。

Z中学校の校内研究会の参観を終えて

1学期に見せていただいた校内研究会はとても活気があって素晴らしかったです。そして、今回見せていただいた校内研究会は、活気に加えて深まりが出てきたと感じました。校内研究会終了後、校長先生にそのことをお伝えすると、校長先生からも「教頭先生、校内研究主任ともちょうど同じ話をしていたところでした」とうかがいました。

校内研究主任は、今回の校内研究会のために、夏休みの校内研究会で「1学期の振り返りを生かした授業改善に取り組んでください」と伝え、10月中旬の授業参観Weekを設定されていました。今回の校内研究会に向けて、2か月前から準備をされていたことになります。さらに、「2学期の取組の流れを1学期の取組の流れと同じにすることで、他の先生方は『1学期と同じことをすればよいから簡単だ』と感じていると思います」とも語ってくださいました。

今回の校内研究会やその後の先生方の自主的に学び続ける姿は、「新たな教師の学びの姿」そのもので、それを支えている大きな柱の一つが校内研究主任の「準備」だと感じました。



研究員 稲益 圭吾



研究員 島内 佑祥

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第13号 令和5年(2023年)11月17日発行

暦のうえでは冬となり、朝夕はめっきり寒くなってきました。2学期も残すところ1か月ほどとなり、実践校のみなさんにおかれましては、学期の締めくくりに向けて準備を始められていることと思います。プロ研通信第13号では、X中学校のA先生の学びについて、9月と11月に行ったインタビューからお伝えします。

X中学校 における実践

注目ポイント

課題解決を意識したA先生の学び

X中学校の校内研究

●研究主題

よりよく生きる力を育む学習指導改善「X中 三方よし」の実現に向けて

●目指す生徒の姿

「X中の学力2023」を活用し、以下の生徒の姿を目指す。
自ら学ぶ姿 → 他者と学び合う姿 → 学びを深めていこうとする姿

●校内研究における「共通実践」の方向性や内容

「X中の学力2023」の「研究の視点」を使ったWGでの授業公開と実践交流(ジグソー研修)

A先生の学び

授業アップデートシートから



A先生

●A先生について

第2学年担任で社会科を担当する3年目の教員

●A先生が強みと考えていること

- ・ICTを積極的に活用すること
- ・試行錯誤しながら授業スタイルを柔軟に変えていくこと

●A先生が課題だと感じていること

- ・単元を見通した授業をつくること
- ・生徒が活動に必然性を感じられるように授業をつくること
- ・学びの中で子ども同士をつなげること

●A先生の1学期の学び

- ・授業公開を通して、「めあての内容や提示のタイミング」「グループ活動」「ICTの必然性」「単元を見通した授業づくり」「生徒同士をつなぐ」「主体性を伸ばす活動」「板書の工夫」について学ぶことができました。
- ・全国学力・学習状況調査の結果の分析を通して、第2学年の課題を共有することができた。また、WGでは、特に「自ら学びを調整する力」について協議することができました。

2 学期の実践

●A先生の立てた仮説

「単元を貫く問い」とルーブリックを提示してから単元の学習を始めることで、生徒は毎時間の学習課題や単元で学ぶ内容に見通しをもてるようになり、主体性をもって学習に取り組むことができるようになるだろう。また、単元の最終時に取り組む「単元を貫く問い」に対して、生徒がルーブリックを意識して単元のレポートを作成することで、書く内容や示す根拠などを具体的に捉えることができるようになるだろう。

●仮説を実証する単元

学年：第2学年

教科：社会(地理)

単元について

9月から10月末までの間に、①中国地方・四国地方、②近畿地方、③中部地方の3単元で仮説に基づく実践を行った。

●実践している三つの単元で共通して取り組んでいること

第1時 「単元を貫く問い」とルーブリックを書いたレポート用紙を配付する。

最終時 「単元を貫く問い」に取り組む時間を確保する、もしくは、週末に取り組む課題として設定する。

9月の授業参観での実践と生徒の様子

●参観した単元

中国地方・四国地方

●授業参観に向けた授業者の思い

生徒が、資料とルーブリックを活用してレポートに取り組む姿から「生徒がルーブリックを意識してレポートを作成する姿」を見取ろうと考えています。

●参観した授業の流れ

①復習のための問題を解く(5分)

- ・生徒は復習のための問題を解いてから本時の課題に取り組む。
- ・覚えるべき内容が多い場合、次の時間のはじめに復習の時間を取っている。

②「単元を貫く問い」に答えるレポートを作成するための流れを確認する(5分)

- ・生徒は、前のスクリーンに提示されたルーブリックと手元に配付済みのルーブリック、レポート用紙を見ながらレポートを書くための流れを確認する。

③レポートを作成する(40分)

- ・生徒一人ひとりが、教科書やノートなどを使ってそれぞれのやり方でレポートを作成する。
- ・レポートを書くのに困った生徒は、周りの生徒に聞きながら作成する。



図1 それぞれのやり方で単元レポートを作成する様子

●授業参観を終えて

- ・全体の様子から

ルーブリックを見ながらレポートを作成していた生徒は少数であったため、ルーブリックがレポート作成の助けになるということは立証できなかつたと感じています。

- ・抽出生徒の様子から

今日の授業では、レポート作成時間の40分のうち、35分くらい集中してレポートを作成していました。前の単元(九州地方)の時には、5～10分程度で書き終えていたので、今日の授業では粘り強く取り組んだ姿が見られたと感じています。また、レポートに書かれた分量を比較しても、前のレポートでは数行、今回のレポートでは用紙の8割程度の記述があり、明らかに分量が増えました。このことから、ルーブリックを提示することで取り組み姿勢が変化する生徒がいるのは間違いなさそうだと感じています。

生徒の変化とA先生の自主的な学びのつながり

●生徒の変化

「単元を貫く問い」を3単元にわたって単元ごとに設定しました。1度目に課した九州地方のレポートの提出率と比べて、3度目に課した近畿地方のレポートの提出率は10%以上向上しました。また、提出されたレポートに書かれた分量や内容にも改善が見られます。ルーブリックを意識することで、充実したレポートが書けるようになった生徒も増えました(図2)。

近畿地方 単元レポート

単元を貫く問い：近畿地方における自然環境や歴史的景観の保全は、人口の増加や産業の発展のなかで、どのように取り組まれてきたのだろうか？

産業の発展

近畿地方は阪神工業地帯があり、古くから日本の工業の中心であった。特に石油化学工業の工場が集中し、これが公害の原因となり、海外への競争が激しくなり、公害が深刻化した。五年は公害地帯、公害防止法、公害防止法などの工場ができた。

琵琶湖

琵琶湖は琵琶湖の生活を支えている。しかし、高度経済成長期に高度な工場が集中し、人口が増加した。琵琶湖の水質が汚染され、琵琶湖の水質が汚染された。琵琶湖の水質が汚染された。琵琶湖の水質が汚染された。

森林

紀伊山地は温暖多雨な古くから森林が盛んである。しかし、利権目的の植林が盛んに行われ、尾瀬の杉・石杉とヒノキが減少した。杉・石杉の減少により、尾瀬の杉・石杉とヒノキが減少した。尾瀬の杉・石杉とヒノキが減少した。

歴史的景観

京都、奈良は昔から文化、政治の中心地であり、古くから寺社、神社、現在も歴史的景観が残っている。京都、奈良は昔から文化、政治の中心地であり、古くから寺社、神社、現在も歴史的景観が残っている。

水産資源

近畿地方は、養殖水産物である養蚕、養魚、養鶏が盛んである。しかし、養蚕、養魚、養鶏が盛んである。しかし、養蚕、養魚、養鶏が盛んである。

琵琶湖保全

市民運動が県の行政を動かして、不木道整備や工場からの排水の制限をかけるようになった。1970年代には、琵琶湖の水質改善のための取り組みが行われた。

森林保全

- 緑の雇用事業：林業の担い手育成のため、技術習得の研修と、国や自治体の補助により、担い手を育て、森林が再生できるようにする。
- 地産地消：小学校の校舎に、地元の木をふんばり使う。
- 企業との連携：活動が企業も(利益目的の)環境配慮。

歴史的景観保全

発展とともに、高層ビルが立ち、歴史的町並みが壊れている。このままでは、歴史的景観の保全が取り戻せなくなる。このままでは、歴史的景観の保全が取り戻せなくなる。

水産資源保全

漁獲量の制限をかけることで、漁獲量、水産資源の回復を目指す。

→ 五年は少くも、漁獲量も回復している

他にも...

環境への配慮として、工業用水の再利用、工場での節電、太陽光パネルを設置している



図2 生徒が提出した近畿地方のレポート

●A先生の自主的に学ぶ姿

ルーブリックやレポート用紙の形式は、生徒の提出したレポートに書かれた内容を基に単元毎に改編しています。さらに、校長先生(社会科)や社会科の先生はもちろん、社会科以外の先生にも意見をうかがい、改編の参考にしています。

例えば、「近畿地方における自然環境や歴史的景観の保全は、人口の増加や産業の発展の中で、どのように取り組まれてきたのだろうか」という「単元を貫く問い」に対して、近畿地方の①自然環境の保全②歴史的景観の保全③人口の増加④産業の発展のうち、①か②についてのみ、もしくは③か④についてのみ答える生徒がまだまだ多くいました。このことから、保全のための取組と人口の増加や産業の発展を結び付けることが苦手だと分析しました。そこで、管理職の先生と相談して、関東地方のレポートでは、「単元を貫く問い」を「関東地方における人口の集中は、人々の生活や産業にどのような影響を与えているのだろうか?」とし、枠を矢印でつなげたレポート用紙とすることで、生徒が知識を結び付けながらレポートを作成できるように工夫しました(図3)。生徒が「単元を貫く問い」に答えられるようになることを目指して、生徒の実態に合わせて少しずつ工夫を重ねていこうと考えています。

関東地方 単元レポート

単元を貫く問い：関東地方における人口の集中は、人々の生活や産業にどのような影響を与えているのだろうか？

人口の集中

人口の集中

背景

背景

人々への影響

人々への影響

産業への影響

産業への影響

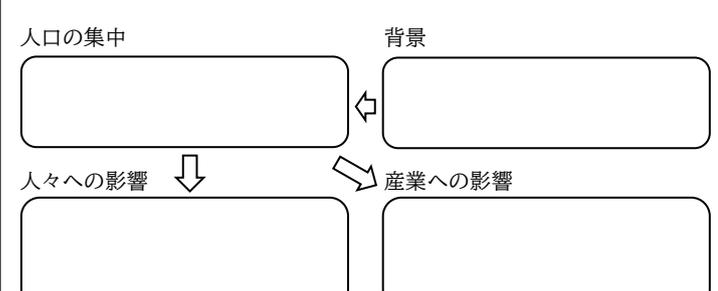


図3 関東地方のレポート *実際のレポート用紙を基に研究員が作成

X中学校の校内研究

校長先生と校内研究主任へのインタビューから、X中学校の校内研究の進め方を紹介します。

1学期から週に一度、校内研究主任は、管理職、主幹教諭と協議を続けておられます。そこから研究推進委員会としての取組の方向性を見だし、校内研究会で共有しておられます。そして、共有した内容を基に、先生方はそれぞれの授業実践へとつなげておられます。

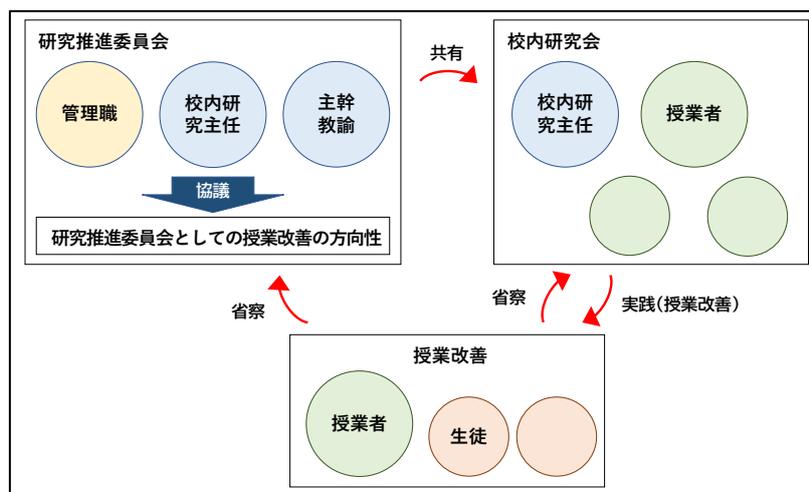


図4 X中学校の校内研究と授業実践のつながり

X中学校の授業参観とインタビューを終えて

今回は、A先生の学びのつながりを追うためにインタビューしていく中で、A先生自身の変化を随所に感じました。例えば、A先生は「生徒が主体的になるために」という思いを出発点として、「単元を貫く問い」やルーブリックを中心に取組を改善し続けておられました。その中で、目指す生徒の学ぶ姿として「知識を関連付けて学ぶ姿」をイメージするようになっていったことが挙げられます。

校内研究主任はインタビューの中で、「校内研究も授業と同じ」と語っておられましたが、何人かの研究委員の先生方とのやりとりで同じ言葉を耳にしました。また、校内研究主任は、「授業するのは楽しいし好き！」とも語っておられ、授業と同じように校内研究を通して少しずつX中にその思いを広めていっていただけるのだと感じました。

提出率やレポートの完成度など見える変化に目を向けがちですが、私はその後、「大切なことは目に見えない」という言葉を思い出すようにしています。そのことで、研究委員や実践校のみなさんからいろいろな学び・気づきを与えていただき、日々感謝しています。「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて、校内研究では何をするのか、一人ひとりの先生は何をするのか、そのあり方を一緒に考えていけると嬉しいです。



校内研究活性化プロジェクト研究通信

第14号 令和5年(2023年)12月15日発行

冬の冷たい空気が身にしみる頃となりました。実践校のみなさまにおかれましては、2学期を締めくくる時期であり、児童生徒と向き合いながら3学期に向けての目標を見据え、日々の教育活動に邁進されていることと思います。

プロ研通信第14号では、11月14日(火)に開催した校内研究主任パワーアップ研修[小学校・中学校][第3回]と合同で開催した第7回校内研究活性化プロジェクト研究会での研究委員のみなさんの学びを振り返ります。研究委員のみなさんには、「校内研究省察ポスター」を使って自校の校内研究について他の参加者の前で発表していただきました。これまでの実践を堂々と発表されている研究委員のみなさんの様子をお伝えします。

第7回 プロジェクト研究会 概要

第7回プロジェクト研究会のめあて

校内研究主任としての職務および校内研究を組織的に推進するための明確なビジョンと手法を学ぶ。

他校の取組に学ぶ

13:45～ 2学期の校内研究の実践交流 - 「校内研究プランシート」を基に -

研修に参加された校内研究主任のみなさんは、「校内研究プランシート」を基に、自校の2学期の実践を振り返りながら交流されていました。8月3日(木)に開催した第4回校内研究活性化プロジェクト研究会(校内研究主任パワーアップ研修[小学校・中学校][第2回])でも同じく、グループごとの実践交流を行いました。今回の交流では前回以上に各校の創意工夫を凝らした実践が発表されました。他校の実践を聞き、細かにメモを取っておられる先生ばかりで、校内研究主任同士による「協働的な学び」が充実した時間となっていると感じました。

研究委員のみなさんがグループで話しておられる様子を拝見すると、本当によい表情でこれまでに積み上げてこられた数々の実践について語っておられました。プロジェクト研究会や各校の訪問を通して、研究委員のみなさんが校内研究について何度も試行錯誤されてきたことをうかがっているので、語られる実践への思いの強さを感じながら聞かせていただきました。



実践交流の様子①



実践交流の様子②

14:15～ 【事例発表】1年間の校内研究のまとめと次年度に向けて校内研究主任の果たす役割

「人が学ぶ」という視点は大人も子どもも共通しているという考えのもと、「読み解く力」を踏まえた「○小スタイル」をベースとした校内研究のあり方について事例発表をしていただきました。

「そもそも『校内研究』とは、何のために、誰のためにしているとお考えでしょうか」という問いかけがとても印象的で、教員の成長の先に子どもたちの豊かな学びの姿をはっきりと見据えておられることが発表の内容から伝わってきました。

豊富な実践事例から、教員の主体的な学びのサイクルを、子どもの主体的な学びのサイクルにつなげていくための多くの示唆をいただきました。

実際の通信では、A中学校のB先生が昨年度の実践を発表する様子を写した写真を掲載していました。

昨年度実践校
A小学校のB先生

研修に参加された校内研究主任の感想(一部抜粋)

- ・「研究授業ありきの校内研究になっていないか」という言葉がすごく心に刺さりました。次年度の研究について構想を練っていく際に、全ての先生が主体的に取り組んでいけるように話し合っていきたいと思います。
- ・A小学校での校内研究の進め方をお聞きし、大変参考になりました。どの学校でも教員自身の振り返りを大切にしておられ、子どもも教員も個別最適な学びができるようにしていきたいと思いました。
- ・A小学校の実践を聞き、研究のスタート時にいかにゴールを明確化し、長期と短期の見通しをもつことが大切か分かりました。

令和5年度研究委員による事例発表

15:00～ 令和5年度校内研究活性化プロジェクト研究実践校の「校内研究省察ポスター」紹介

初めに、研究委員のみなさんには全体に、自校の校内研究について1分間で説明をしていただきました。学校規模、研究主題、校内研究の特徴、これまでの取組の見どころを参加者に向けてアピールしていただき、その後のポスターセッションに移りました。

発表前は和やかな表情で会話されていた研究員のみなさんですが、ポスターセッションでは各校の校内研究の実践を堂々と語っておられました。参観者から時間いっぱい多くの質問が出されたことから、各校の実践の注目度の高さが伝わってきました。



発表前的一幕

令和5年度

総合教育センター研究員研究

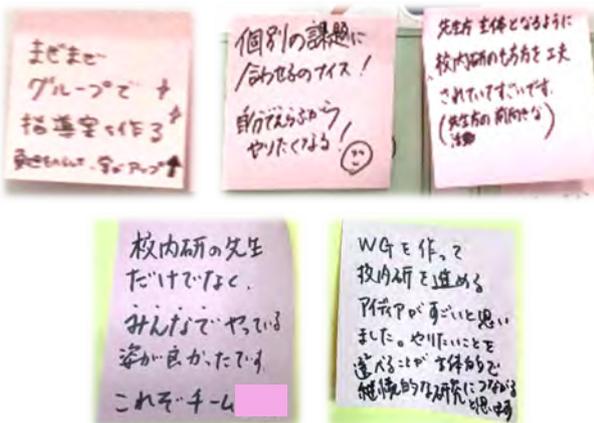
校内研究活性化

プロジェクト研究

実際の通信では、ポスターセッションの様子を写した写真を掲載しました。

研修に参加された校内研究主任の感想(一部抜粋)

- 各学校で取り組まれた「校内研究省察ポスター」の発表を聞き、全ての教員が自分事として校内研究に関わっていくことが大切だと感じました。そのために、教えていただいた方策を自校でもアレンジしながら取り入れていきたいと思えます。
- 課題別にチームを作り、校内研究を行っている学校が多かったため、来年度は職員とも話し合い、チームの持ち方についても考えていきたいと思えます。
- Z中学校の実践からグループでの校内研究の可能性を感じた。研究主題に対しての手立てでグループ分けしている学校もあり、今後の進め方の参考となった。次年度の進め方を模索していたタイミングだったのでありがたかった。
- 「校内研究省察ポスター」紹介では、W小学校の実践から、小規模校でも効果的に学び合えるグループ協議の仕方が参考になりました。
- 校内研究で学んだことをどのように共有するかが自校の課題の一つでした。Y小学校の発表より、指導案をデータ化してそこに書き込んでいくことが研究協議の充実につながっていると聞き、実践したくなりました。
- 「校内研究省察ポスター」紹介は、とても刺激になりました。教師自身が意欲的に学び、力を付けられるようにしていくために、今年度をきちんと振り返り、次年度に向けて考えていきたいです。



参観者からの感想が書かれた付箋

15:30～ 「校内研究省察ポスター」ルーブリックを使った自己評価

「校内研究省察ポスター」紹介の後、他の研修参加者はグループに戻って年度末の校内研究のまとめに向けての協議をされていました。その時間に研究委員のみなさんには、研究員が作成した「校内研究省察ポスター」ルーブリックを使った自己評価をしていただきました。

令和5年度 校内研究活性化プロジェクト研究会 校内研究省察ポスターについて	
1. 作成のねらい(目的) 1学期の校内研究の中で、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体的に充実している場面を振り返り、価値付けする	
2. 評価指標について	
評価観点	評価基準
研究委員の学びと校内研究のつながり	【評価項目】①研究委員のプロジェクト研究会や実施された校内研究会、その他の研修等での学びと校内研究での実践のつながり ②校内研究での実践から、研究委員の学びへのフィードバック ①と②が読み取れる。 ①が読み取れる。 ①が読み取れない。
抽出教員の「個別最適な学び」と「協働的な学び」	【評価項目】①抽出教員の「個別最適な学び」が充実していることが読み取れる。 ②抽出教員の「協働的な学び」が充実していることが読み取れる。 ③抽出教員の「個別最適な学び」と「協働的な学び」のつながっている部分がある。 *【充実】とは、次の3要件を満たしている状態を言う 【要件1】課題・取組や手立てが明確【要件2】主体的な姿勢が見られる【要件3】学びを通じた今後の取組や手立てが明確 ①②を満たし、③の部分が3つ以上ある。 ①②を満たし、③の部分が2つ以内。 ①②の両方、もしくはいずれか1つを満たしている。
抽出教員の学びと授業および抽出児童生徒の学びの変化	【評価項目】①抽出教員の学びが、授業に反映されていること ②抽出児童生徒の変化へのつながり ③抽出児童生徒の変化から、抽出教員が成果や課題を見取り、次の学びへと生かしていること ①と②と③が読み取れる。 ①と②が読み取れる。 ①が読み取れず、①と②のつながりが不明瞭。
1学期の成果と課題	【評価項目】①校内研究の取組から成果と課題が書かれている。 ②抽出教員・児童生徒の(学びの様子や実態から)成果と課題が書かれている。 ①と②のつながりを考察したうえで記述されていることが読み取れる。 ①と②の両方が記述されている。 ①②のいずれか一方が記述されている。
2学期以降の取組の計画	【評価項目】①1学期の成果・課題を踏まえた2学期以降の取組が書かれている。 ②①の内容が、実践校の校内研究主題や目指す児童生徒像・教師像を踏まえた内容になっている。 ①の内容が、具体的に書かれている。 ①の内容が書かれている。
省察ポスターの共有・活用	【評価項目】①省察ポスターを提示して、作成の意図やポスターの読み取り方を伝えた。 ②ポスターを職員が目にする場所に掲示している。 ③掲示したポスターを見直したり、ポスターに付箋を使って追記したりする時間を取っている。 ①②③をすべて満たしている。 ①と②の両方、もしくはいずれか一方が満たしている。 省察ポスターを提示して、作成したことを伝えている。



研究委員同士で省察する様子



自己評価する様子



専門委員と省察する様子

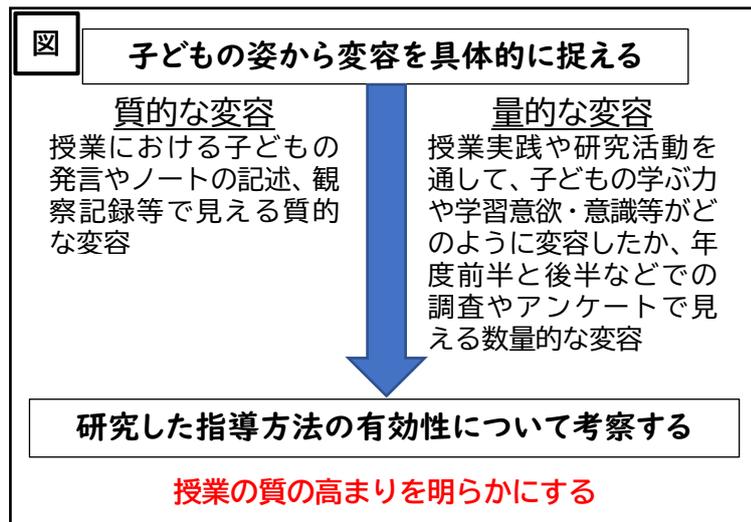
研究委員のみなさん、事例発表ありがとうございました！年度途中でありますが、これまでの取組を御自身で言語化していただいたことと、参観者のみなさんから御意見をいただいたことで、自校の校内研究を省察できたのではないのでしょうか。また、ルーブリックを使った自己評価からも自校の取組の強みと課題を見つけていただけましたね！



滋賀大学教育学部附属小学校
副校長 楠見 丹生子先生による御講義より

15:45～ 【講義】「新たな教師の学びの姿」の実現に向けた校内研究の省察の在り方

本研究の専門委員である楠見先生より、御講義をいただきました。「これからは、子どもも教師も学び手。個別最適な学びと協働的な学びを一体化させた『わたしたちならでは』の校内研究へ」という言葉で今年度のプロジェクト研究およびパワーアップ研修を端的にまとめていただきました。また、教員が学びやすく、風通しのよい環境や仕組みづくりについても、とてもわかりやす



※楠見先生のスライドを基に研究員が作成

く教えていただきました。中でも、本講義の主題にもなっている「校内研究の省察」を、年度の中間地点で行い、改善に取り組むことが大切であると教えていただきました。

「研究の省察の基本的な在り方」としてお話しいただいた、「研究結果の分析と考察について」(図)は、毎日の授業や研究授業の省察をする際に忘れてはならない大切な視点だと感じました。常に目の前にいる子どもたちの姿を捉え、よりよい授業でよりよい学びを提供していきたいですね。

研究委員のみなさんの振り返り

○事例発表と研究協議より

- ・実際に学校で進めておられる校内研究について詳しく教えていただいて、そんな方法があるのだと目からうろこでした。自校の先生方のニーズは何か、改めて見直す必要があると感じました。自分の校内研究主任としての学びを他校の先生に伝えたことで、これまでの自分の取組を見つめ直すことができました。
- ・研究授業が一段落してきて、次年度に向けて何を目的にどのような取組をしていくとよいか分かりました。昨年度は、年度末に慌てて成果と課題をまとめていたので今年度は計画的に次年度につなげていきたいと思いました。他校の省察ポスターを見て、抽出教員と抽出児童の学びの姿のまとめ方とその方向性が見えました。
- ・「Aスタイル」として教師も児童も同じ考えて学ぶ方法が有効だと感じました。また、授業研究だけでなく、知識を得るのも一つの方法だと思いました。SWOT分析等を用いて、来年度の方向性を職員で共有して決めていきたいです。
- ・自校の校内研究の取組について省察ポスターを書き、発表できたことは、自分の大きな学びとなりました。たくさん質問もいただき、自分の考えも整理することができました。そして、足りない部分に気付くことができました。
- ・A小学校のB先生の話から様々な方法で教職員を巻き込む術をもらいました。ヒントを得ることができたので、使っていけるものは実践していきたいと思っています。また、自校以外の4校の実践を見聞きすることで、他校の実践から学ぶことができました。

○楠見先生の御講義より

- ・今年度の研究を省察する際には、主任一人で考えるのではなく、本校の先生方と一緒にまとめていきたいです。そして、来年度のよりよい研究の形につなげていけるようにしたいです。自校の先生方を大切に、主体的に学ぶことができ、かつ自校に合う方法を見つけていきたいです。
- ・1年間の研究の成果物を作るときに、型や紀要などは作ったことがありますが、ツールを作ったことがなかったので参考にしたいと思いました。本校の今年度の実践としてはツール作りが合っていると思いました。
- ・年度末の省察に向けてのヒントがたくさんあり、その中でも「子どもの姿から変容を具体的に捉える」ということが大事だと思いました。来年度につながる校内研究になるように省察したいと思います。
- ・校内研究で学んだことを自分にどう生かしていき、その学びをより深化させていくために次年度どうしていくのか、先を見て取り組んでいく大切さを改めて感じました。たくさんの学校の様々な事例を研修で聞くことができ、本当に勉強になりました。ありがとうございました。
- ・この1年間を通して、「自分事」として捉えられる研究にしないといけないと実感しました。先生方が「やるぞ」としてもらえるテーマや仕掛けが何よりも大切だと感じました。次年度に生かしていきたいと思います。

第7回プロジェクト研究会を終えて、研究員の思いと今後に向けて

今回の校内研究主任パワーアップ研修[小学校・中学校]でプロジェクト研究会との全3回の合同開催が終了となりました。プロジェクト研究会単体での開催と異なり、研修に参加された他校の校内研究主任たちと協議を通して協働的に学び、研究委員のみなさんは、たくさんの刺激を受けられたのではないかと思います。

ある学校の校内研究主任の方から「やはり校内研究紀要は作らなければいけませんよね？」とお声かけをいただき、お話をさせていただきました。私たちの結論から申しますと「『作らなければいけないもの』と、義務感で作るようなものではない」と思います。ただ、1年間の校内研究を通しての教員一人ひとり学びを価値付けするために研究紀要はとても有用なものであることは間違いありません。

今年度私たちは、このプロ研通信を書くことで、研究委員のみなさんや実践校の教員のみなさんの学びをまとめさせていただきました。このことを通じて、自分自身の学びも可視化(自覚)することができたと感じています。日々子どもたちに全力で向き合い、多忙な日々を送っておられることと思いますが、みなさんで学びを可視化(自覚)する機会を設定していただくことが大切なのだと思います。



研究員 いなます けいご
稲益 圭吾



研究員 しまうち ゆうしょう
島内 佑祥

～ 御 礼 ～

プロジェクト研究会でみなさんが作られた「校内研究省察ポスター」の内容があまりにも素晴らしく、また、各校での活用が校内研究を前進させる大きな力になったということでしたので、ぜひとも多くの先生方にお聞き頂きたいと思い、発表をお願いしました。どのブースでも参加者の先生方の質問が途切れることなく、先生方の取組の充実度がうかがえました。お願いして本当によかったです。ありがとうございました。来年度の研修でもよろしくお願ひします。



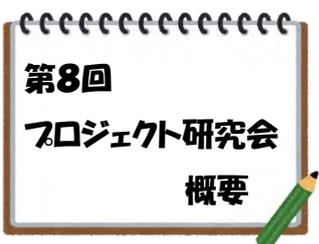
校内研究主任
パワーアップ研修
担当 加藤 由紀

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第15号 令和5年(2023年)12月22日発行

冬至を迎え、いよいよ年の瀬が押し迫ってまいりました。実践校のみなさまにおかれましては、新年を迎えるための準備にお忙しいことと思います。

プロ研通信第15号では、11月24日(金)に開催しました、第8回校内研究活性化プロジェクト研究会での研究委員のみなさんの学びを振り返ります。今回のプロジェクト研究会は、これまでの研修と各校での実践の往還から、「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう校内研究のあり方について今一度考えました。また、第8回が本年度最後の研究会ということもあり、トータルアドバイザーである滋賀大学大学院教育学研究科 辻 延浩教授より、研究のまとめをしていただきました。



第8回プロジェクト研究会のめあて
「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう
校内研究のあり方を見いだそう!



第8回プロジェクト研究会の流れ	
1. 開会の挨拶	4. 「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう校内研究のあり方
2. 質問紙調査の分析と報告 および研究のまとめ	5. 事務連絡
3. 各校の取組の分析	6. 本日の振り返り
	7. 閉会の挨拶

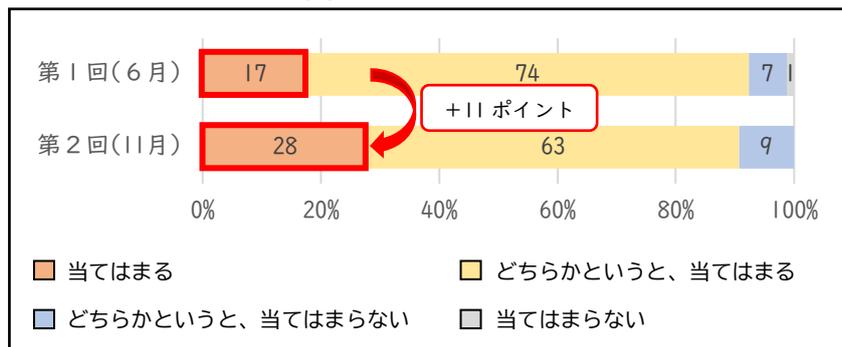
質問紙調査の分析と報告および研究のまとめ

11月に実施した第2回教員対象質問紙調査の回答を集計し、多くの設問でポイントの増加が見られました。それは研究委員のみなさんが「新たな教師の学びの姿」についてよく理解を深められ、理論に基づき、各校で創意工夫を凝らした実践をされてきたことが要因であることは間違いありません。プロジェクト研究会ではスライド資料を提示し、多くの設問について分析の報告をさせていただきました。プロ研通信では、プロ研通信第6号(9月11日発行)でお知らせした設問に合わせて教員対象質問紙調査から見える教員の変容をお伝えしたいと思います。

	①児童生徒が個別最適に学ぶ姿をイメージできる	②児童生徒が協働的に学ぶ姿をイメージできる	③一体的に充実させることを意識して指導している
第1回 (6月)	81%	91%	52%
第2回 (11月)	92%	91%	58%
	+11ポイント	±0ポイント	+6ポイント

*令和5年度校内研究活性化プロジェクト研究実践校の教員対象質問紙調査の結果
回答総数 第1回:91人 第2回:86人

①「児童生徒が個別最適に学ぶ姿をイメージできる」の設問では、「当てはまる」という回答に11ポイントの増加が見られました。また、②「児童生徒が協働的に学ぶ姿をイメージできる」の設問では、肯定的な回答に増加は見られなかったものの、第1回と同様に90%を超える高い数値となりました。さらに、その中で「当てはまる」と回答した割合を見てみると11ポイント増加したことがわかりました(図1)。



これらのことから、校内研究を通じて実践校の先生方が「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実際に経験されたことで、具体的に児童生徒が個別最適、協働的に学ぶ姿をイメージできるようになったと考えました。

図1 「児童生徒が協働的に学ぶ姿をイメージできる」の回答の割合

「個別最適な学び」と「協働的な学び」のどちらも具体的にイメージできる先生が増えたこと、そして6月の時点で既に具体的にイメージはできていたけれど、指導につなげられていなかった先生が理解を深めて実践し始められたことにより、児童生徒の「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を意識して指導されている先生が増えたのだと考えました。

令和4年12月に中央教育審議会から示された答申に「教師の学びの姿も、子供たちの学びの相似形であるといえる」と示されています。また、プロ研通信第14号で御紹介した、昨年度の実践校の校内研究主任が仰っていたように、「人が学ぶ」プロセスは大人も子どもも共通しているのですね。先生方が校内研究で経験された「個別最適な学び」と「協働的な学び」という学びを是非とも指導に生かしていただきたいです！



各校の取組の分析

研究委員のみなさんには、「新たな教師の学びの姿」の四つの側面、「主体的な姿勢」「継続的な学び」「個別最適な学び」「協働的な学び」から、自校の校内研究の取組を振り返り、校内研究を「活性化させる要因」を書き出していただきました。

図2は第3回プロジェクト研究会(7月7日に実施)の時にまとめたものです。それと今回まとめた図3を比べると、研究委員のみなさんが今年度の学びを生かした各校での実践を経て、「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて具体的なイメージをもつことができるようになったことが分かります。

校内研究活性化のポイント

主体的な姿勢

- 自分の課題をきちんともっている。
- 具体的な生徒の課題を把握しているから、テーマを決められる。

小学校ではどう生かす?

- 同じように話してみれば、もっと似た解決法が出てきてよいのでは?
- ・(これまでの校内研究の流れを)知っている人がいるとよい。
- ・先輩から気軽に「見に行こう」と声掛けができていいる雰囲気が良い。
- ・グループテーマを具体的にしているので話しやすい。
- 自校で同じように、夏休みにやってみようかな。

継続的な学び

- ・昨年度の課題を基に今年度の課題を決めている。
- ・考えていることをみんなの前で宣言しててすごい!
- ・学びに連続性がある。

個別最適な学び

- ・個人の学びをすごく大切にしている。
- ・そのことで、グループの学びをきちんと個人に返すことができている。
- ・自分の失敗談を伝える中で、解決策を見いだすことができていた。
- 自分事として取り組める

協働的な学び

- ・テーマを練り上げる時間を十分に確保している。
- ・そのことで、同じ課題意識をもつことができている。
- ・グループ構成(年齢など)も工夫されている。
- ・このあと、どうまとめているのだろうか。

図2 第3回プロジェクト研究会(7月)で挙げられた活性化のポイント

<p style="text-align: center;">主体的な姿勢</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級担任以外も自分事として ・自分(教員一人ひとり)が中心となって進める ・グループテーマと個人テーマの設定 ・外部の先生から刺激をもらう ・自分のめあてを引き出す ・自ら学ぶ機会をつくる ・参観する視座の明確化 ・G-OJTグループの編制 ・短時間の会議 ・略案の作成 	<p style="text-align: center;">継続的な学び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定期開催 ・学びのサイクルの可視化 ・授業研究を1年間てバランスよく配置する ・適切な振り返り(チームごとに) ・継続的な話し合い活動 ・児童の学びのベースの統一 ・G-OJTグループのメンバー固定 ・1年間どのように校内研究を進めていくか毎回確認 ・「えんたくんシート」を継続して活用 ・めざす生徒像の把握→授業参観 ・グループテーマを自分たちで決める
<p style="text-align: center;">個別最適な学び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・めあて→学び→実践→振り返りのサイクル ・自分の課題を基にグループ分けし、同じ課題をもつ人と協議できる ・他者からのアドバイス ・自分事として考えた授業 ・同じ授業を複数回する ・生徒授業評価アンケート ・めあての共有と振り返りの時間の確保 ・一人しレポートの作成 ・強みと課題の把握 	<p style="text-align: center;">協働的な学び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チームでの授業づくり ・ICTの活用 ・目指すゴールを共有する ・全員が授業を参観できる ・話し合える集団を増やす ・授業の様子との交流 ・多くの先生の意見を聞くことができる ・いろいろなグループで対話する時間を設ける ・職員間の考えを共有(改善点、うまくいったことなど) ・グループの協議の流れを固定した ・G-OJTで学びを深めた ・チームの先生への仕事割り振り、情報共有 ・仕組みづくり

図3 第8回プロジェクト研究会(11月)で挙げられた校内研究活性化の要因(当日の記録を基に作成)

「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう校内研究のあり方

今年度のプロジェクト研究会での最後の協議では、研究委員のみなさんに『新たな教師の学びの姿』の実現に向かう校内研究のあり方とはどのようなものなのかについて一つの答えを出していただきました。次の写真(図4)が、各校の取組の分析から出てきた校内研究活性化の要因を基に図にまとめられたものです。

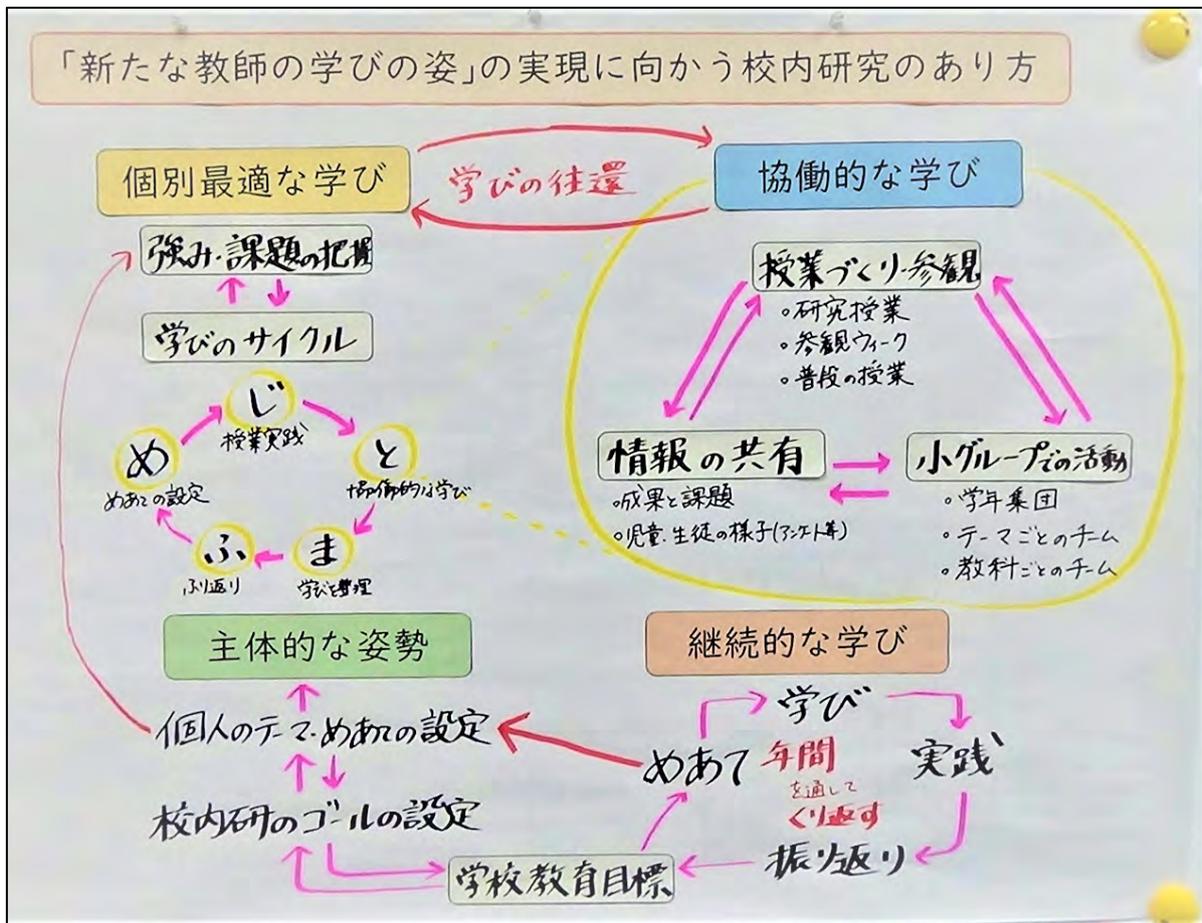


図4 研究委員のみなさんがまとめた「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう校内研究のあり方

研究委員のみなさんの様子(図5)からは、各校での実践の中で、御自身が校内研究主任として仕掛けたことや、自校の教員一人ひとりが学ぶ姿をイメージしながら、「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう校内研究のあり方についてまとめていただいていることが伝わってきました。今日までに様々な取組を経て実践校の校内研究は、「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう校内研究へと確実に向かってきました。それが偶然ではなく、研究委員のみなさんの取組の成果として現れたのだということを確信できる協議でした。

プロジェクト研究会は今回で最終回でしたが、各校の今年度の校内研究はまだ終わってわけではありません。今回まとめていただいたことを基に各校で実践していただくことで、校内研究がますます活性化していくことと思います。



図5 研究委員全員で考えをまとめる様子

滋賀大学大学院教育学研究科 教授 辻 延浩先生による研究の総括



滋賀大学大学院教育学研究科
教授 辻 延浩先生

1. 今年度の研究の特徴「研修と研究の一体化」

7月7日に開催された第3回校内研究活性化プロジェクト研究会において、今年度の研究の特徴として、「研修と研究の一体化」をあげました。「研修」とはこれまでの成果を学んで習得・活用することです。「研究」とはさらなる探究と成果を発信することと整理しました。11月14日第7回研究会では、それが見事に発揮されていたと思います。県内の校内研究主任を相手に、それぞれに取り組みされたプロジェクト研究の成果と課題を発表されていて、研究委員のみなさんにとっては、昨年度のプロジェク研究に学ぶという研修を足掛かりとして、自校の実態に合わせ、無理なくできるところからはじめ、さらに使いやすいようにアレンジし、小規模校または大規模校なりの新たな取組につなげるという研究的な実践を見て取ることができました。一方、研修に参加された県内小中学校の校内研究主任にとっては、昨年度と今年度において取り組まれた研究成果に学び、自分の学校に持ち帰り、一度試してみるという「研究と研修の関係」について学んでいただけたと実感しました。

2. 教師自身の学びや研修観の転換

「令和の日本型教育」を推進するための「新たな教師の学びの姿」として、子ども達の学びとともに教師自身の学びや研修観を転換することの必要性です。このことが校内研究にも当てはまり、従来の教職員全員が一堂に会して、一人の授業を見て、全体で討議するという形式からの脱却が求められています。若手、中堅、ベテランの枠を超えて、互いに教育観や授業観をぶつけ合う、そんな検討会にしていくためにはどうすればよいか、真剣に考える必要があります。その点において、今回の5校での取り組みでは、G-OJTや課題別グループを組織して、自己課題が探究できるグループワークを基本とする重要性が提案されていました。そのためのツールになったのが、昨年度に開発された「授業アップデートシート」や「共通実践レビューシート」などであり、大切なことは、それぞれの学校において、学校や子どもの実情に合わせて、主体的に改編されていることです。教師自らが主体的に校内研究に参加するためには、明確な目的意識をもつ必要があり、はじめはぼんやりしていても、グループで協働的に意見交流する中で、徐々に課題が鮮明になり、できるようになったことやまだまだ苦手なことが自己理解できること、このことが明日の授業につながるという、とてもシンプルなことが確認できました。

3. 校内研究主任の力の発揮どころ

課題別グループをつくるために、校内研究主任の力の発揮どころが明確になりました。何人のグループをいくつ作ればよいか。どのようなメンバー構成にすればよいか。課題別というけれども、その課題やテーマをどのように設定・集約するのかといった問題です。これらについては、小規模校と大規模校では状況は異なりますし、これといった明確な答えはないと思います。何を大切にしたいかによって分かります。ただし、グループ協議において、メンターとメンティーの関係が構築できることが望まれるとともに、研究主任をサポートする組織体制が求められます。今後、学校のグループワークの基本的な考え方として成熟させていただくことを願います。

4. 研修、研究、教育の三位一体化

冒頭、「研修と研究の一体化」というキーワードをあげましたが、今回のプロジェクト研究とともに学ばせていただくなかで、「研修、研究、教育の三位一体化」のイメージを強く抱きました。「研修と研究」に加えて「教育」をそこに重ね合わせた理由は、研修も研究もどちらかといえば、教師教育、すなわち、校内研究主任と校内教員の力量形成というイメージがあります。何のために研修や研究をするのかといえば、子どもに良質な教育を施すこと、子どもの成長のためということ忘れてはいけません。「負担感」や「自己実現」の前に、確かな子どもの成長の姿があらわれる校内研究であってほしいと思います。

「教育」という視点を取り入れることの重要性に気付いたのは、Z中学校の、教科の指導と生徒指導を一体化させ、生徒指導の四つの視点から授業づくりを見直すという、まさに教育の視点から子どもの総合的な力を育むという取り組みです。新しい生徒指導提要の四つの視点は、教科の指導においても重要視されるべき視点であり、子どもを真ん中においたとき、生徒指導の内容と教科の内容がしっかりと関連付けられていれば、生徒にとってはわかりやすく、取り組みやすい、逆に教師にとっても指導しやすく、教員間の連携も図りやすいことに繋がります。是非とも県内の学校に広げてほしいと願います。

研究委員のみなさんの振り返り

○第8回プロジェクト研究会の振り返り

- ・今年度の校内研究を振り返り、次年度に向けての成果と課題を見直すことができました。どの取組や学びも全てつながっていて、必要なことだということが確認できました。今後、スムーズに進められ、参加しやすい校内研究になるようにコーディネートすることが私たちの役割だと再確認できました。
- ・自校の校内研究を振り返って、新たな教師の四つの学びの姿という視点を基にして、現状、よいところと改善するべきところが明確になりました。「主体的な姿勢」「個別最適な学び」他校の先生の実践も改めてうかがって(「協働的な学び」)、自校にも取り入れたい(「継続的な学び」)と思いました。
- ・自分ができていなかったことを他校の先生方と共有することができました。次年度の校内研究につなげていきたいと思います。
- ・4人の研究委員の先生方と共に、校内研究のあり方について協議しながら考えることができました。自校での取組にも「新たな教師の学びの姿」につながっているところが多くあることが分かりました。
- ・1年間の自校の校内研究の取組を「新たな教師の学びの姿」で振り返り、自分たちがやってきたことを価値付けすることができました。また、他校の取組を聞いて自分ができていないことも分かり、来年度の校内研究の計画に取り入れていきたいと思いました。

○第8回プロジェクト研究会での学びを自校の校内研究会でどのように生かしたいですか

- ・今年度の校内研究をまとめ、来年度の方向性を決める時に、今日のアンケート(質問紙調査)の結果等も踏まえ、進めていきたいと思います。
- ・自校の先生が校内研究にめあてをもって参加できていない部分があるということが分かりました。事前にしっかりとめあてを確認する時間を取るようにしたいです。また、適切なタイミングで外部の先生から刺激を得たり、その他の学びの場を作ったりしたいです。
- ・今年度、自分に足りなかった「個別最適な学び」を実現するための方法を他校からも知ることができたので、利用できる場所はしたいです。特に、学びのサイクル(生徒と類似)を中心として、教師にもつなげていけたらと思いました。ありがとうございました。
- ・校内研究のあり方については、自校の教員でも同じように考える活動をとってもいいのかなと思いました。私が今日学んだことを紹介するだけでなく、自校の校内研究のあり方をみんなまで協議するのも面白いと思いました。
- ・生徒も先生も学びのサイクルがうまく回るように、今後もファシリテートしていきたいです。

第8回プロジェクト研究会を終えて、研究員の思いと今後に向けて

今回で、今年度予定していた全8回のプロジェクト研究会が終了しました。実践校の先生方、度々訪問をさせていただきありがとうございました。私たちの研究が、少しでも先生方のお役に立てたと思っていただければ幸いです。校内研究を通してたくさんの先生方と学ぶことができ、本当に楽しかったです。みなさんの学びの足跡を研究としてまとめさせていただきましたので、ぜひ2月9日(金)は総合教育センターにて研究発表を聞きに来てくださいね!また、研究委員のみなさんは、発表大会当日も、どうぞよろしくをお願いします!



研究員 いなます けいご 稲益 圭吾

研究員 しまうち ゆうしょう 島内 佑祥

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第16号 令和6年(2024年)3月4日発行

暦の上では春となりました。実践校の皆様におかれましては、年度末に向けて日々児童生徒に全力で向き合っていただいていることと思います。

プロ研通信第16号では、2月9日(金)に総合教育センターにて開催しました、第66回研究発表大会を振り返ります。本研究を通して、研究委員の皆様をはじめ、実践校のみなさまには大変お世話になりました。研究発表大会を迎えるあたり、皆様と共に学ばせていただいたことを思い浮かべながら準備を進め、当日の発表に臨みました。その様子をお伝えします。

第66回研究発表大会 校内研究活性化 プロジェクト研究発表

- ### 研究発表の流れ
1. 研究員による研究の発表
 2. 研究委員による実践発表
 3. 質疑応答
 4. 指導助言



研究員による研究の発表

今回、県内外合わせて100名を超える先生方が私たちの研究発表を聞きに来てくださいました。参観者の多さから、校内研究に対する関心の高さとその重要性を感じる事ができました。

発表は「主題設定の理由」から始め、「研究の基本的な考え方」「研究の内容とその成果」「研究のまとめ」の順で行いました。校内研究の活性化に向けて実践していただいた研究委員の先生方の取組の紹介を通して、研究の成果が参観者に届くよう発表しました。



発表の様子

実践校5校分の「校内研究省察ポスター」を会場内に掲示しました。また、校内研究活性化に向けての取組のポイントをまとめたリーフレットを配付しました。



各種資料



二次元コードから御覧ください。

当日の発表の内容は、当センターHPからオンデマンド動画として見る事ができます。御都合がつかない方は二次元コードから動画を御覧ください。また、「研究発表資料」をダウンロードしていただくことも可能です。併せて御覧ください。

発表資料

令和5年度(2023年度) 校内研究活性化プロジェクト研究

「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう、小・中学校における校内研究のあり方

—教員一人ひとりのニーズに応じた「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を通して—

研究員 稲垣 圭吾
基内 佑祥

SPC 滋賀県総合教育センター
Shiga Prefecture Education Center

研究委員による実践発表

今年度の各実践校の校内研究での取組について、研究委員の皆様へ実践を発表していただきました。

教員対象の質問紙調査の結果から、「個別最適な学び」を教員自身が経験することにより、より「個別最適な学び」をイメージすることができることが分かりました。そこで、参観者にも「個別最適な学び」をしていただきたいという思いから、各実践校の取組を基に研究員がグループテーマを設定し、参観者一人ひとりに自分のニーズに合った実践の発表を聞いていただきました。



グループ	グループテーマ
A	「個別最適な学び」を支える校内研究のもち方
B	「個別最適な学び」を充実させる校内研究の取組の工夫
C	「協働的な学び」を活性化させる校内研究のもち方
D	校内研究を活性化させるための管理職との連携
E	個人の課題解決に向かうための協議の進め方

参観者アンケートには以下のような御感想をいただきました(一部)。

- ・研究委員の先生方から直接、実践についてうかがえる機会をいただけたのがありがたかったです。
- ・自身が「個別最適な学び」を体験でき、とてもよかったです。確かに主体的になって実践校の取組を聞いている自分がいました。
- ・研究委員の先生方の話を聞く時間が有意義に感じました。もう少し時間を長くできるとうれしいです。

実践の発表を通じて、参観者の皆様には多くの学びを得ていただきました。また、研究委員のみなさんには、短時間ではありましたが今年度の実践をアウトプットしていただくことで、自校の校内研究に対してより深く分析し、成果と課題について振り返っていただけたのではないかと思います。今年度の実践から見えてきた成果と課題を次年度の各校の校内研究の実践に生かしていただき、さらなる活性化につなげていただければ幸いです。研究委員の皆様、本当にありがとうございました。

滋賀大学大学院教育学研究科 教授 辻 延浩先生による指導助言

総合教育センターのプロジェクト研究、特に、校内研究活性化プロジェクトには、5年以上トータルアドバイザーとして関わっております。これまで、発表の形は様々ですが、非常にリニューアルされています。本日は、その経緯も含めて、成果を話させていただきます。



滋賀大学大学院教育学研究科
教授 辻 延浩先生

1. 校内研究活性化プロジェクト研究立ち上げの経緯

午前中の溝上先生の御講演にもありましたように、昨今、「主体的・対話的で深い学び」ですとか、「カリキュラム・マネジメント」とか、「開かれた教育課程」とか、「学びの羅針盤」、「個別最適な学び」、「協働的な学び」、「令和の日本型教育」など、矢継ぎ早にどんどん新しいワードが出てきています。しかし、これらは教育の背景として、Society5.0とか、AI時代到来とか、いわゆる今までの、教師が教えて子どもがそれを覚える、そういう教育ではだめですよとずっと言われてきたのです。そのことを、形を変えて、印象的な言葉で綴られているように、私は理解しています。

では、本質は何なのか、それは、子どもの学習観と教師の指導観のパラダイム転換です。その指導観を変えようと思うと研修観を変えていく必要があります。先ほど「技術的实践ですか」という質問がありましたが、根本は技術ではないのです。いわゆる「観」、「哲学」です。「子どもはどういった学習を求めているのか」「学習していったその先、未来の自分をどう描くのか」「教師はその子どもの育ちを保障するために、どのような授業をこれからやっていくのか」ということを真剣に考えましょう、というところが、このプロジェクト研究の根本にあります。この流れを受けて、様々な教育的活動がある中で、一日の大半が授業ですので、授業改善、授業改善を中心とした学校改善、いろいろと子どもの育ちを保障していこうということで、校内研究活性化プロジェクトが立ち上がっています。

2. 校内研究活性化のキーワード

キーワードは、ここ3年間ずっと同じです。「主体的」「組織的」「継続的」です。

(1) 主体的

「主体的」というのは、校内研究の視点で言えば、教師が校内研究・校内研修に対して主体的であるにはどうすればよいか。自分事として校内研究を受け止めて、どう研鑽、授業改善していくのか。従来のように、年中行事、教育課程の中に定期的に埋め込まれていて、各学年1回の公開授業をして、その後に、全体で集まって検討会をするという従来からある制度を見直しましょうということなのです。

いろいろな業務や状況、あるいは教員の経験の幅がある中で、一つのテーマ、一つの話題について、全員で検討することが本当に効率よいのかといったところの洗い直しですね。そこで出てきたのが、「自分事」「自己目標」「自己決定」。20代の先生の自己決定はどこから来るのか。悩み事は何なのか。ミドルの先生の自己決定、研修課題は何なのか。それらは異なるはずですが、しかし、研究主題が一つだと、「どこに照準が当たっているのか。それは顔の見えるテーマになっているのか」と考えた時に、クエスチョンマークが付きます。研究主任がちょっと考えた、時代の流れ、〇〇校はこういうテーマでやっていたからということが結構ありますよね。そういうところを洗い直すために、「自己目標設定シート」とか「授業アップデートシート」というツールを活用して、一人ひとりが自分の授業をちゃんと自己評価して、自己決定して、「これをやりたい」「ここを目標に取り組んでいきます」というところを出し合ひましょう。その道具を見れば技術的な

実践に見えるかも知れないですが、あくまでもツールで、根本にあるのは「自己選択」と「自己決定」です。

(2)組織的

二つ目が「組織的」です。業務の多忙化で、働き方改革を進めて継続的にするには小回りを効かせないといけないということで、課題別グループの組織化とか、小集団とか、G-OJTという職場の中で、研修とコラボされています。そのようにすると、「うまくいった」「先生たちが前のめりになった」、溝上先生の言葉を借りれば「主体的になった」という組織になっていきます。ただし、この組織の中に、「フィードバック」と「カンファレンス」、もっと言えば「リフレクション」が作用しないと変わらないので、そこをコーディネートするグループリーダーが必要です。課題別グループを作って、その中にグループリーダーをどう組織するかが非常に難しいです。研究主任と研究推進部との話し合い、もしくは、管理職との連携の中で、「見込みのある教師」とかいう表現をされる、もうすでにこの研究をよく理解していて、やる気があり、リーダー的素養を兼ね備えた人にリーダーになってもらいます。それと同時に、若手やいろいろな立場の人とコラボしてもらうというミニ集団をいくつか作れば、「研究主任一人が引っ張っていくという形」ではなく、「いろいろなサポートを得ながらうまく継続したな」という実践報告が昨年度あたりから出てきました。ただし、大規模校であればそれなりの人が集まるかも知れませんが、小規模校であればどうするのか。「一般的にこんな方向がよい」というのが見えていても、学校によって異なります。地域性や規模によって違うので、「うちの学校ではこういう風なところをやればうまくいった」という組織的なところについて、いろいろ持ち帰ってもらって、御意見をもらいましょうということで、昨年度と今年度は、小中のメンバーが違う中で、様々な取組をやってきたということです。

その一つに、G-OJT 研修ですとか、「『共通実践レビュー』シート」というツールがあります。それぞれの先生の授業をどう見て、どう解釈したか、それをきちんと交流しましょう。その先生の見方を尊重しましょう。認め合いましょう。一堂に会した場合、声の大きい先生、もしくは経験値の高い先生が話すと、それがそうなのだという風に個が集団に埋没されてしまうので。課題別グループ、しかも、主体的なところで、目標をすり合わせ、それぞれの先生の悩みを分かち合っている、強みも弱みも悩みも分かり合っているからこそ言い合えるというようなグループをつなぎ合わせていくことが組織的には大事です。

(3)継続的

三つ目の「継続的」です。いわゆる、学んだことを生かすということです。ここが非常に難しいのですが、今年度、総合教育センターでは研究と研修をうまく往還させておられます。昨年度の研究成果、昨



辻先生による指導助言の様子

年度の成果物を先ほどのようなパネル発表のように、今年度初めて校内研究主任になられた方に来てもらい、研修という形で、この流れを理解して、いろいろ質問をして、持ち帰ってもらった。そして、各学校の研究推進部にその中でできること、できないことというようなところを伝えていかれた。総合教育センターがリーダーになって、研究と研修を組織し、校内の研修につないでいくといったことを、見える形で今回やられました。それが、今までにはなかった一つの成果だという風に思っています。

もう一つ「継続性」という時に、よくあるのは、「内容の継続性」と「方法の継続性」です。

「内容の継続」というのはテーマです。大体これは、私の経験からすれば、2年ないしは3年同じテーマを積み上げた方が成果は出ます。4年次になると教員が入れ替わるなどから、飽和状態になるのであまり成果が出ないことが多いです。3年次くらいになると研究の進め方などを理解できてきているので、細かく国語科であれば国語科の課題づくりから様々なことが共有できます。しかし、一つの教科を3年やるというのは、「他の教科もやりたい」とかいろんなことがありながら継続させていく分、難しさはあります。

しかし、「方法の継続性」というのは違います。その学校のオリジナル、「〇〇スタンダード」って最近よく出てきますよね。その学校での、子どもの学びと同時に、教師の研修の仕方とか、授業公開のスタンダードをつくれれば、それはずっと継続できます。

今、学んだことを生かそうと思った時には、そういった「内容の継続性」と「方向の継続性」が基になります。それが、研究主任のリーダーシップに任せられた場合には、研究主任のやってきたこと、経験してきたことがベースになるケースは時々ありますよね。その場合、「いや、うちの学校では、それは違うんだ」とはなかなか言えませんよね。そういったところで、研究主任が変わるごとに方法が変わって継続性が続かないケースもありますので、そこはやはり研究推進部、そしてその学校での研修の土台といいますか、方法の土台というものを一定つくるのが大事ななと思います。そういう意味では、昨年、今年と、この研究プロジェクトをつくられた校内研究活性化に向けた方法というものを、みなさん、今日も含めて研修で学ばれた方が持ち帰られて、スタンダード化されていくと、「滋賀県としてのモデル」ができていくのではないかなと思います。それを、研究と研修の一体化、往還ということで継続性を担保できないかと思います。

3. 子どもの学習観を根底から変えるために

先ほどの学習観と指導観、評価観との関係からいいますと、研究と研修、さらには「教育」まで視野に入れて欲しいと思います。研究、研修は教師の立場です。教師が学んでいます。しかし、目的は子どもを育てることです。子どもをいかに育てるか。子どもに返していくためには、研修施策を教育に生かさないといけない。教育の成果、研修の成果、効果を、子どもの育ちとして丁寧に見取っていただきたいと思います。そうした時に、子どもから見たら、先生達が研修していることって意外と見えます。「あの先生の授業、改善されているな。でも、この先生は改善されていない」と子どもには見えます。「この先生の授業スタイル変わらないな」よくよく分かります。子どもは柔軟ですから、ある先生が授業観、研修観を変えると、それに順応して先生のスタイルに合わせていきます。評価観も新しくいろんなパフォーマンス評価とかルーブリックといわれても、先生によって違うと子どもは混乱します。小学校は小学校なりの難しさがありますし、中学校、高等学校は、教科の壁など、いろいろなところで難しさがあります。けれども、子どもの学習観を本当に根底から変えていこうと思うと、教員組織の評価観、授業づくり観をある程度共有していかないといけません。それが「研究、研修、教育の三位一体化」なのです。子どもから見える授業とか、子どもから見える世界に軸をおいたら、私達教員が、ちょっと歩いていくというか、変わっていく、パラダイム転換につなげていかなければならないところが見えてくると思います。今日の午後の研究発表でも、社会科の授業で国語科の書くこととコラボする、特別活動と体育科の授業のカリキュラム・マネジメントとか、いわゆる一つの教科だけの授業づくりではなくて、連動させていこうというような教育研究発表が多くなってきています。そのあたり、そういう考え方が根付いてきたのではないかなという風に思います。ですので、今日、発表を聞かれた内容を、ぜひ持ち帰っていただいて、学校の中でどうするのか。ここはうまくいったといったところで、成果をお寄せいただく。「この部分まだ工夫できるよ」「課題はここにある」となれば、また次のプロジェクト研究でその課題に向かうことで、センターと現場、学校との往還がなされていきます。研究センター、研修組織、大学の研究組織と現場との連携が図れるのではないかという風に思います。

参観者アンケートより

県内外、多くの先生方に研究発表を御参観いただき、たくさんのお感想・御意見をいただきました。その一部を紹介します。

- ・ 教員一人ひとりに強みやアイデアがあるのに、それが若手であるために、校内に伝える機会が少ない状況があると思います。今日発表されたように校内研究会で交流する時間があると充実した時間になると感じました。精神的に辛い思いをする教員も増えているので、教員間のつながりを作って雰囲気を高めることを大切だと感じました。(30代・中学校教員)
- ・ 校内研究が近づくと「どうしようか…」となかなか前向きになれない私ですが、いざ始めてみると、学年団で何をゴールにするか、どういう手立てにするか具体物など考えて、だんだん楽しくなってくる私もいます。子どもだけでなく教員の「個別最適な学び」と「協働的な学び」が、子ども一人ひとりの力になっていくのだと思い「常に勉強、研究、主体的に」の気持ちでがんばります。(40代・小学校教員)
- ・ 授業改善のための校内研修についていろいろご苦労されて実践されていることを知りませんでした。高校では教科の違い等あり、なかなかしっかりと校内研修ができていない現状があります。少しずつ取り組んでいかなければならないと思いました。(50代・高校教員)
- ・ 教員にとって「個別最適な学び」と「協働的な学び」という視点で考えると、校内研究での学び方を授業に取り入れるなど、共通実践がしやすくなると思います。研究主任だけではなく、管理職のリーダーシップのもとで学校全体が意欲的に校内研究に取り組んでいくうえで、この研究の成果物や実践は大きく役立つものとなっています。(40代・教育委員会)
- ・ 昨年度、NITSの学校組織マネジメントを受講し、どうすれば校内研究を活性化できるか、共通理解・共通実践をより進められるか考える機会をいただきました。本日は、実際に取り組まれた内容をお聞きでき、よい刺激を受けました。また、学校内だけでなく「学校間でつなぐ」という視点も参考になりました。(40代・教育委員会)

この他にも、様々な年代の方から御感想・御意見をいただきました。研究発表を通じて、多くの方にとって校内研究を改めて考える機会になったことがアンケート内容から伝わってきました。

研究発表大会を終えて、研究員の思い

研究発表大会が終わり、1年間の研究に一区切りがつかしました。この1年間を振り返ってみると本当に多くの方と出会い、その一人ひとりからいただいた様々な支えのおかげでここまでやってこられたことを改めて実感します。研究委員の先生方をはじめ、各実践校の先生方には大変お世話になりました。

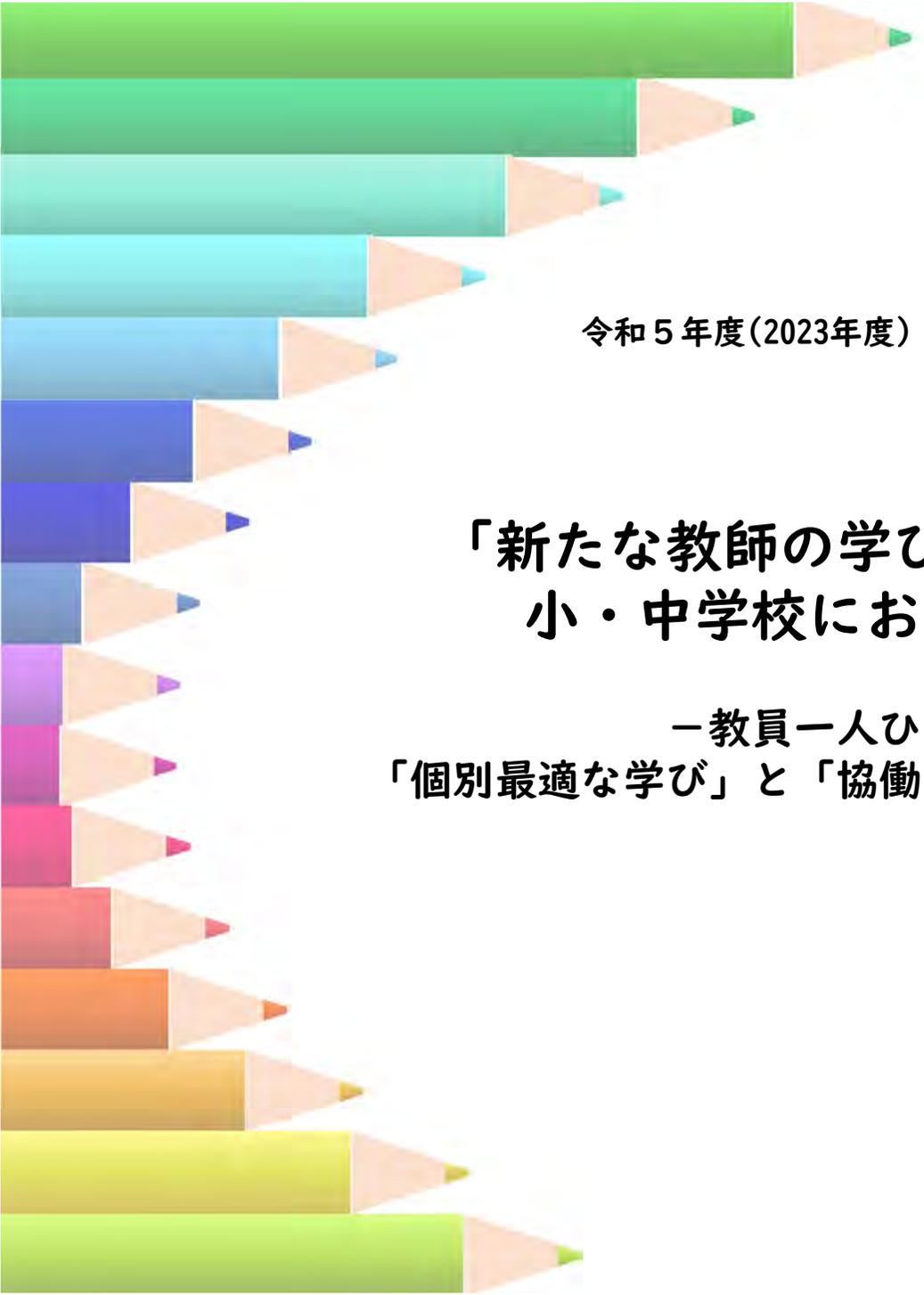
冒頭にも触れた通り、本研究の研究発表を100名以上の方が参観してくださいました。発表に際し、実践していただいたことの素晴らしさや価値をいかに伝えることができるかというプレッシャーを感じました。その一方で、これだけ多くの方に、5校の実践の素晴らしさを伝えられることができると思うと嬉しくもありました。発表後に参加者アンケートに目を通すと、私たちの研究発表を聞き、多くの刺激を受けたというお言葉をたくさんいただきました。これも偏に研究委員をはじめ実践校の皆様のおかげです。本当にありがとうございました。

皆様の主体的に学びに向かう姿に毎度触発され、私たちもさらに主体的に研究に臨めました。これからも、目の前にいる子どもたちの成長のために校内研究をさらに活性化させていっていただきたいと思います。またどこかでお会いできる日を楽しみにしています♪



研究員 いぬます けいご 稲益 圭吾

研究員 しまうち ゆうしょう 島内 佑祥

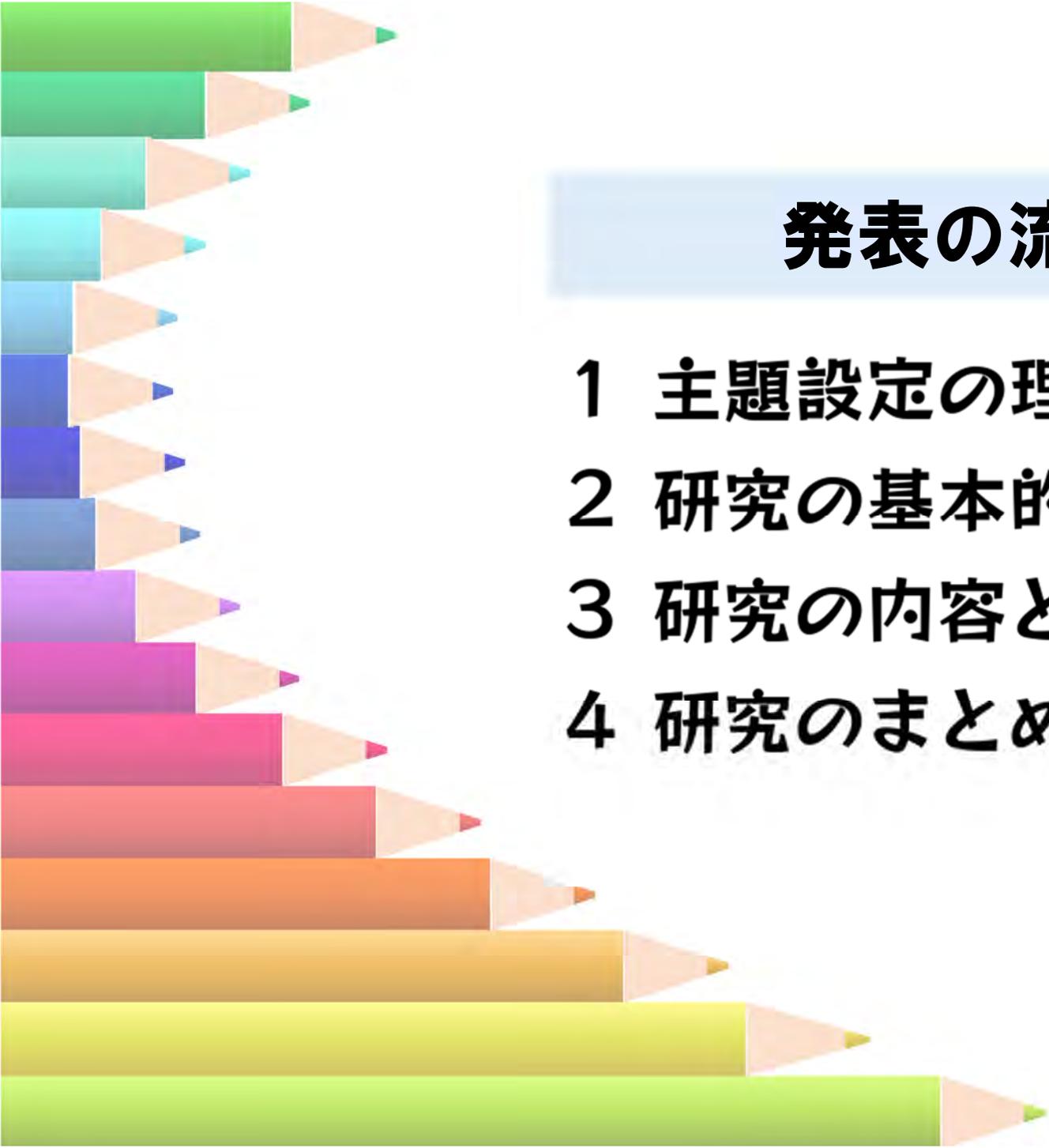


令和5年度(2023年度) 校内研究活性化プロジェクト研究

「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう、 小・中学校における校内研究のあり方

— 教員一人ひとりのニーズに応じた
「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を通して—

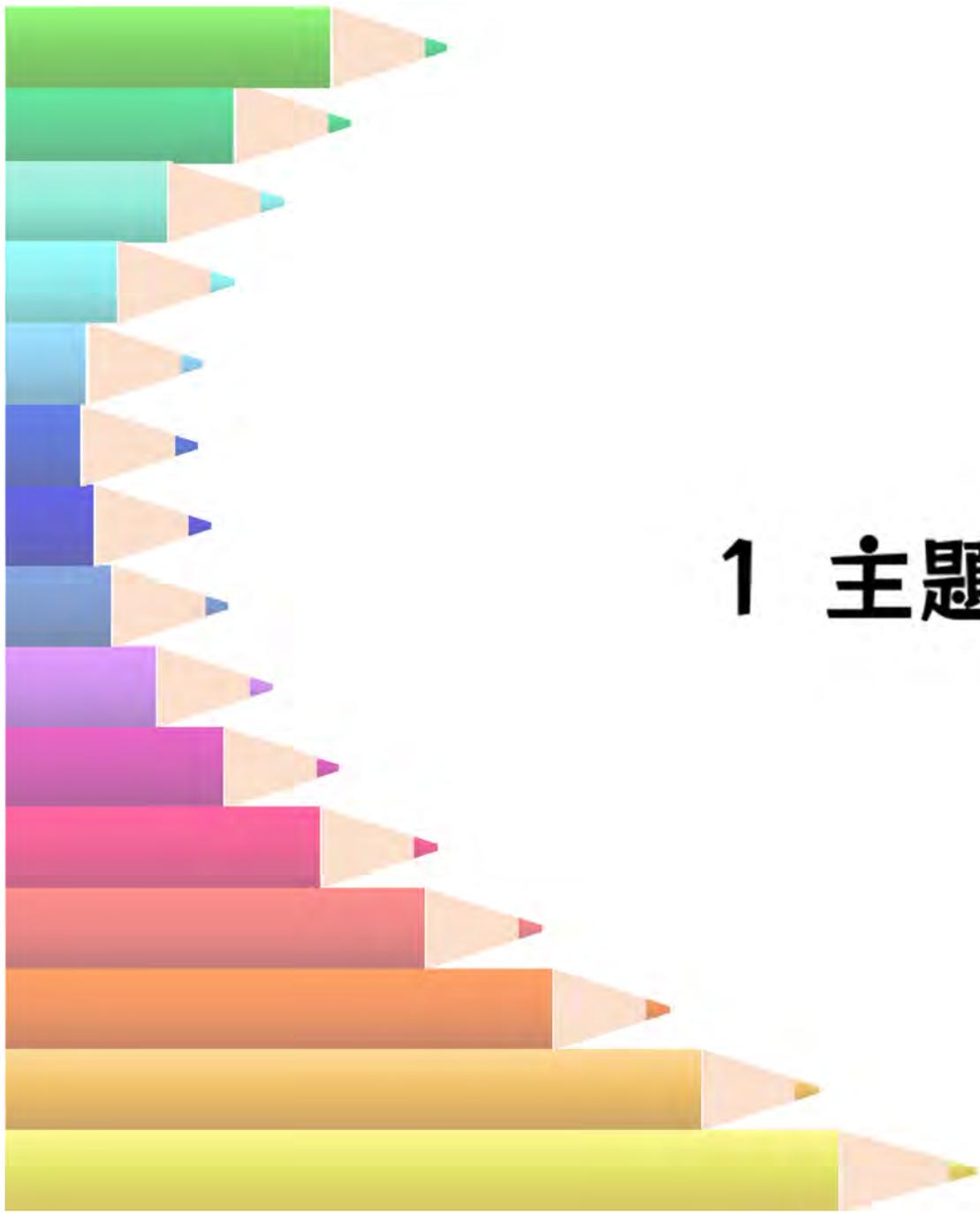
研究員 稲益 圭吾
島内 佑祥



発表の流れ

- 1 主題設定の理由
- 2 研究の基本的な考え方
- 3 研究の内容とその成果
- 4 研究のまとめ

1 主題設定の理由



中央教育審議会(答申)から

教師及び教職員集団の理想的な姿

「技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け」る姿

「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて

「一人一人の教師の個性に即した『個別最適な学び』」や「他者との対話や振り返りの機会を確保した『協働的な学び』」の実現による教員の学び(研修観)の転換が見童生徒の学び(授業観・学習観)の転換に向けて必要

文部科学省中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～(答申)」令和4年(2022年)より

「第Ⅱ期 学ぶ力向上滋賀プラン」から

子どものために一丸となって取り組む学校づくり

子どもに付けたい力を明確にした上で**校内研究を計画的に実践し、その充実を図る。**



児童生徒の学ぶ力向上の手立ての一つとして校内研究の推進が求められている。

当センターでも令和3年度、4年度に校内研究の活性化に向けて研究を進めました。

校内研究活性化のための研究の成果と課題

令和3年度

<研究主題>

小・中学校における全ての教員の授業改善につながる校内研究

<研究の成果>

校内研究の**組織的・継続的**な取組を充実させることにより、教員一人ひとりの自律的な学びを支えることができた。

リーフレット



論文



リーフレット



令和4年度

<研究主題>

小・中学校における児童生徒一人ひとりの「確かな学力」の向上につながる校内研究

<研究の成果>

自校の課題解決に向かう「**共通理解・共通実践**」に取り組むことで、児童生徒一人ひとりの「確かな学力」の向上にもつなげることができた。

リーフレット



論文



リーフレット



<課題>

- ・教員の児童生徒の学びの姿を見取る力量を高めること
- ・教員一人ひとりのさらなる学びの機会の確保が必要であること
- ・各教員のニーズ等に応じて選択できる学びの場が求められていること

本研究の主題と副題

令和5年度 校内研究活性化プロジェクト研究 研究主題

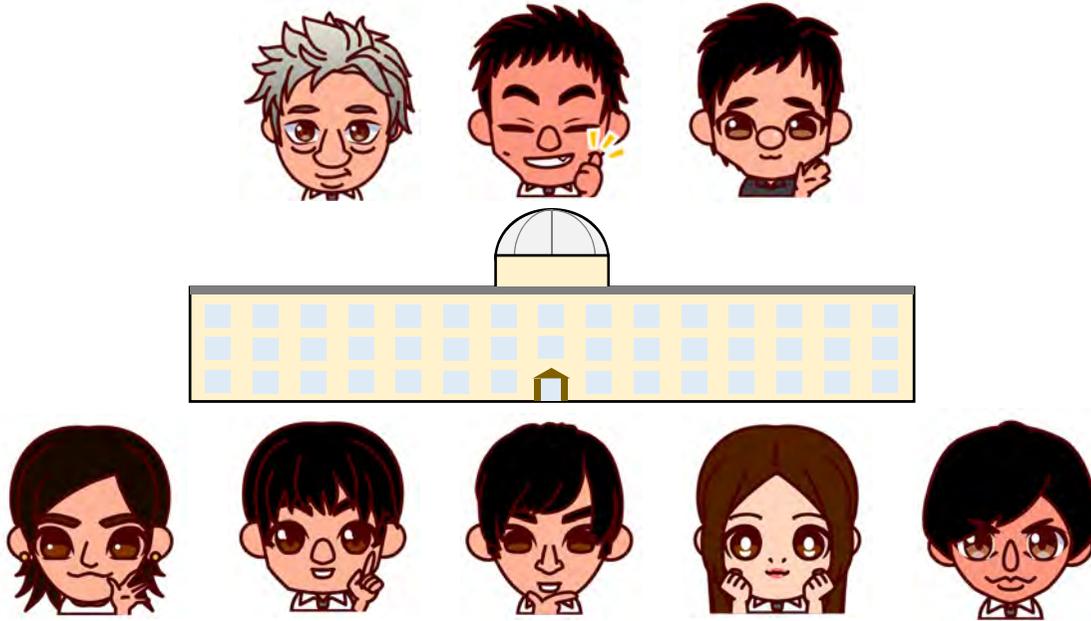
**「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう、
小・中学校における校内研究のあり方**

— 教員一人ひとりのニーズに応じた
「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を通して—

研究委員の学びの場

プロジェクト研究会(全8回)

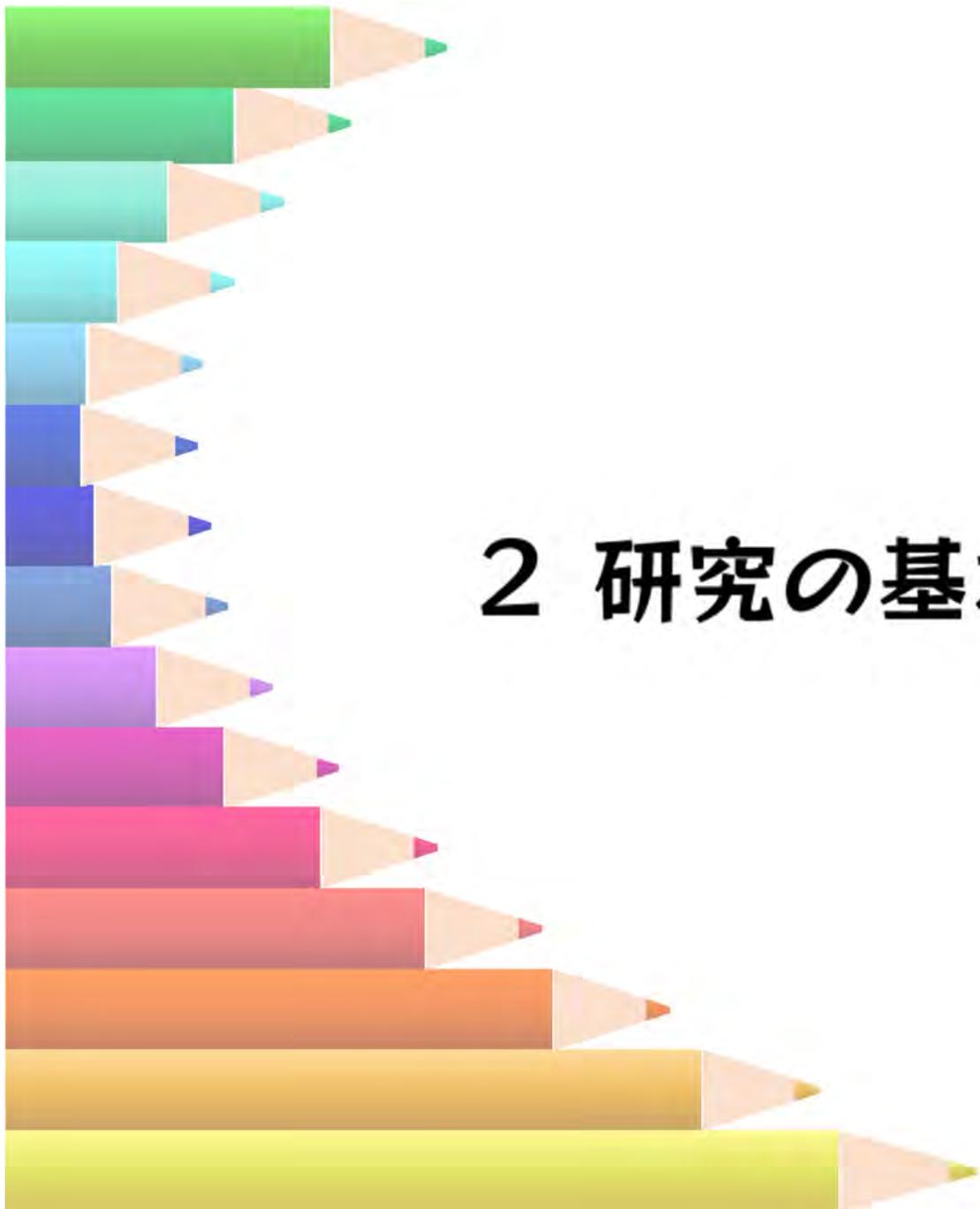
校内研究主任パワーアップ研修〔小学校・中学校〕(全3回)を含む



研究委員の声を生かして創設

研究委員が主体的に学びを進められるように研究を進めました。

2 研究の基本的な考え方



「新たな教師の学びの姿」を実現するには

- 変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという
「主体的な姿勢」

- 求められる知識技能が変わっていくことを意識した
「継続的な学び」

- 新たな領域の専門性を身に付けるなど強みを伸ばすための、一人一人の教師の個性に即した
「個別最適な学び」

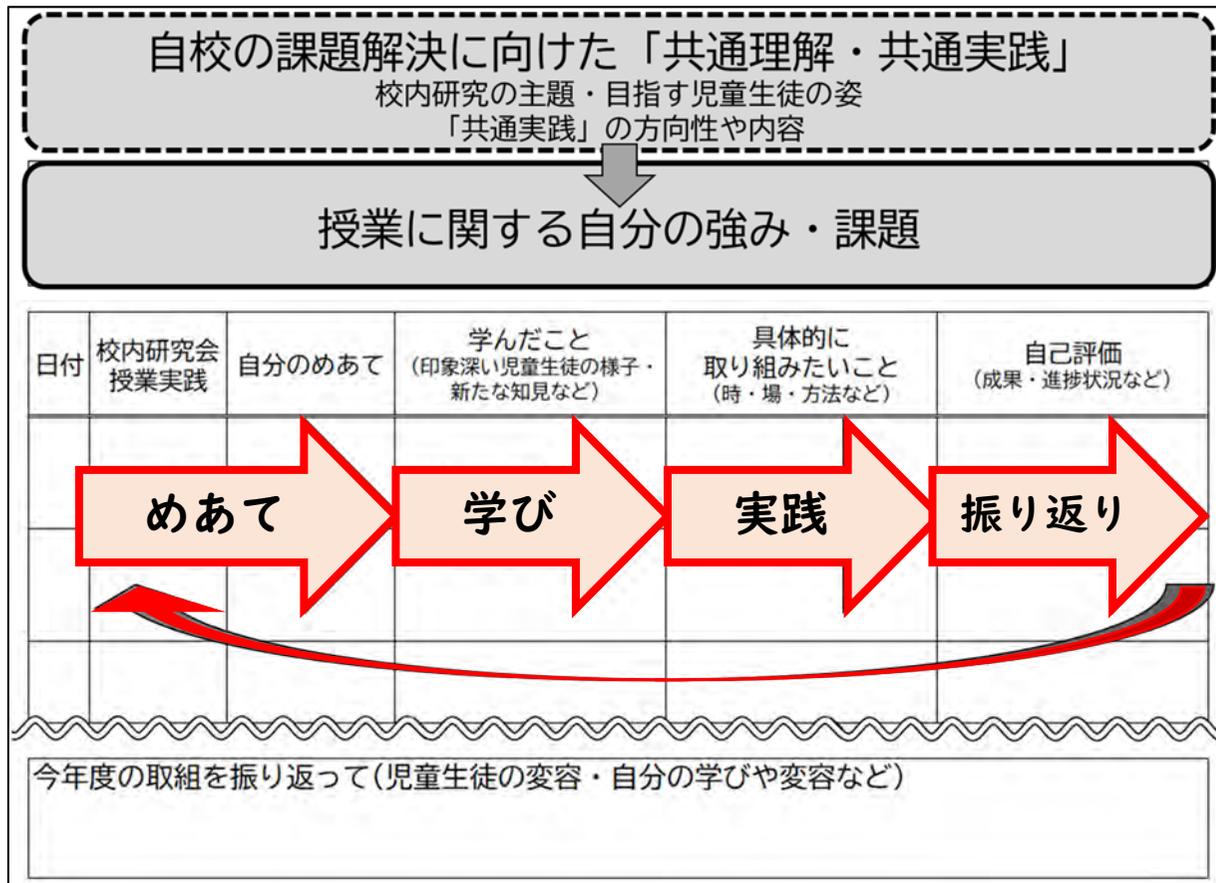
- 他者との対話や振り返りの機会を確保した
「協働的な学び」

一体的な充実を通して、主題の達成を目指す



教員の「個別最適な学び」

教員一人ひとりが強みや個性を生かして学ぶこと。



校内研究での学びと授業改善を往還するというPDCAサイクルを回すために活用する。



「授業アップ
デートシート」
の記入例

「授業アップデートシート」

教員の「協働的な学び」

他者との対話や振り返りの機会を確保し、異なる考え方が組み合わせられることで、「個別最適な学び」に生かされ、よりよい学びを生み出していくこと。



【学校全体で目指す児童生徒の姿】

学校全体で目指す児童生徒の姿

【実践で目指した児童生徒の姿】（ 月 日 時点）

目指す児童生徒の姿

【具体的な実践内容】（実践期間… ）

具体的な実践内容

【実践の成果と課題】

授業中の児童生徒の学びの姿 → 実践の成果・課題

★★★★★★★★★★★★★★ 改善策 ★★★★★★★★★★★★★★

☆次の実践で目指す児童生徒の姿

次の実践で目指す児童生徒の姿

☆次の実践内容（実践期間… ）

次の実践内容・実践期間

授業を参観していない教員とも具体的な手立て等を共有し、異なる考え方を組み合わせるために活用する。



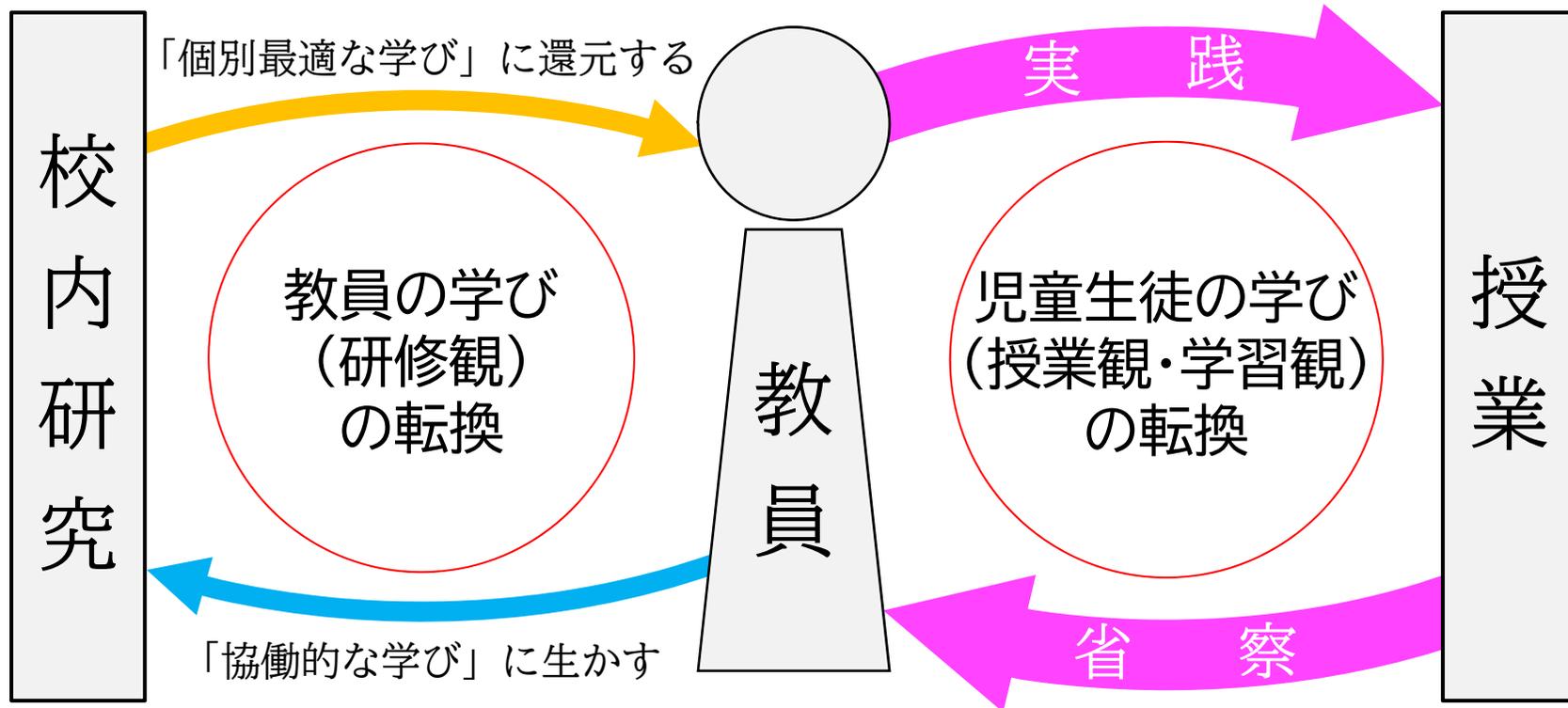
「『共通実践』レビューシート」の記入例

「『共通実践』レビューシート」

教員の「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実と学びの転換

論文
p.3

個人の学びの成果を、対話や振り返りを通じてよりよい学びにつなげ、さらにその成果を個人の学びに還元するサイクルを回すこと。



3 研究の内容とその成果

- 個 「個別最適な学び」が見られた実践
- 協 「協働的な学び」が見られた実践

実践①

「主体的な姿勢」を引き出し、
「個別最適な学び」を支える校内研究

実践① 「主体的な姿勢」を引き出し、「個別最適な学び」を支える校内研究

論文
p.8

W小学校

研究主題

自ら考え、表現できる子どもの育成をめざして
～日常生活と算数をつなぐ授業展開の工夫～

教員一人ひとりが自分事として校内研究に臨み、みんなで学びを積み上げて児童の学びにつなげていきたい！

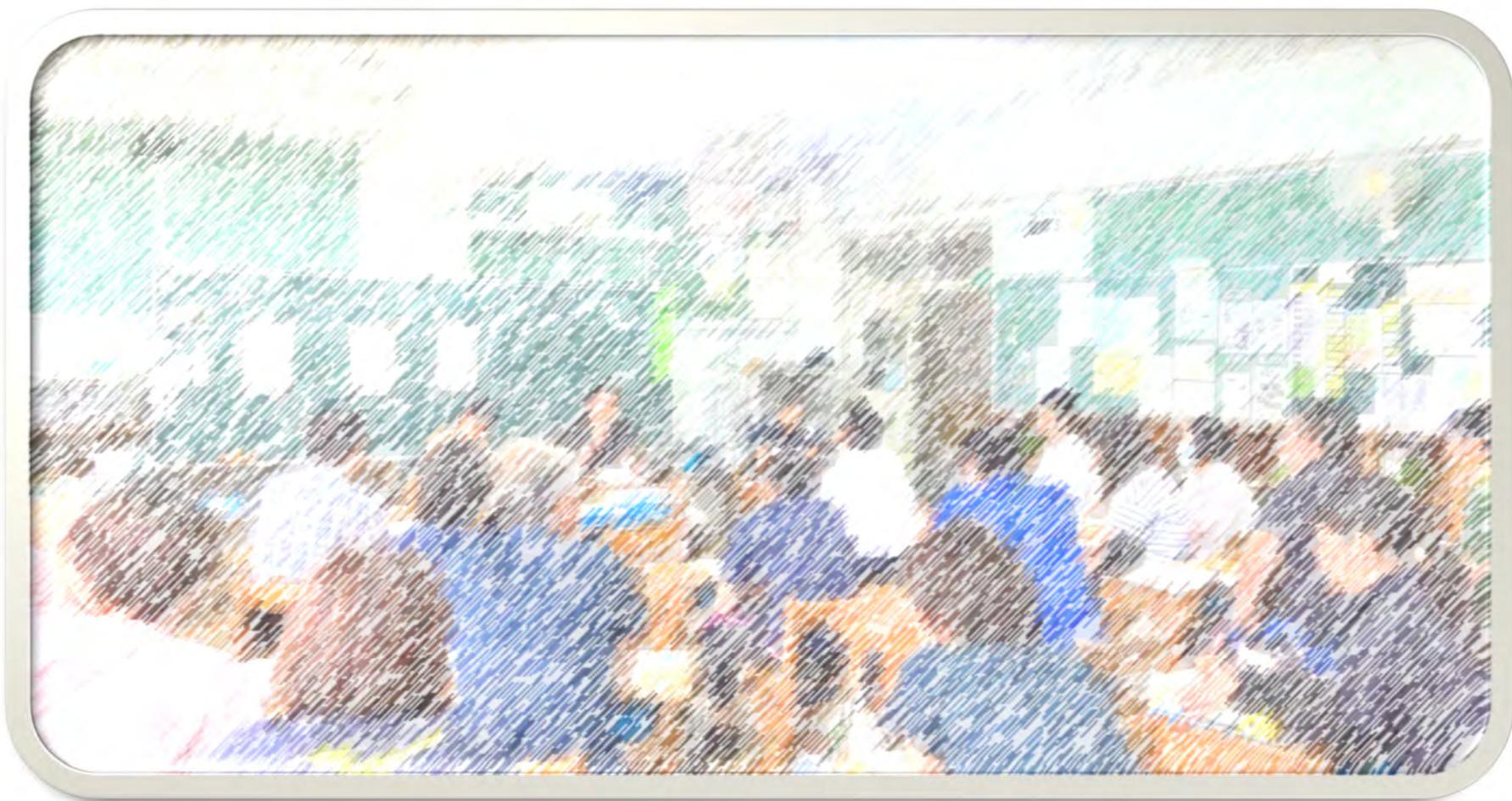
目指す校内研究

教員一人ひとりが「自分事」として捉え、
学びを深められる校内研究



実践① 年度はじめの研究会の様子

論文
p.8



実践① SWOT分析から自校の現状を捉え直す

Strength (強み) :

- ・ 学年間の交流がしやすい。
- ・ ICTに詳しい教員がいる。
- ・ 地域とのつながりが強い。等

Weakness (弱み) :

- ・ 校内研究会や授業研究に意欲的に臨めていない。
- ・ 校内研究での学びが授業に生かされない。

強みを把握して
校内研究運営に生かそう！

弱み(課題)を把握して
教員の成長を促そう！



まずは「主体的な姿勢」を校内研究の取組を通じて引き出していこう！

実践① 校内研究に自分事として取り組めるように

課題①

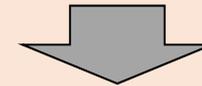
- 校内研究会や授業研究に意欲的に臨めるようにしたい。

校内研究を通じた学びを
教員一人ひとりが自覚し、
「自分事」として取り組ん
でほしいですね。



教員一人ひとりの PDCAサイクル

個



「授業アップデートシート」

授業アップデート 【記入例】		氏名 []			
校内研究の主題	自ら学び、考えを伝え合う児童の育成 ～児童の思考の流れを軸にした授業づくりを通して～				
目指す児童生徒の姿	<ul style="list-style-type: none"> めあてをもって学習する姿 書くことが好きな姿 よく考えて説明できる姿 自分から学ぼうとする姿 				
「共通実践」の方向性や内容	<ul style="list-style-type: none"> 児童の実態に即した課題設定 児童の学びの姿を的確に評価できる評価基準の作成 				
授業に関する自分の強み・課題	強み 1時間の学習の足跡が分かる板書 ICTの活用→導入時の1人1台端末の有効活用(10/13) 課題 話しすぎてしまう。 児童の疑問やつぶやきから授業を展開していくこと。(6/16)				
日付	校内研究 授業実践	自分のめあて	学んだこと (児童生徒の様子、新たな気づきなど)	具体的にに取り組むこと (例、場、方法など)	自己評価 (効果・達成状況など)
4/14	校内研究会①	めあてをもつ	学ぶ	学んだことを生かす(実践する)	振り返る
5/26	授業研究会② 2年生の 授業研究会	本題にせま おらい 発問	学びの足跡が分かる指示 物が有効だと分かった。	児童が「やりたい」「考 みたい」と思えるような課 題で、評価や発問、展開が定	単元の系統性を確認する ようになった。 授業の児童に 身近な課題や形 にするとより
6/16	授業研究会③ 特別支援学級 の授業研究会	生かせる支援の 方法	一目で分かるように示さ れているので、児童が安心 して学習に取り組んでい た。 児童の考えを基にした授 業展開にすることが大切で ある。	示物をつくる。 ゲーム性を取り入れたが ら、「やたくなる」場面 をつくる。 発問や指示、板書など、 無駄を省いて、シンプルに する。	単元計画に沿って提示し た。 できる限り自分の話す時 間・言葉を広げるように している。

実践① 校内研究に自分事として取り組めるように

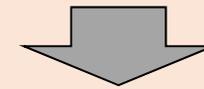
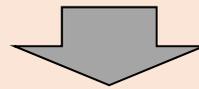
課題①

- ・ 校内研究会や授業研究に意欲的に臨めるようにしたい。

協働的に学ぶ機会を校内研究に設けることで主体的に学ぶことができるようにしました。



学び合う雰囲気をも高める



相互の
授業参観



「サクスシート」**協**

授業者の課題に合わせて、参観者に見てほしいことをリクエスト

授業者の
リクエスト
視点

サクスシート	
日時	令和5年 月 日() 校時
授業者	年 組 先生
リクエスト視点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 交流が活発になる条件の設定や手立て ・ 交流の番号カードを渡すことでグループ作成がスムーズになっていました。新しい取組とのこといいアイデアだなと思いました。 ・ 導入の伝説も反応はよかったのでしょうか？ ・ 遊び心のあるもので楽しそうだなと思いました。

実践① 「個別最適な学び」を支える校内研究

論文
p.8

課題②

- ・ 校内研究での学びを授業に生かせるようにしたい。

似た課題をもつ教員と協議するので、互いの実践等からたくさんのヒントが得られます。



四つのグループを編制

協

「支援の仕方」
「板書の工夫」
「発問、声掛けの工夫」
「交流が活発になる
条件の設定や手立て」



実践① 「個別最適な学び」を支える校内研究

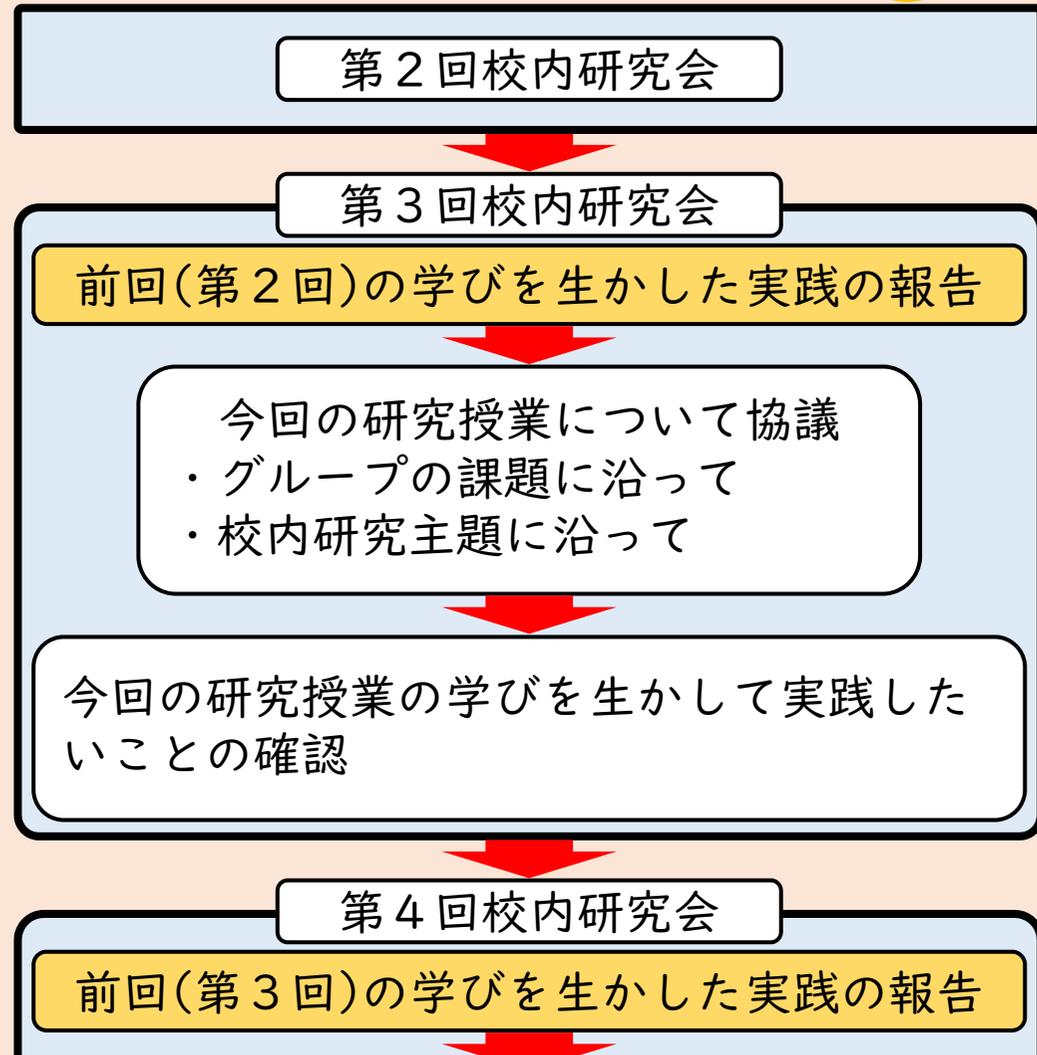
課題②

- ・ 校内研究での学びを授業に生かせるようにしたい。

校内研究会の始まりを実践の報告にすることで同僚がどのように学びを授業に生かしてきたかも共有できました。



校内研究会のもち方 **個**



実践① 11月の校内研究会の様子

論文
p.8

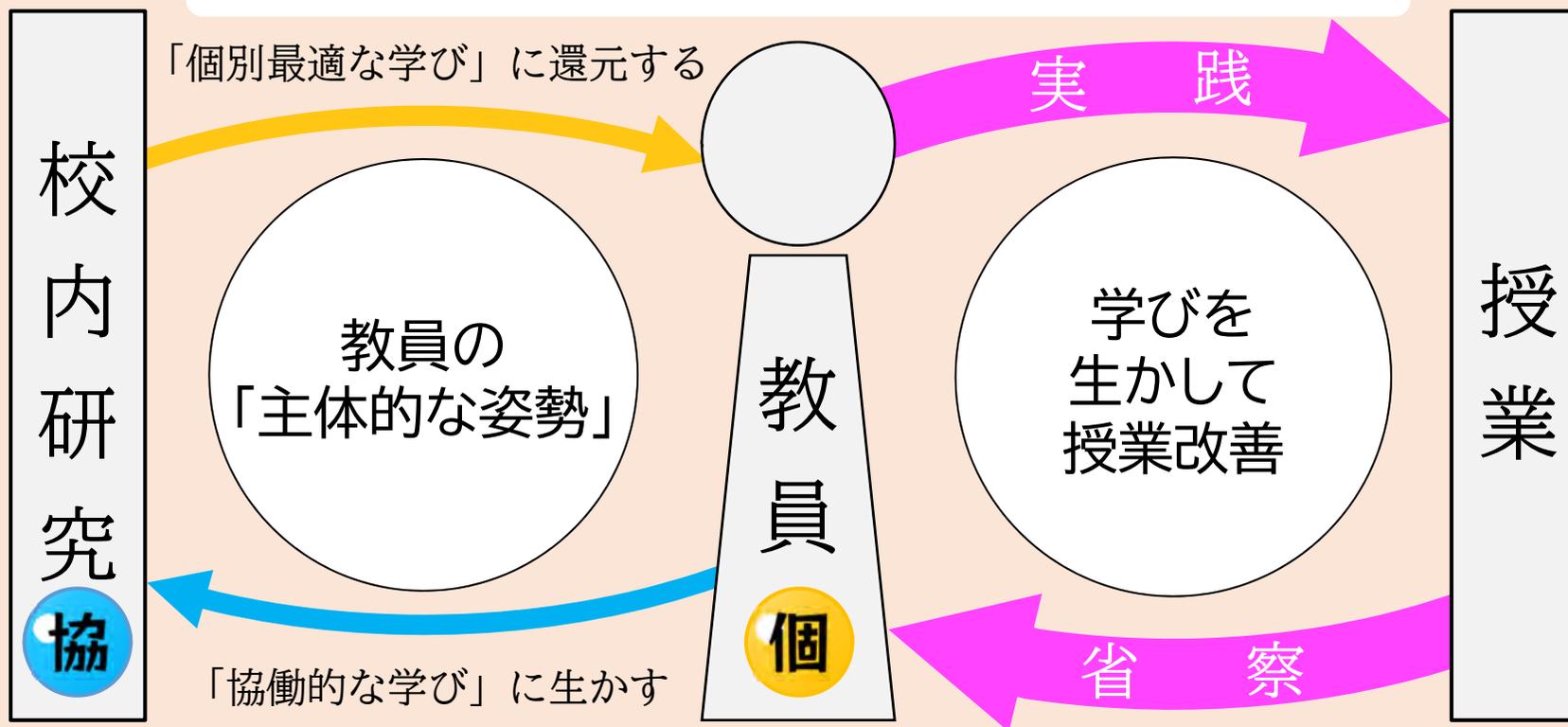
「発問、声かけの工夫」グループ



教員が自身の強みを生かしてグループ内の考えを広げた場面

実践① 実践のまとめ

教員一人ひとりのPDCAサイクル



「教員一人ひとりが『自分事』として捉え、
『個別最適な学び』を支える校内研究」の実現

実践②

「協働的な学び」が「個別最適な学び」
に生かされ、再び「協働的な学び」に
還元される校内研究

実践②

論文
p.10

Y小学校

研究主題

課題に向き合い、他者と交流する中で、
自分の考えを再構築しようとする子どもをめざして

教員一人ひとりが充実した学びを行うことができるように、
様々な取組にチャレンジしたい！

目指す校内研究

「取組がシンプルでわかりやすい」と感じ、
前向きに参加できる校内研究



校内研究主任

実践②

「取組がシンプルでわかりやすい」と感じるために

論文
p.10

教員一人ひとりが目標や課題を把握していること

主体的に校内研究に参加できるように教員同士のつながりをつくること

1学期に取り組んだこと

「自己分析シート」の活用
(「授業アップデートシート」をアレンジしたもの)

個

校内研究・自己分析シート		氏名()	
校内研究の主題	課題に共通しい、共通と交差する中で、相違の考えを再構築しようとする子どもをめざして		
目的や研究主題の意	意義を大切に、自分の考えを固め、深め、再構築する		
「共通実践」の内閣性や内容	互いの思いや考えを相手に正確に伝える力、相手の思いや考えを深く読みとめる力、以上2つの力を高めることに重点を置いて授業づくりをする		
今の自分について	(課題に思っていること・得意に思っていること・もっと伸ばしたいこと)		
日付	校内研究 授業実践	学んだこと (授業の本質・新たな発見など)	具体的に取組むこと (場・場・状況について)
5月14日 5月15日 5月16日			
5月21日	授業実践の 振り返りシート 作成		
5月28日	校内研究 発表会		
5月31日	校内研究 発表会		

協

- 学びの共有を効率化する
→ **ワールドカフェ方式の協議**
- 研究授業を見る力を高める
→ **OJTの活用**
- 校内研究での学びを共有する
→ **研究通信の発行**



実践② | 学期の取組の分析

個

1学期の校内研究の取組が終わった段階で、「『共通実践』レビューシート」を活用して取組を分析

【実践の成果と課題】

教員の具体的な学びの姿

	成果	課題
自己分析シート (個)	<ul style="list-style-type: none"> 自己分析 → 守りの課題はた 	<ul style="list-style-type: none"> 負担に思う教員 ふり返りの時間確保
研究通信	<ul style="list-style-type: none"> 共通理解が図れる → 時間短縮 学年毎に書いていく 	<ul style="list-style-type: none"> 時間をとるの"難"しい (作成の)
7-11市販 (部)	<ul style="list-style-type: none"> 色々の学年の意見を まくと → 学びの広がり 	<ul style="list-style-type: none"> 時間の向、題 最後のまとめ → つみ上げ
OJT	<ul style="list-style-type: none"> 研究を視座の 	

成果
<ul style="list-style-type: none"> 教員同士のつながりを生むことできてきた 個人の課題設定ができてきた 学びの共有、広がり

課題
<ul style="list-style-type: none"> 個人の学びにはおとにみていく 時間のかとは



1学期の取組を振り返り、成果と課題を分析しました。課題がわかったので夏季休業中の実践で改善に取り組みました。

実践②

校内研究での学びを、個人の実践に生かす

論文
p.10

個人の課題をもとに**グループ**を編制 **協**

- ・ 個人の課題解決につなげる
- ・ 校内研究での学びを日々の実践で生かせるようにする



夏季の校内研究会の様子

個別最適な学びに還元

悩んでいる部分を共感できたり、改善策を出し合ったりできたので、いいと感じました。さらに、課題と目標が明確になったので、学びを進めるきっかけとなるよい時間となりました。

個



若手教員H

「話し合ったことで、自分の課題が整理された」「話し合いタイムが一番勉強になった」とプラスの意見を多く聞きました。

先生方に多くの時間を委ね、任せることが、校内研究という学校全体の学びのうえで、最も有効で近道なのではないかと気付かされました。



実践②

校内研究での学びを、個人の実践に生かす

論文
p.10



授業者の学びを、学年の教員で支える
「協働的な学び」の機会の設定を促す

事前授業を通して、どのような手立てが有効かを、
学年で一緒に考えていきましょう！



個

若手教員H
(研究授業の授業者)の
個人目標

児童が自分の
思いを伝える力
を伸ばしたい

協働的な学びに生かす

学年での指導案検討会

児童が自分の思いを伝える
力を伸ばすために、各学級で
様々な手立てに取り組んでみ
ましょう。



協

学年の取組のめあてに組み込んで
日頃から一緒に実践していこう！



個別最適な学びに還元する

協働的な学びに生かす

各学級での
実践



個

実践②

校内研究を振り返った若手教員Hの声

論文
p.10

公開授業を終えた
今の思いを教えてください。

公開授業を終えて
子ども達の様子に
変化は見られますか？



若手教員H

- ・ 事後研究会も学びが得られたが、それ以上に、公開授業までの取組で多くの学びを得ることができた。
- ・ 子ども達の様子を以前と比べてみると、「自分の気持ちを話してみたい」という気持ちが出てきたと感じる。

(若手教員Hへのインタビューより)

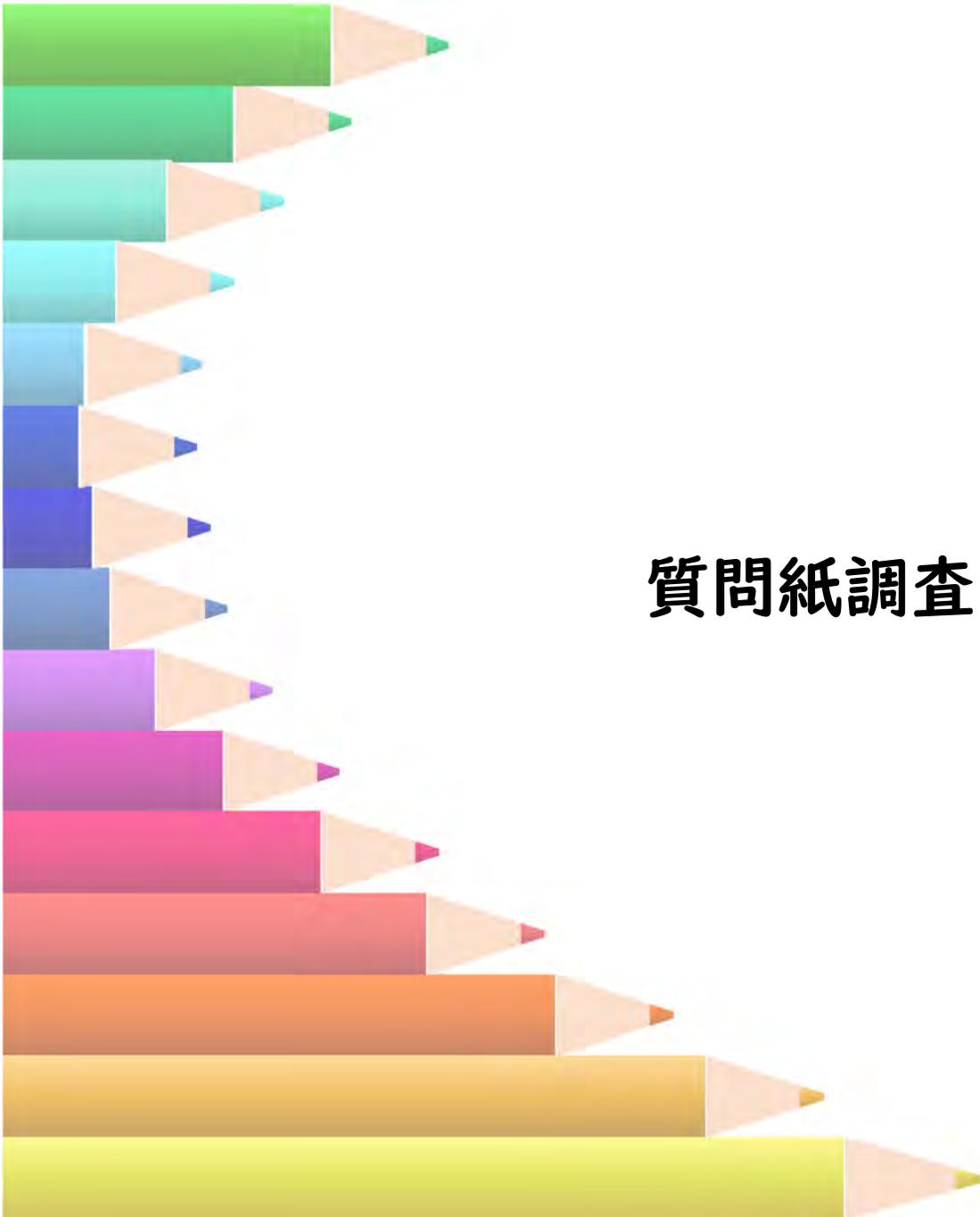
主題設定の理由

研究の基本的な考え方

研究の内容とその成果

研究のまとめ

質問紙調査の結果より



教員の質問紙調査の結果より

	①児童生徒が個別最適に学ぶ姿をイメージできる	②児童生徒が協働的に学ぶ姿をイメージできる	③一体的に充実させることを意識して指導している
第1回 (6月)	81%	91%	52%
第2回 (11月)	92% +11ポイント	91%	58%

* 令和5年度校内研究活性化プロジェクト研究実践校の教員対象質問紙調査の結果
回答総数 第1回：91人 第2回：86人

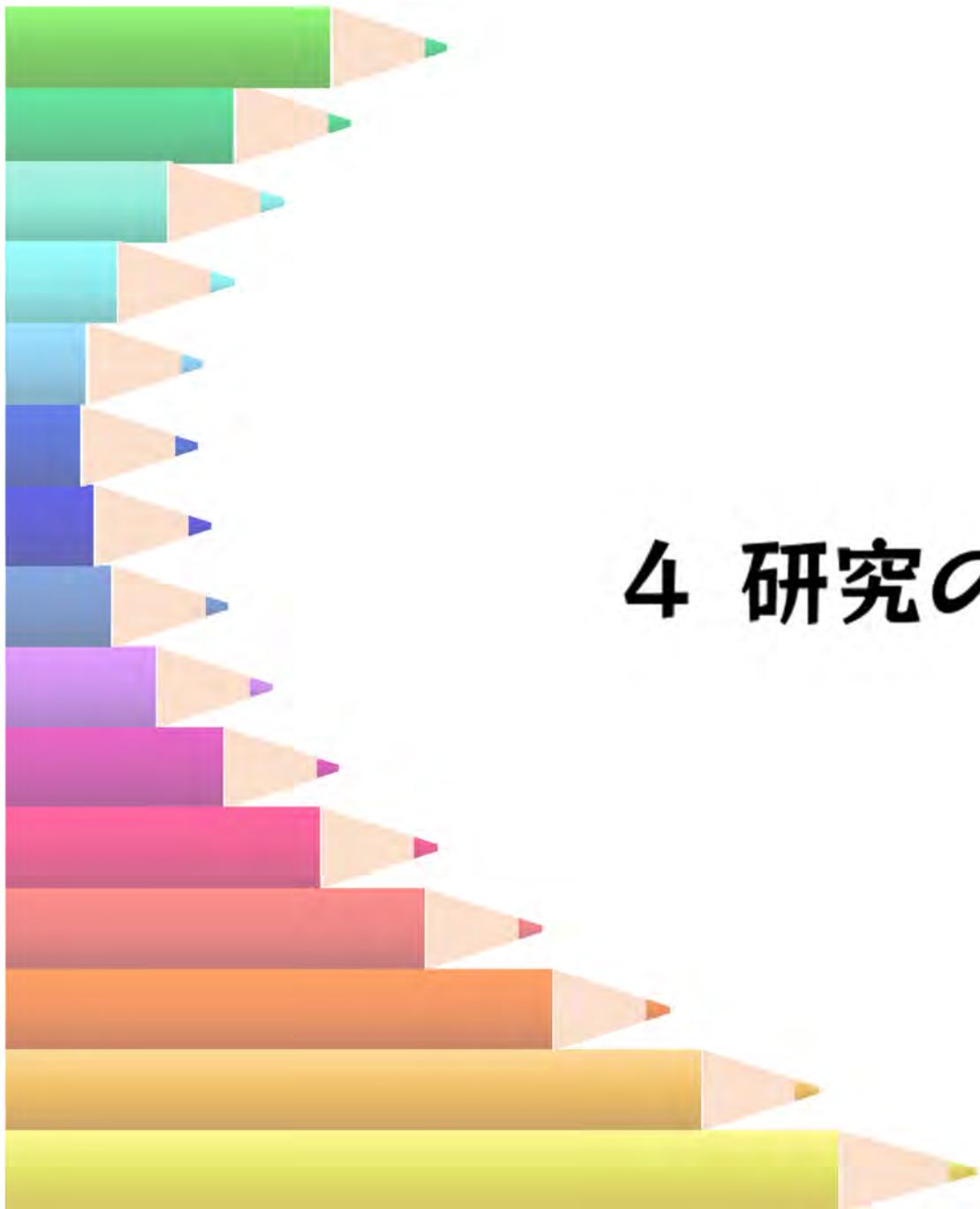
教員の質問紙調査の結果より

	①児童生徒が個別最適に学ぶ姿をイメージできる	②児童生徒が協働的に学ぶ姿をイメージできる	③一体的に充実させることを意識して指導している
第1回 (6月)	81%	91%	52%
第2回 (11月)	92% +11ポイント	91% ±0ポイント	58% +6ポイント

* 令和5年度校内研究活性化プロジェクト研究実践校の教員対象質問紙調査の結果
回答総数 第1回：91人 第2回：86人

児童生徒の「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を意識して指導されている教員が増えた

4 研究のまとめ



本研究の成果

校内研究を自分事として取り組める工夫
「主体的な姿勢」

実践と省察のサイクルを回すこと
「継続的な学び」

教員一人ひとりのニーズに応じた協議の場の設定
「個別最適な学び」と「協働的な学び」
の一体的な充実

教員の学び(研修観)の転換

「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう校内研究

今後の課題

- ①校内研究会での「協働的な学び」を契機として教員の学び(研修観)の転換と授業改善が進み、一部の児童生徒の学びの姿に変容が見られた。今後、主体的・対話的で深い学びの実現に向けてよりよく学ぶ児童生徒の姿を目指して、**校内研究を通じた教員の「個別最適な学び」の充実が必要**だと考える。
- ②「新たな教師の学びの姿」を実現し続けていくためには、校内研究主任のみならず**同じ分掌を一人で担当する教職員同士を学校間でつなぐ**ことのできるICTを活用した仕組みの構築が望まれる。

令和5年度(2023年度) 校内研究活性化プロジェクト研究

「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう、
小・中学校における校内研究のあり方

一教師一人ひとりのニーズに応じた「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を通して＝

内容の要約

本研究では、校内研究の取組を通して「新たな教師の学びの姿」の実現を目指した。校内研究主任が中心となり、各校の実態や校内研究の主題と、教員一人ひとりのニーズとのつながりを見いだすことで、校内研究に「主体的な姿勢」で取り組むことができるように工夫し、研修と実践の仕方を通じて「協働的な学び」を支える取組を行った。校内研究会では、教員の「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して教員同士の学びをつなぐ取組を行った。こうした取組を通して、「新たな教師の学びの姿」の実現は創る校内

①

研究論文

目次

I 主要意の理由	(1)	VI 研究の内容及その成果	(6)
II 研究の目標	(1)	1 研究委員の学びと実践	(6)
III 研究の仮説	(2)	2 本研究での特徴的な学びの機会の確保	(7)
IV 研究についての基本的な考え方	(2)	3 教員の「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実	(8)
1 「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて	(2)	4 児童生徒の学び(授業観・学習観)の転換へとつながる教員の学び(研修観)の転換	(11)
2 教員の学び(研修観)の転換による授業改善とその成果の検証	(4)	5 教員および児童生徒の定着	(13)
3 教員の学び(研修観)の転換を推進するための研修と実践の仕方	(4)	VI 研究のまとめと今後の課題	(14)
4 教員の学び(研修観)の転換に向けた教員と管理職との連携	(5)	1 研究のまとめ	(14)
V 研究の進め方	(5)	2 今後の課題	(18)
1 研究の方法	(5)	文 献	
2 研究の経過	(8)		

道真県総合教育センター
編集 志音 島内 佑輝

各種シート

授業アップデート

氏名 []

校内研究の主題	
校内研究会の中心	
「主体的な姿勢」の取組の取組	
実践に関する取組の取組	
研修	

研修 校内研究 主体的な姿勢 学びの姿 実践に関する取組の取組 主体的な姿勢

新着情報一見

令和5年度校内研究活性化プロジェクト研究

「新たな教師の学びの姿」
の実現に向かう校内研究

主体的な姿勢
個別最適な学び
協働的な学び

リーフレット

校内研究の工夫が
教師を変える

「新たな教師の学びの姿」を校内研究活性化の活動に！
先生の学びにも「個別最適な学び」と「協働的な学び」

9割以上
超え

研究成果・教材・コンテンツ等

センター研究成果情報
最新情報です！ぜひご利用ください！

研究発表会 研究成果

研究成果情報…センターで行ってきた教育研究の成果をご覧ください。

校内研究省察ポスター

学校 校内研究

自己考え、表現できる学びの育成を促して
～児童生徒の学びの姿を支援する～

学校 校内研究

自己考え、表現できる学びの育成を促して
～児童生徒の学びの姿を支援する～

令和5年度 道真県総合教育センター 研究員研修

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第1号 令和5年(2023年)5月29日発行

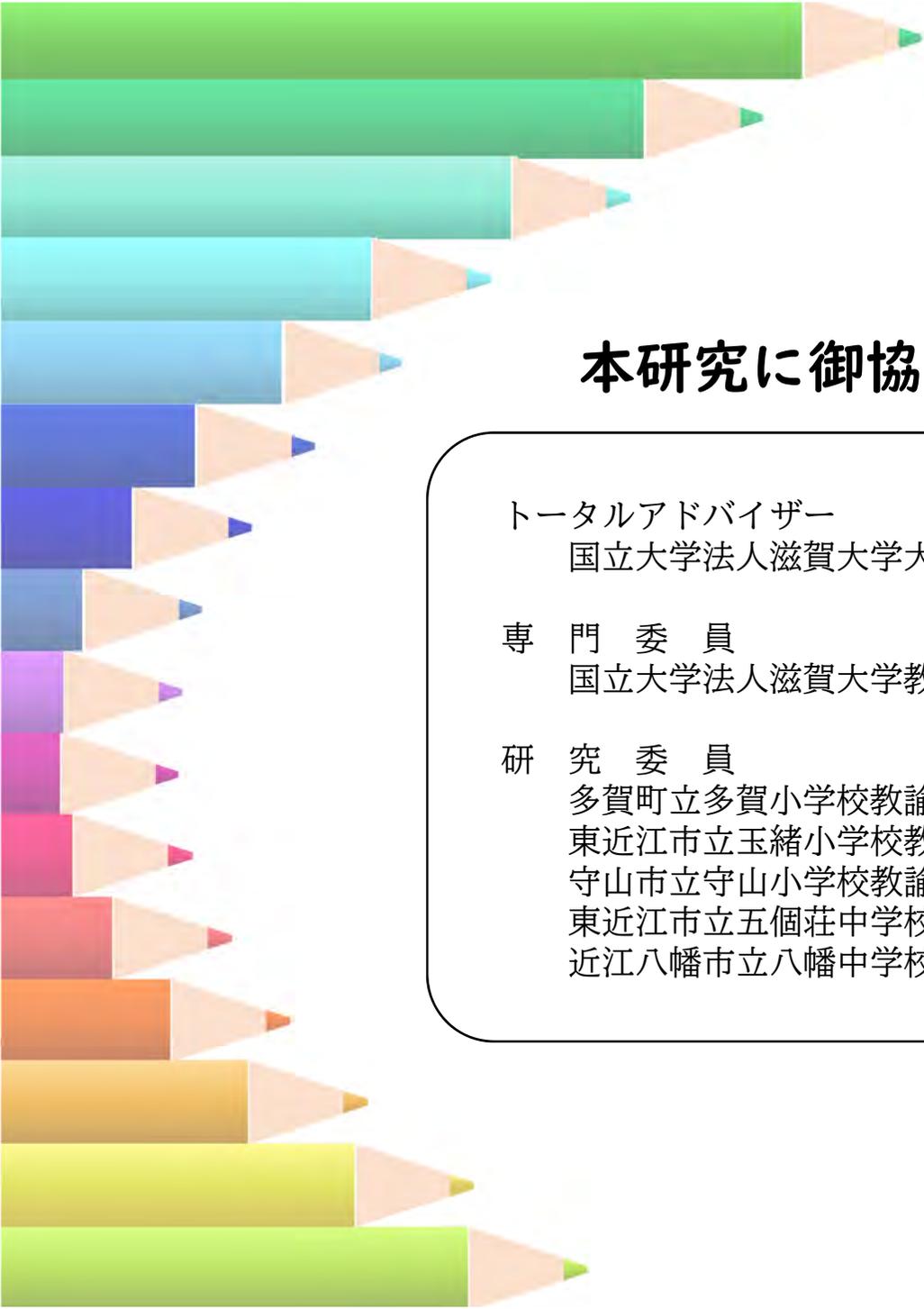
通信が届けられるようになりました。先日は第2回プロジェクト研究会に御参加いただきありがとうございました。今回のプロジェクト研究会でも、校内研究を通して子どもたちを育てていくという研究委員のみなさんの熱意がひびくと伝わってきました。校内研究活性化プロジェクト研究通信(以下、研究通信)では、研究委員の学びの姿を中心に、子どもたちの学びの姿を伝えるために、思いをこめて発信していきます。この通信が研究委員のみなさんの学びの場になるよう、実践のみなさんの校内研究活動の一助となることを目指しています。

プロジェクト研究通信

「個別最適な学び」
●他者の対話や振り返りの機会を確保した

「協働的な学び」

これら2つの姿を合わせた姿が「新たな教師の学びの姿」です。
校内研究を通して、先生方が自身のニーズに応じて主体的に学び、支えることで授業の質が向上し、子どもたちの学びの姿が変化していくことが期待されています。今年度は道真県総合教育センターのプロジェクト研究会を通して実践のみなさんにも発信していきたいと考えています。



本研究に御協力いただいたみなさま

トータルアドバイザー

国立大学法人滋賀大学大学院教育学研究科教授

辻 延浩

専門委員

国立大学法人滋賀大学教育学部附属小学校副校長

楠見丹生子

研究委員

多賀町立多賀小学校教諭

奥村いつ子

東近江市立玉緒小学校教諭

辰巳 彰啓

守山市立守山小学校教諭

井上 理奈

東近江市立五個荘中学校教諭

安居 新

近江八幡市立八幡中学校教諭

西山 晶博